国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第５冊

北岸南遺跡

2017．3

香川県教育委員会

序　文

本書には、国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町東坂元に所在する北岸南遺跡（きたぎしみなみいせき）の報告を収録しています。

北岸南遺跡では、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が出土しました。

縄文時代の遺物は、包含層よりサヌカイト製石器が出土しております。残念ながら当該時期の遺構は確認されなかったのですが、これまで知られていなかった縄文時代の遺跡が、周辺に所在する可能性を示すものとして注目されます。

弥生時代の遺構は、灌漑用水路と考えられる溝群が出土しました。ほぼ同じ位置に、繰り返し開削・改修された様子が伺え、水不足に悩まされていた本地域の水資源に対する強い関心を示す考古資料と考えられます。

中世では、12世紀代の大型建物群が確認されました。本地域の政治的な指導者層の屋敷地と考えられます。本遺跡の北には、中世後半期の方形居館の可能性が考えられている飯山北土居遺跡があり、その前段階の有力者層の屋敷地として、本地域の歴史的展開を考察する上で、重要な資料となることが考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係各機関並びに地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月15日

香川県埋蔵文化財センター
所長　増田　宏

例　言

1　本報告書は、国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴い発掘調査を実施した、香川県丸亀市飯山町東坂元に所在する北岸南遺跡（きたぎしみなみいせき）の報告を収録している。

2　発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間　平成23年9月1日～平成24年1月31日

担当　文化財専門員　蔵本晋司

4　調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。また、石器・石製品の石材の同定に関して、徳島大学総合科学部　村田明広・青矢睦月両氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

香川県土木部道路建設課、香川県中讃土木事務所、丸亀市教育委員会、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

5　報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。

6　本報告書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第Ⅳ系）で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。

7　遺構は次の略号により表示した。

SB　掘立柱建物　　SP　柱穴・小穴　　SK　土坑　　SD　溝　　SX　性格不明遺構

8　遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9　遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。

10　土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11　石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面をA面、右側の面をB面として記述する。剥片石器の場合はA面が背面、B面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。

12　遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

弥生土器：信里芳紀2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集　弥生時代前期末～中

期初頭の動態』，古代学協会四国支部
信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』，香川県埋蔵文化財センター
信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２冊　旧練兵場遺跡Ⅱ』，香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院
大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団
須恵器：　田辺昭三 1981『須恵器大成』，角川書店
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006『年代のものさし　－大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40－』
佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念　考古学論叢』，関西大学文学部考古学研究室
中・近世：尾上実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念　古文化論叢』，藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 18 冊　国分寺楠井遺跡』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』，香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』
乗岡実 2000「中世の備前焼甕（壺）の編年案･紀年銘資料にみる大甕（壺）の変遷」『第２回中近世備前焼研究会資料』，中近世備前焼研究会
乗岡実 2000「備前焼擂鉢の編年について」『第３回中近世備前焼研究会資料』，中近世備前焼研究会
乗岡実 2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』，岡山市教育委員会
藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』，高志書院
森田稔 1986「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第３号，神戸市立博物館
山本悦世 2007「鹿田遺跡における土師質土器椀の編年について」『鹿田遺跡５』，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

本文目次

第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　発掘調査と整理作業の経過 …… 2

第２章　立地と環境

第１節　歴史・地理的環境 …… 3

第３章　調査の成果

第１節　調査の方法 …… 9
第２節　基本層序 …… 10
第３節　遺構・遺物 …… 21

第４章　自然科学的分析の成果

第１節　丸亀市北岸南遺跡における自然科学分析報告 …… 52
第２節　北岸南遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定） …… 62
第３節　埋蔵文化財整理業務（北岸南遺跡）に係る火山灰分析業務報告 …… 65
第４節　北岸南遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定 …… 69

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷について …… 72

挿図目次

第１図　遺跡位置図……1
第２図　周辺地形分類図……5
第３図　遺跡周辺 10cmコンター図……6
第４図　周辺遺跡分布図……7
第５図　試掘時出土遺物実測図……8
第６図　調査区配置図……9
第７図　Ⅰ区調査区西壁土層断面図……11
第８図　Ⅰ区調査区北・南壁土層断面図……12
第９図　Ⅱ区調査区北壁土層断面図……13
第 10 図　Ⅱ区調査区中央・南壁土層断面図……14
第 11 図　包含層Ⅲ出土遺物実測図……15
第 12 図　包含層Ⅱ出土遺物実測図……17
第 13 図　包含層Ⅰ出土遺物実測図……18
第 14 図　包含層等出土遺物実測図……19
第 15 図　Ⅰ区石器ブロック石器分布・出土石器実測図…20
第 16 図　Ⅱ区石器ブロック石器分布図……21
第 17 図　第２遺構面平面図……23
第 18 図　SK01（左）・SD01（右）平・断面図……24
第 19 図　SD03・SD04 平・断面・出土遺物実測図……25
第 20 図　SD05 平・断面・出土遺物実測図……26
第 21 図　SD06 平・断面図……27
第 22 図　SD07 平・断面・出土遺物実測図……28
第 23 図　SD08 平・断面・出土遺物実測図……29
第 24 図　SD09 平・断面図……30
第 25 図　SD10 平・断面図……31
第 26 図　溝変遷図……32
第 27 図　SX01 平・断面図……32
第 28 図　耕作痕群平・断面・出土遺物実測図……33
第 29 図　SD11 平・断面図……34
第 30 図　SX02（左）・SX03（右）平・断面・出土遺物実測図……35
第 31 図　SX04（左）・SX05（右）平・断面図……36
第 32 図　SX06 平・断面図……37
第 33 図　第１遺構面平面図……38
第 34 図　SB01 平・断面・出土遺物実測図……39 ～ 40
第 35 図　SB02 平・断面図……41
第 36 図　SB02 遺物出土状況・出土遺物実測図……42
第 37 図　SB03 平・断面・出土遺物実測図……43
第 38 図　SB04 平・断面図……44
第 39 図　SB05 平・断面・出土遺物実測図……45
第 40 図　SB06 平・断面・出土遺物実測図……46
第 41 図　SP31・SP52 平・断面・出土遺物実測図……47
第 42 図　柱穴出土遺物実測図……47
第 43 図　SK03 平・断面図……47
第 44 図　SD12 平・断面・出土遺物実測図……48
第 45 図　SD13 平・断面図……49
第 46 図　SD14・SD15・SD16 平・断面・出土遺物実測図 50
第 47 図　SK02 平・断面・出土遺物実測図……50
第 48 図　北岸南遺跡Ⅰ区におけるプラント・オパール分析結果……57
第 49 図　北岸南遺跡Ⅰ区における花粉ダイアグラム……59
第 50 図　[参考] 暦年較正年代グラフ……64
第 51 図　重軽鉱物組成……67
第 52 図　火山ガラス屈折率……67
第 53 図　粒度別重量比……67
第 54 図　サヌカイト産地推定判別図（１）……71
第 55 図　サヌカイト産地推定判別図（２）……71
第 56 図　遺構変遷図１……73
第 57 図　遺構変遷図２……75

表目次

第１表　石器ブロック出土サヌカイト一覧……22
第２表　北岸南遺跡におけるプラント・オパール分析結果……56
第３表　北岸南遺跡における花粉分析結果……58
第４表　放射性炭素年代測定結果１……63
第５表　放射性炭素年代測定結果２……63
第６表　重軽鉱物組成分析結果……67
第７表　砂の粒径別重量（ｇ）……67
第８表　分析対象……69
第９表　原石採取地と判別群名称……69
第 10 表　分析値および産地推定結果……70
第 11 表　掘立柱建物属性表（１）……76
第 12 表　掘立柱建物属性表（２）……77
第 13 表　掘立柱建物属性表（３）……78
第 14 表　土器観察表（１）……78
第 15 表　土器観察表（２）……79
第 16 表　土器観察表（３）……80
第 17 表　土器観察表（４）……81
第 18 表　土器観察表（５）……82
第 19 表　土器観察表（６）……83
第 20 表　土器観察表（７）……84
第 21 表　平瓦観察表……84
第 22 表　石器観察表……85

写真目次

写真１　大東川段丘崖（遺跡東方・南より）…… 4
写真２　旧河道Ａ（遺跡西方・北より）…… 4
写真３　大東川現流路（遺跡東南方・北より）…… 4
写真４　Ⅱ区深掘りトレンチ土層断面…… 16
図版１　北岸南遺跡のプラント・オパール顕微鏡写真… 60
図版２　北岸南遺跡の花粉・胞子顕微鏡写真…… 61
図版３　北岸南遺跡Ⅰ区黄褐色粘土（包含層Ⅳ）試料
　　中の火山ガラス重鉱物顕微鏡写真…… 68
図版４　遺構写真…… 88
　　Ⅰ区　SB01 ～ 03 全景（南より）
図版５　遺構写真…… 89
　　Ⅰ区　岸の上遺跡方向遠望（北より）
図版６　遺構写真…… 90
　　Ⅰ区西半１面全景（北より）
図版７　遺構写真…… 91
　　Ⅰ区全景（南より）
図版８　遺構写真…… 92
　　Ⅰ区　第２面全景（北より）
図版９　遺構写真…… 93
　　Ⅰ区　第２面全景（南より）
図版 10　遺構写真…… 94
　　Ⅱ区　第２面全景（北より）
図版 11　遺構写真…… 95
　　Ⅱ区　第２面全景（北より）
　　飯野山より遺跡遠望（北より）
図版 12　遺構写真…… 96
　　Ⅱ区　中央南北土層断面（北西より）
　　Ⅰ区　調査区西壁（SP48）土層断面（東より）
　　Ⅰ区　調査区南壁土層断面（北東より）
図版 13　遺構写真…… 97
　　Ⅰ区　第３面全景（西より）
　　Ⅰ区　石器ブロック遺物（117）出土状況（北より）
　　Ⅱ区　石器ブロック遺物（119）出土状況（南より）
図版 14　遺構写真…… 98
　　Ⅰ区　SD03・SD04 全景（東より）
　　Ⅰ区　SD04（調査区西壁）土層断面（東より）
　　Ⅰ区　SD04・D 断面（西より）
図版 15　遺構写真…… 99
　　Ⅰ区　SD03（調査区西壁）土層断面（東より）
　　Ⅰ区　SD03・A 土層断面（東より）
　　Ⅱ区　SD07 遺物（130）出土状況（北より）
図版 16　遺構写真…… 100
　　Ⅱ区　SD05 下層遺物（129）出土状況（東より）
　　Ⅱ区　SD08 遺物（136）出土状況（北より）
　　Ⅰ区　耕作痕検出状況（南西より）
図版 17　遺構写真…… 101
　　Ⅰ区　SB02・03 全景（北より）
　　Ⅰ区　SB01 全景（東より）
　　Ⅰ区　SB01 ～ 03 全景（南より）
図版 18　遺構写真…… 102
　　Ⅰ区　SB02 ～ 04 全景（南より）
　　Ⅱ区　SB06 全景（北より）
　　Ⅱ区　SB05 全景（北より）
図版 19　遺構写真…… 103
　　Ⅰ区　SP31・SP52 遺物出土状況（北より）
　　Ⅰ区　SB02（SP11）遺物出土状況（南より）
　　Ⅰ区　SB02（SP23）遺物出土状況（南より）
図版 20　遺構写真…… 104
　　Ⅰ区　SB01（SP34）柱材出土状況（南より）
　　Ⅰ区　SP25 柱材出土状況（東より）
　　Ⅱ区　SP88 遺物（176）出土状況（北より）
図版 21　遺構写真…… 105
　　Ⅰ区　SP77 詰石出土状況（南より）
　　Ⅰ区　SP75 詰石出土状況（北より）
　　遺跡遠景（南より）
図版 22　遺物写真…… 106
　　97・144・146・150・160・171・176・179
図版 23　遺物写真…… 107
　　２・13・14・15・16・17・18・19・20・21・78・
　　79・80・113・117・118・119・124・125・128・
　　129・133・134・135・137・138・140・162・S1・
　　S8・S26・S27・S29・S31・S32

付図目次

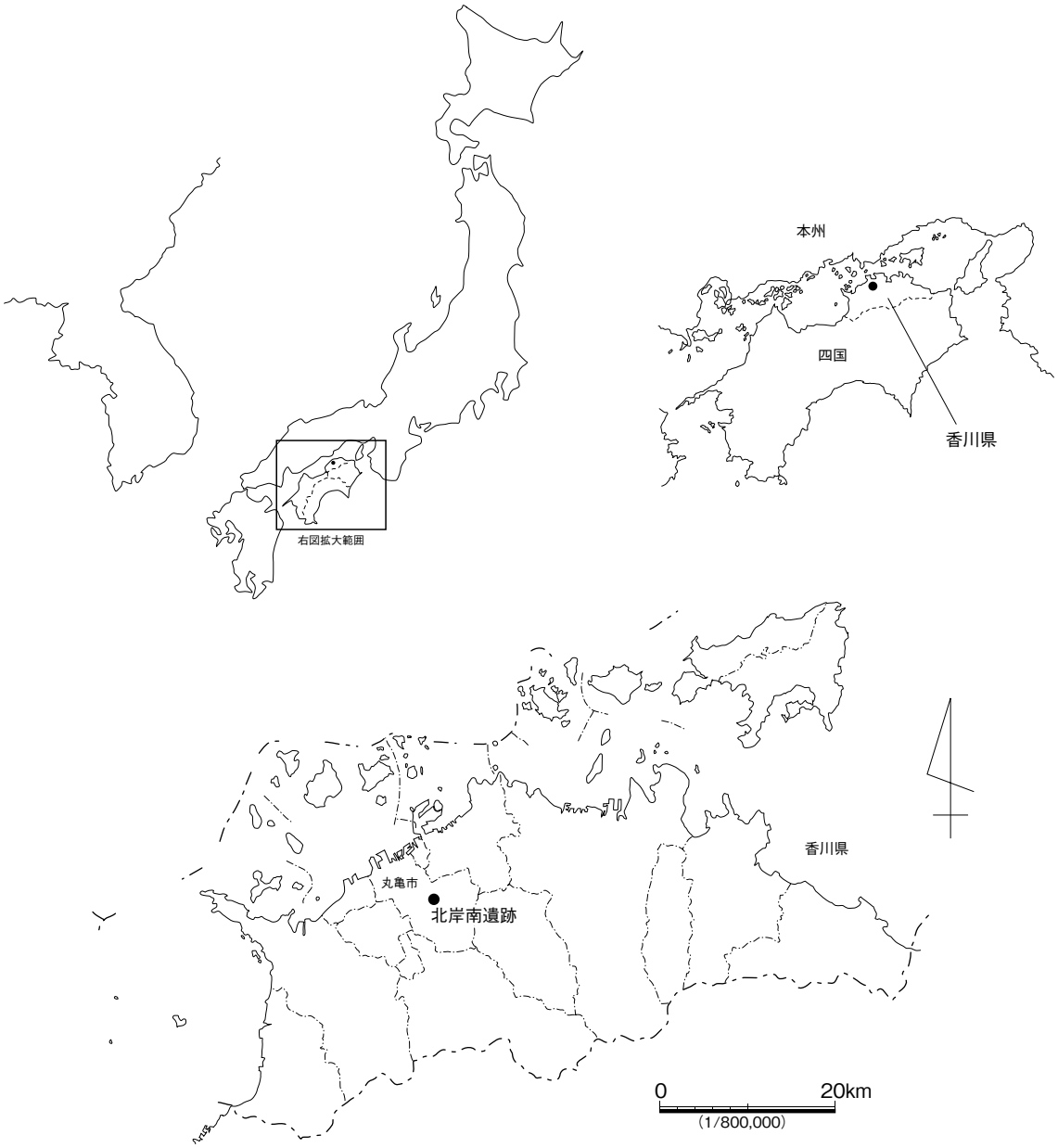
付図１　北岸南遺跡平面図

第１章　調査にいたる経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

国道 438 号は、香川県坂出市と徳島県徳島市を結ぶ主要幹線道路である。近年の交通量の増加による慢性的な交通渋滞やそれに起因する交通事故の抑止を目的として、香川県土木部道路建設課（現・道路課）では、同路線の改築事業を計画した。これをうけて香川県教育委員会では、同路線周辺には多くの埋蔵文化財包蔵地が所在していることから、平成５年度から道路建設課と協議を重ね、その適切な保護に努めてきた。

こうした中、今回報告する北岸南遺跡が所在する丸亀平野東縁部については、安定した平地が広がり、



第１図　遺跡位置図

未知の包蔵地の所在が予想されたことから、国道 438 号（飯山工区）道路改築事業にかかる用地のうち、丸亀市飯山町川原地区周辺の工区について、香川県教育委員会により平成 22 年度に試掘調査を実施した。調査の結果、対象地中央部の 2,100㎡において、弥生時代から中世の遺構・遺物を確認し、北岸南遺跡として事前の保護処置が必要と判断された。これをうけて香川県教育委員会は、香川県埋蔵文化財センター（以下埋文センターと略す）及び道路建設課と協議を進め、翌平成 23 年度に埋文センターが発掘調査を実施することで合意した。なお、試掘調査の内容については、報告書（香川県教育委員会 2012）を参照されたい。また、試掘調査時に出土した遺物を、第５図に掲載した。

第２節　発掘調査と整理作業の経過

平成 23 年４月１日、香川県教育委員会は道路建設課との間で「道路事業における埋蔵文化財発掘調査業務に関する協定書」を締結し、本遺跡の調査を同年９月１日より５ヶ月の予定で発掘調査を実施することとした。

発掘調査は直営方式により実施した。調査は、現場事務所や安全柵設置等の事前準備が整った９月 15 日より開始した。11 月 15 日には、地元飯山北小学校６学年の教諭・児童 123 名を対象に、遺跡見学と発掘体験学習会を実施した。また、11 月 26 日には県民一般を対象とした、Ⅰ区の掘立柱建物についての現地説明会を開催し、61 名の参加を得た。翌平成 24 年１月 27 日には現場での調査を終え、31 日に事務所を撤収し、すべての現地業務を終了した。

整理作業は、平成 27 年４月１日から６月 30 日に埋文センターにおいて実施した。遺物の接合･図化･写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28㌔㍑入りコンテナ 18 箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺

平成 23 年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局　生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	炭井　宏秋	総括	所長	藤好　史郎
	課長補佐（総括）	亀山　隆		次長	真鍋　正彦
総務・生涯学習推進グループ			総務課	総務課長	真鍋　正彦（兼務）
	副主幹	香西　としみ		副主幹	林　文夫
	主任主事	丸山　千晶		主任	古市　和子
文化財グループ				主任	中川　美江
	課長補佐	西岡　達哉		主任	高木　秀哉
	主任文化財専門員	森下　英治		主任	広瀬　健一
	文化財専門員	松本　和彦	調査課	調査課長	森　格也
				文化財専門員	蔵本　晋司
				嘱託（土木）	砂川　哲夫
				嘱託（調査技術員）	塩冶　千佳子

平成 27 年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局　生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田　宏	総括	所長	真鍋　昌宏
	副課長	小柳　和代		次長	前田　和也
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長	前田　和也（兼務）
	副主幹	松下　由美子		主任	寺岡　仁美
	主事	和木　麻佳		主任	高木　秀哉
文化財グループ				主任	中川　美江
	課長補佐	片桐　孝浩		主任	丸尾　麻知子
	主任文化財専門員	山下　平重		主任	岩崎　昌平

文化財専門員	乗松　真也	調査課	課長	森　格也
			主任文化財専門員	蔵本　晋司
			嘱託	市川　孝子
			嘱託	猪木原　美恵子
			嘱託	甲斐　美智子
			嘱託	葛西　薫
			嘱託	香西　栄理
			嘱託	高橋　千恵
			嘱託	森　后代
			嘱託	山地　眞理子

物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は下記のとおりである。

第２章　立地と環境

第１節　歴史・地理的環境

遺跡は、丸亀市飯山町川原 189 番地ほかに所在し、調査前の地目は水田等の耕作地であった。遺跡が所在する丸亀平野は、東西約 13㎞、南北約 10㎞の扇状地性の海岸平野で、香川県中央部に位置し、東より大束川・土器川・金倉川などの中小河川が瀬戸内海に流入する。平野部東西は、それぞれ瀬戸内海に突出した標高約 400 ｍの五色台山地と、標高 381 ｍの弥谷山丘陵等の山塊によって画され、また南縁は岡田・高屋原・仲南といった上位及び下位段丘が取り巻き、北の瀬戸内海に開けた地形環境を呈する。また、平野部内には標高 200 ～ 400 ｍ程度の中小独立丘陵が散在し、これらの基底部は領家花崗岩類よりなり、頂部付近には讃岐岩質の安山岩が分布する。遺跡は平野東部、ビュート状の山塊である標高 421.9 ｍの飯野山南麓の、標高約 18 ｍの北に緩やかに傾斜する平地上に立地する。

遺跡は、主に土器川によって形成された扇状地の北縁部に位置（第２図）し、その北方には飯野山との間に小規模な沖積平野が展開する。

遺跡周辺、土器側右岸の扇状地の扇面面積は約５㎢、遺跡周辺での勾配は 5.7‰と、緩傾斜扇状地上に遺跡は立地する。扇状地礫層の上面は、高松平野でも想定されている（木下 1992）ように、比高２～３ｍの波状の起伏をなしている可能性があり、凹地部分は扇状地の旧中州間の網状流跡・旧低水路と考えられる。第３章第２節で詳述するように、その上面、主に旧中州間の凹地部は、粗砂～シルトといった比較的細粒の堆積物で覆われている。

本遺跡では、この細粒堆積層の最上位層よりサヌカイト製石器が出土し、同層中からは鬼界アカホヤ火山灰の２次堆積が確認された。また、同様に扇状地北縁部に立地する善通寺市永井遺跡では、最上位層から縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。細粒堆積層の堆積時期の下限が、縄文時代後期に下るとともに、遺跡周辺で細粒堆積層中に縄文時代の遺跡が埋もれている可能性を示唆するものと考える。

なお、飯野山東麓には更新世段丘が認められ、近接する東坂元三ノ池遺跡では、後世の遺構への混入資料だが、少量のナイフ形石器や翼状剥片石核が出土した。今後飯野山周辺や大束川東岸の段丘部の調査が進展すれば、当該期の遺跡が確認されるものと思われる。

さて、遺跡が立地する扇状地面は、微細な起伏が顕著に認められ、必ずしも平坦な地形面を呈していない。第３図に示されるように、それら凹地は平地面を樹枝状に走行し、埋没旧河道ないしは低地帯と

写真１　大束川段丘崖（遺跡東方・南より）

写真２　旧河道Ａ（遺跡西方・北より）

写真３　大束川現流路（遺跡東南方・北より）

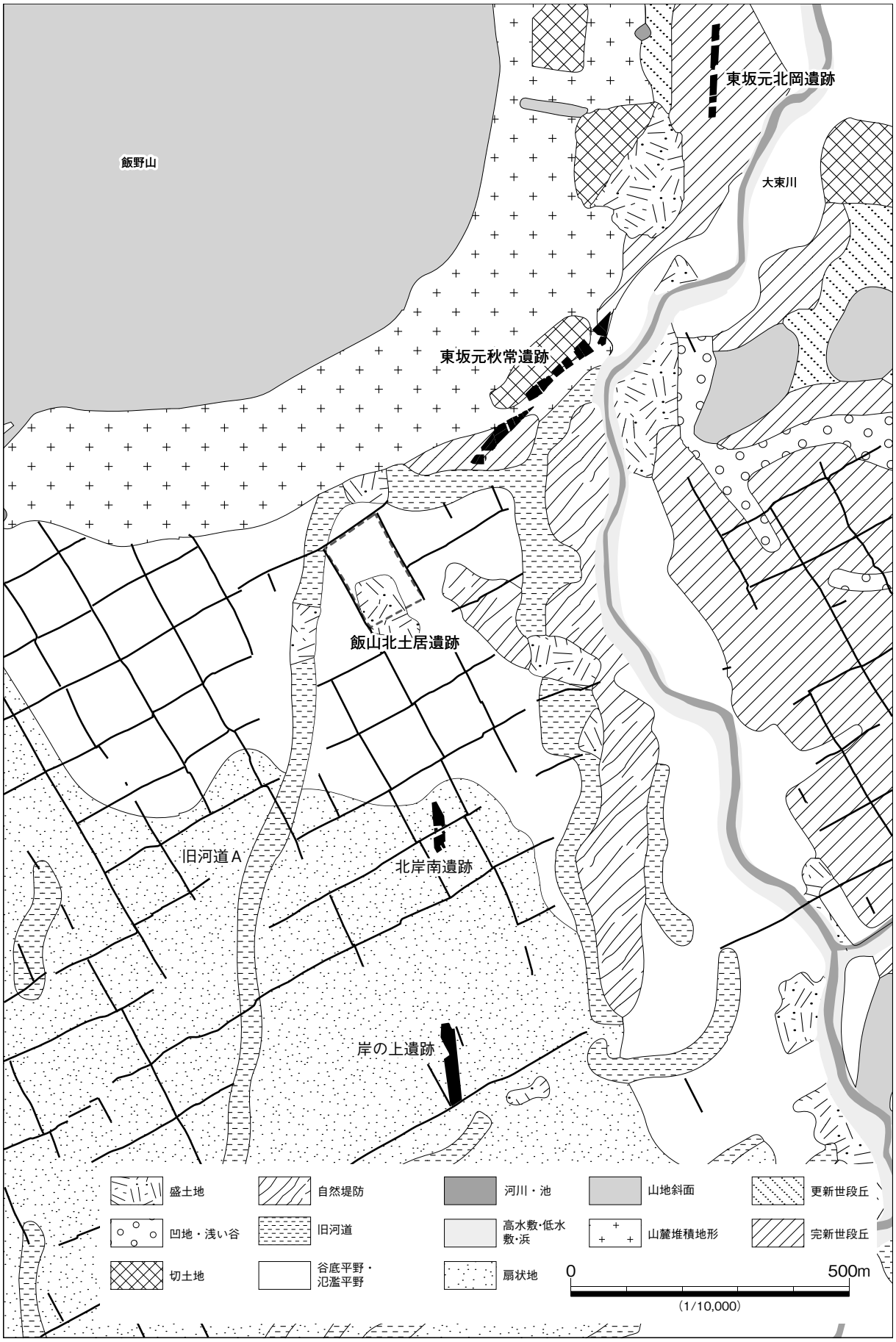
考えられる。これら旧河道･低地帯間は、不整な紡錘形を呈する見かけ上の微高地を形成し、広狭さまざまな微高地が、平地面上をパッチワーク状に広がる景観が展開する。

遺跡周辺では、第３図に示したように、低地もしくは旧河道がⅡ区からⅠ区西部にかけて南北に走行し、Ⅰ区東部以北に狭小な微高地が展開する。次章で詳述する包含層Ⅰ～Ⅲ層は、この低地帯の埋土の一部と考えられ、Ⅰ区西部からⅡ区にかけて堆積する。

こうした微地形は、少なからず遺跡の立地にも影響を与えたことが想像され、より広い微高地を中心に弥生時代以降の集落が経営され、埋没の進んだ旧河道や低地帯は、水田等の耕作域として利用されたと考えられる。また､微高地間を横･縦断するように幹線水路が整備され、それから派生する枝水路が各耕地へと用水を供給したのであろう。本遺跡の調査では、弥生時代終末期前後における、そうした灌漑水路網の一端を検出した。

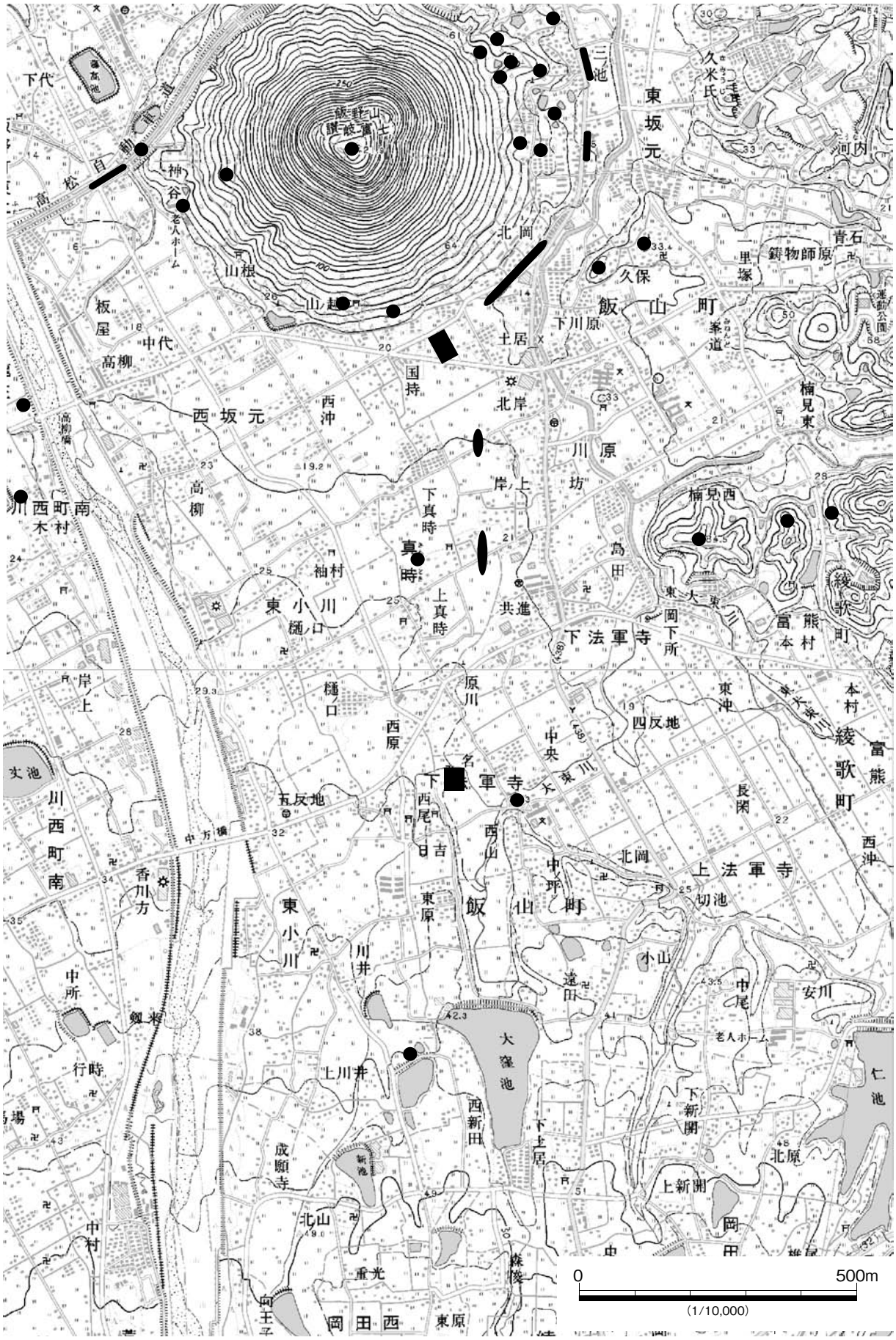
当該期の集落は遺跡周辺では不明瞭だが、近年の岸の上遺跡の調査で古墳時代後期の竪穴建物が多数検出され、また飯野山や遺跡東部の丘陵上には、前～後期の古墳が多数分布する。

律令体制という一定度成熟した国家の形成は、集約的な労働力の編成を可能とし、こうした自然地形に規制された土地利用のあり方を、ある程度克服したと想像される。岸の上遺跡では古代南海道と推定される遺構が検出され、それを基準にした、いわゆる条里型地割が平地部上に広く展開する。さらに遺跡南部の法勲寺周辺では、条里型地割に先行するとされる正方位地割の遺存が確認される。しかし、こうした地割の施工は、必ずしも平地部一円に施工されたのではなく、豪族居館や官衙的性格の施設周辺など、開発に



第２図　周辺地形分類図（国土地理院の電子地図（数値地図 2500（土地条件））を 25%縮小し、遺跡位置を追記して掲載）

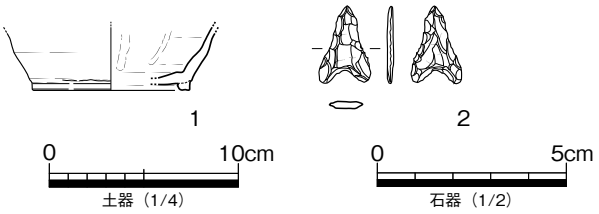
第３図　遺跡周辺 10㎝コンター図（丸亀市都市計画図を 62.5％縮小し、一部を加工して利用）



第４図　周辺遺跡分布図（国土地理院の電子地形図 25000「丸亀」を 250％拡大し、遺跡位置を追記して掲載）

有利な地点を選んで、爬行的になされたことが想像される。

本遺跡でも、２区北部で正方位に配された溝が検出された。遺跡南方に所在し、推定南海道に隣接する岸の上遺跡、あるいは正方位を志向して建立された法勲寺を核とした開発エリアの北限を示すものと評価されよう。



第５図　試掘時出土遺物実測図

また、東西に走行する南海道とそれに直交して北流する大束川・土器川の両河川の渡河点には、陸上交通と水上交通の結節点として物資の集散地などの施設が設けられた可能性も考えられる。

こうした状況が大きく変化するのは中世初頭である。遺跡の東西を北流する土器川や大束川の河床の下刻により、遺跡の立地する扇状地面や谷底平野が段丘化し、高燥化した（木下 1995）ことが大きな要因である。以前の用水網には大きな変更が迫られたが、それと引き換えに安定した可耕地が広域にもたらされることになり、乾田化により収穫量の増加も大きなものが予想される。

次章で詳述する包含層Ⅰ～Ⅲ層は、Ⅱ区からⅠ区西部にかけて南北に走行する低地帯の埋土の一部と考えられる。その時期的下限は 11 世紀中葉～後葉にあり、段丘形成により低地帯の埋没が停止した年代を示す。本遺跡で確認された中世初頭の大型建物によって構成される屋敷地は、こうした埋没の停止した低地帯の一部を取り込んで配置される。その造営主体は、上述した自然環境の変化に順応して農業経営に成功した富農層であった可能性も考えられる。

当該期の遺跡は、例えば 13 世紀の屋敷地は東坂元秋常遺跡で検出され、飯山北土居遺跡では居館の堀とみられる遺構が検出されている。寺院は、文献史料に法勲寺のほか、島田寺や三谷寺が新たに建立されたことが記され、平地部には中世石造物が散在している。こうした遺跡の調査より、本地域の開発が、当該期に大きく進展したことを物語ると考える。

引用文献
香川県教育委員会 2012『埋蔵文化財試掘調査報告ＸＸⅣ　平成 22 年度　香川県内遺跡発掘調査』
木下晴一 1992「遺跡の地理的環境」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成３年度』, 香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター
木下晴一 1995「大束川流域の段丘崖」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第 16 冊　川津二代取遺跡』, 香川県教育委員会・㈶香川県埋蔵文化財調査センター

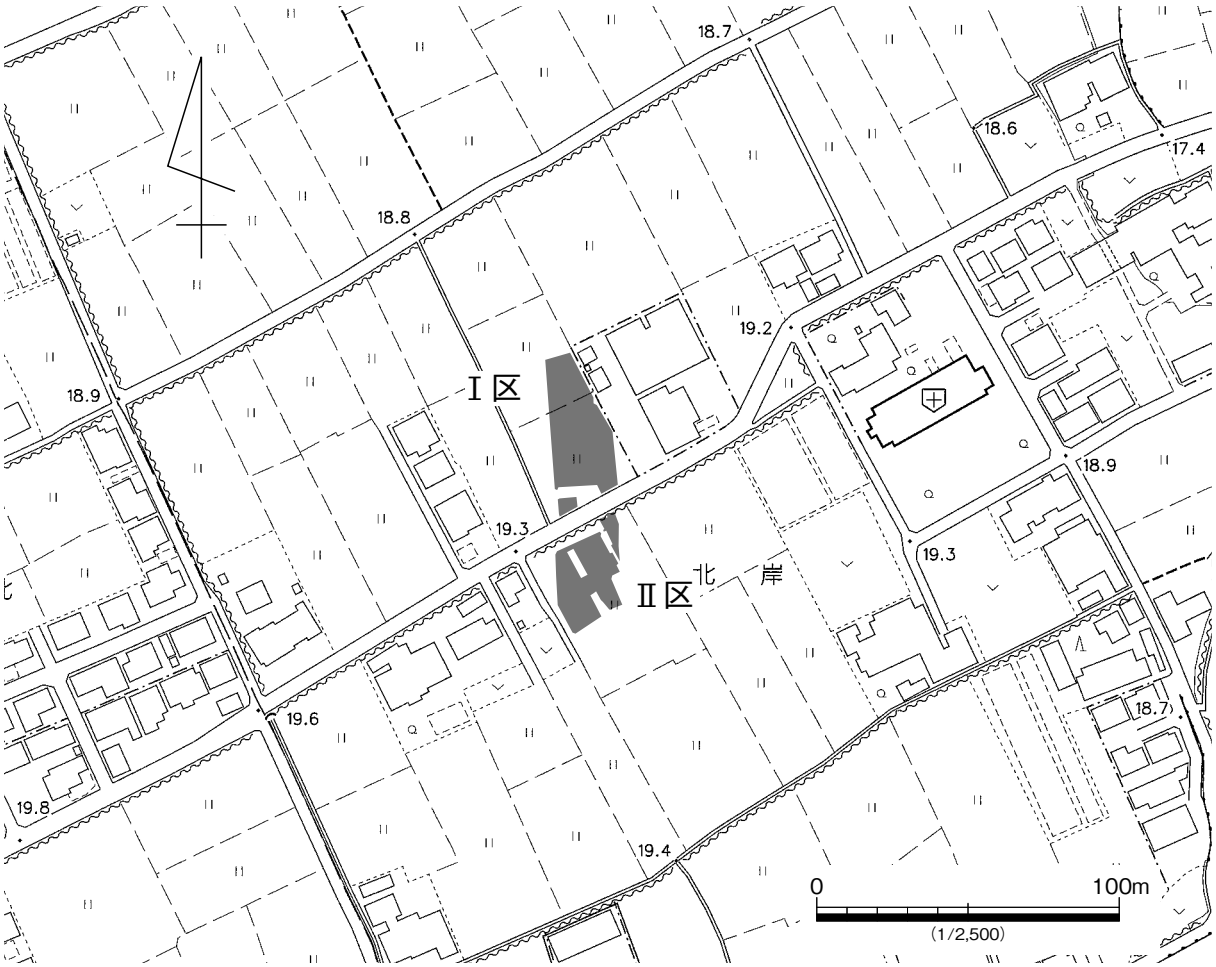
第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

調査対象地は、道路建設予定地であるため、南北延長約 92 m、東西幅約 24 mと南北に細長く、調査地内中央を市道が東西に横断する。調査区は、第６図に示すように市道より北側をⅠ区、南側をⅡ区と大きく区分し、調査時の工程や調査開始前に設置されていた隣接耕地への用排水に使用する仮設水路等により、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。調査前の地目は、すべて水田などの耕作地である。

調査は、直営方式により実施し、基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げをおこなった。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。包含層等の遺物については、調査小区が狭小であるため、とくにグリット設定は行わず、必要と認められた遺物については、トータルステーションで出土位置を測量・記録し、出土状況を写真撮影するなどして取り上げた。

遺構名は、調査時には検出順に付したが、本書を作成するにあたり、柱穴以外はすべて新たな番号を付して統一した。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲する。



第６図　調査区配置図（丸亀市都市計画図を一部加工して利用）

第２節　基本層序

土層序の観察は、南北方向についてはⅠ区は調査区西壁、Ⅱ区は西半調査小区東壁において、東西方向についても各調査区の南北両壁においてそれぞれ行った。以下、調査区毎に、基本層序について整理する。

Ⅰ区の基本層序

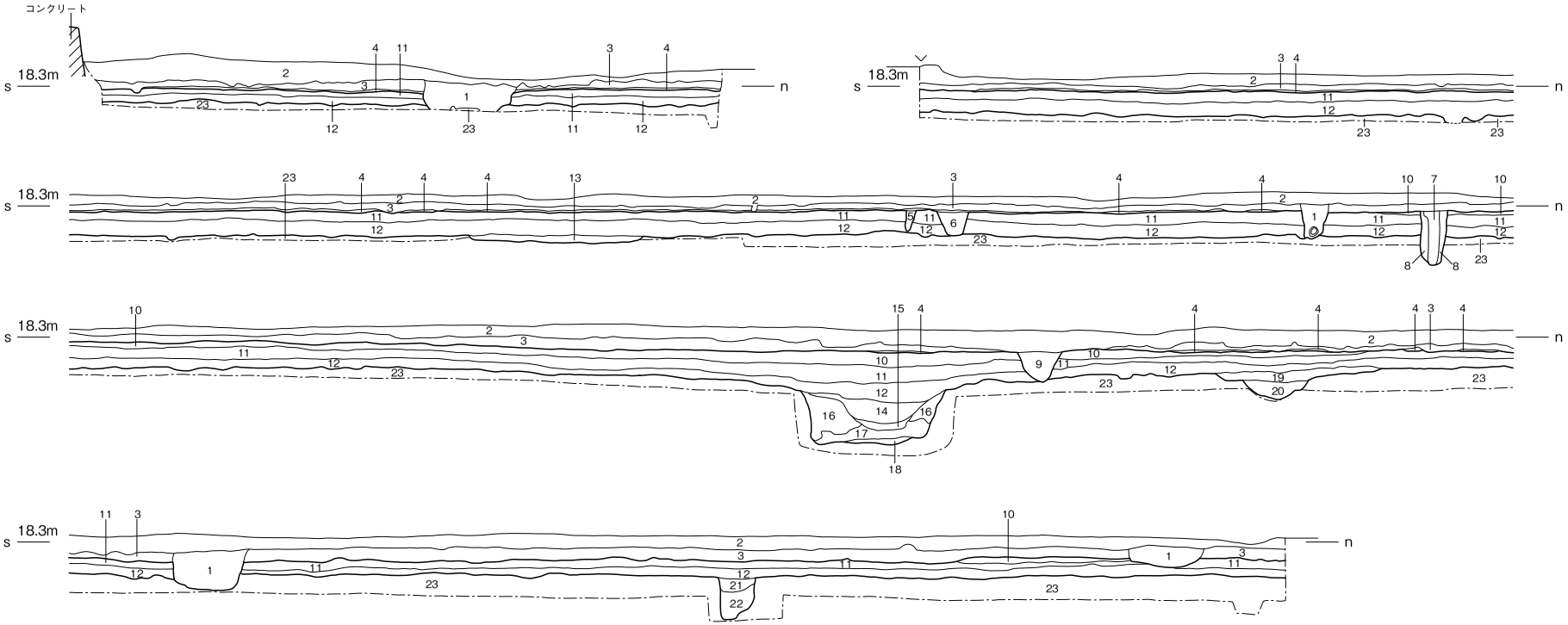
Ⅰ区は、調査前は１筆の水田等の耕地として造成され、現地表面の標高は 18.5 m前後であった。現耕土層下には、１～２層に分層される旧耕作土・床土層が水平堆積し、出土遺物より近世後半以降の堆積が想定される。本層下面で、掘立柱建物等の柱穴掘り方を確認し、第１遺構面とする。本遺構面の標高は、調査区南端付近で 18.25 m前後を、北端付近で 18.15 m前後をそれぞれ測り、緩やかに北へ傾斜する。後述するⅡ区では、本遺構面上面に包含層の堆積が認められたが、本調査区では後世に削奪され残存しない。

上述した旧耕土層下には、調査区中央部 SD04 や北西部 SD01 のそれぞれ上面付近を中心に、灰白色粘土（第７・８図 10 層）がレンズ状に堆積していた。SD04 等開削後の遺構両岸の浸食による帯状窪地を最終的に埋める堆積層で、最大層厚 0.15 mを確認した。前章で既述したように、低地帯埋土の最上層に相当し、本層の堆積により、調査区周辺は一定度平準化されたと考えられる。

第１遺構面のベースとなるのは黄灰色粘土層（同図 11 層）で、調査区南東端部を除くほぼ調査区全面に堆積し、調査区東南部で層厚 0.02 m、SD06 上面付近で同 0.14 m前後、調査区北東端部付近で 0.10 m前後をそれぞれ測る。本層からは、土師器杯蓋・皿や須恵器杯蓋・皿・甕、弥生土器壺等の小片のほか、サヌカイト製石鏃や剥片、鉄滓がコンテナ１箱程度出土しており、包含層Ⅱとする。極少量の土師質土器や黒色土器の碗片が出土しているが、これは本来本層上面より掘り込まれた遺構中に包含されていたものを本層掘り下げ時に取り上げたものであり、本層堆積時期の下限は 10 世紀前葉を前後する時期と考えられる。須恵器は８世紀中葉から 10 世紀前葉頃までのものが出土しており、数量的には８世紀後葉から９世紀前葉のものが多数を占めるようだ。本層下面においては、本調査区では遺構は検出されなかったが、後述するⅡ区の調査成果を踏まえ、本層下面を第２遺構面とする。

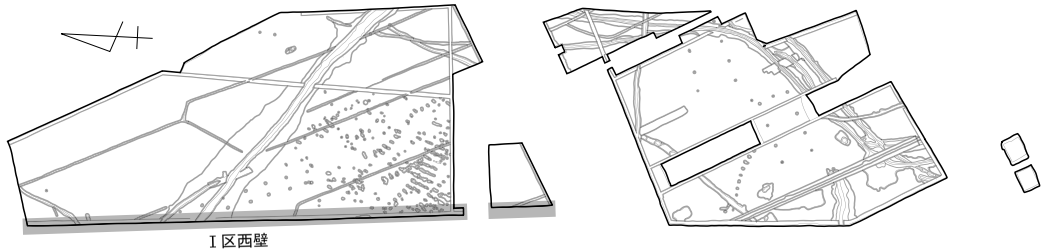
包含層Ⅱの下位には、やや強粘質の灰色粘土（同図 12 層）の水平堆積が、調査区東南端部を除く全面において検出された。本層は、調査区南端部付近で層厚 0.05 m前後、SD04 上面で 0.20 m前後、北端部付近で同 0.08 m前後をそれぞれ測る。本層下面で SD03 ～ SD06 の掘り方、及び鋤溝と考えられる耕作痕跡を検出した。本層下面を第３遺構面とし、本層堆積と同時とみられる SD06 等も同遺構面の遺構として、以下報告する。遺構面の標高は、調査区南端付近で 18.05 ～ 18.15 m、調査区北端付近で 18.0 m前後をそれぞれ測り、北西方向へ緩やかに傾斜する。本層からは、弥生土器片を中心に数点の器種不詳の須恵器小片、サヌカイト製石鏃や剥片等がコンテナ 1/3 箱程度出土しており、包含層Ⅲとして報告する。

なお、上述した耕作痕を水田稲作に関係する可能性を考え、また周辺の植生復元のため、包含層Ⅱ・Ⅲ層について、プラント・オパール分析と花粉分析を実施した。分析結果の詳細は第４章に譲るが、結論からすれば、本層での水田稲作の可能性は否定され、本層堆積時は乾燥した環境下にあったことも明らかとなった。これら分析からは栽培種までは特定できなかったが、考古学的な調査成果を踏まえるなら、少なくとも畑作に起因するものである可能性が高いと判断された。



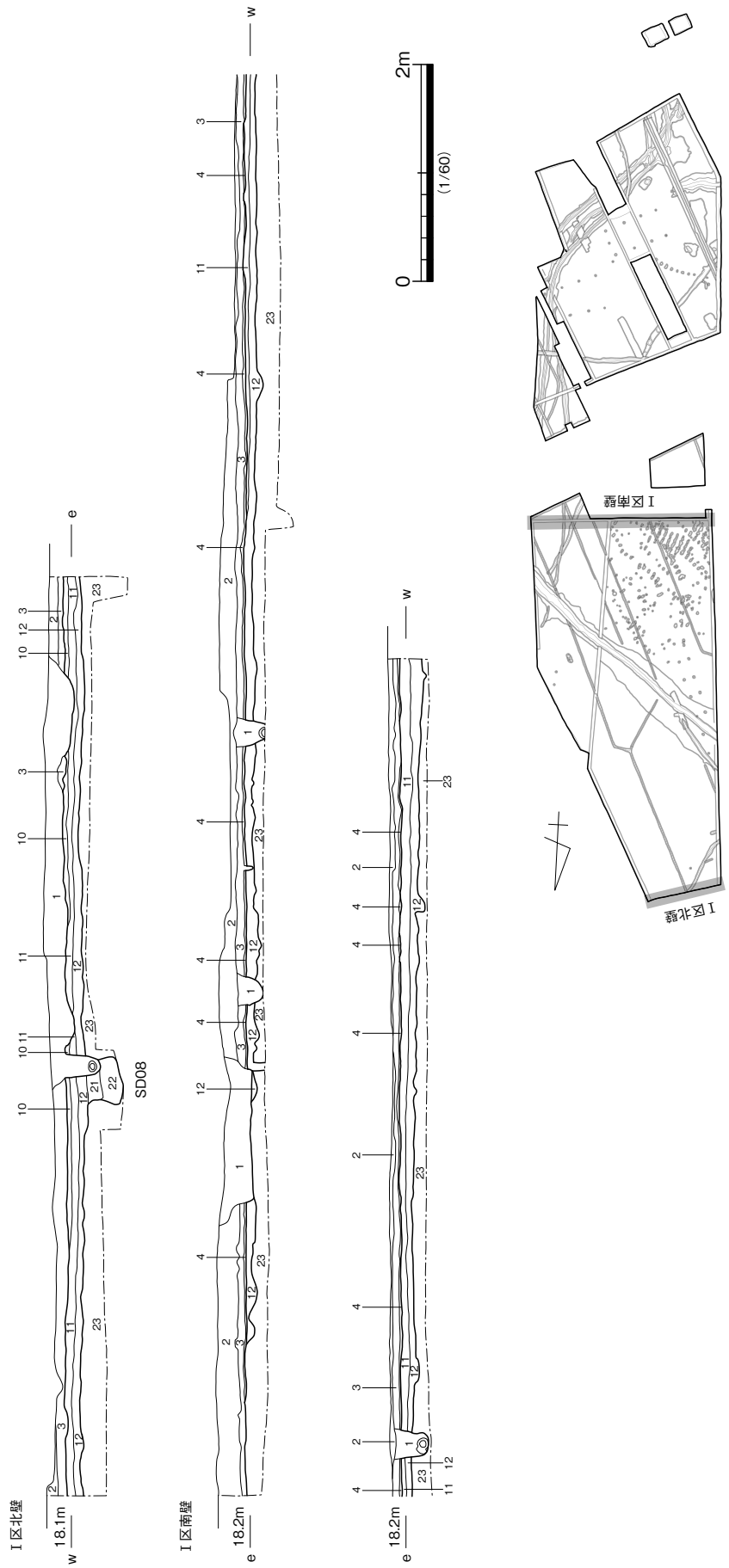
1　撹乱・暗渠
2　耕作土
3　2.5Y7/3 浅黄色シルト（Fe、床土層）
4　10YR6/6 明黄褐色粘土（Mn、やや強粘質、床土層）
5　N3/ 暗灰色粘土（Mn 少、粒径１～４㎝のベース層ブロック土少量含む、SP50）
6　2.5Y6/2 灰黄色粘土（Mn 少、粒径２～８㎝のベース層ブロック土多量に含む、SP48）
7　N4/ 灰色粘土（Mn 少、粒径１～２㎝のベース層ブロック土少量含む、SP42 柱痕）
8　2.5Y5/1 黄灰色粘土（Mn、粒径１～３㎝のベース層ブロック土多量に含む、SP42 掘り方）
9　N4/ 灰色粘土（Mn、粒径２～５㎝のベース層ブロック土やや多量に含む、SP48）
10　7.5Y7/1 灰白色粘土（Mn やや多、Fe、粒径２～３㎝の小礫極少量含む、やや強粘質、包含層Ⅰ）
11　2.5Y5/1 黄灰色粘土（Fe・Mn、強粘質、包含層Ⅱ）
12　5Y4/1 灰色粘土（Fe・Mn、強粘質、包含層Ⅲ）
13　7.5YR3/1 黒褐色粘土（Mn 多、粒径２～５㎝のベース層ブロック土少量含む、SK01）
14　10YR2/1 黒色粘土（Fe 少、底部に少量細～中砂混、両肩部に粒径１～２㎝のベース層ブロック土含む、SD04 中層）
15　N2/ 黒色粘土（Fe 少、細～中砂ラミナ状に混じる、SD04 中層）
16　2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土（Fe やや多、SD04 下層）
17　5Y3/1 オリーブ黒色粘土（細～中砂少量混じる、粒径１～５㎝のベース層ブロック土やや多量に含む、SD04 下層）
18　5Y6/1 灰色細砂～粘土ラミナ（SD04 下層）
19　10YR3/1 黒褐色粘土（Fe・Mn、やや強粘質、SD03 上層）
20　2.5Y4/2 暗灰黄色粘土（Mn、SD03 下層）
21　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土（Mn、粒径２～４㎝のベース層ブロック土多量に含む、SD01 上層）
22　2.5Y3/1 黒褐色粘土（Mn、粒径１～３㎝のベース層ブロック土少量含む、SD01 下層）
23　10YR7/8 黄橙色粘土（Mn、強粘質、包含層Ⅳ）

0　2m
（1/60）



Ⅰ区西壁

第７図　Ⅰ区調査区西壁土層断面図



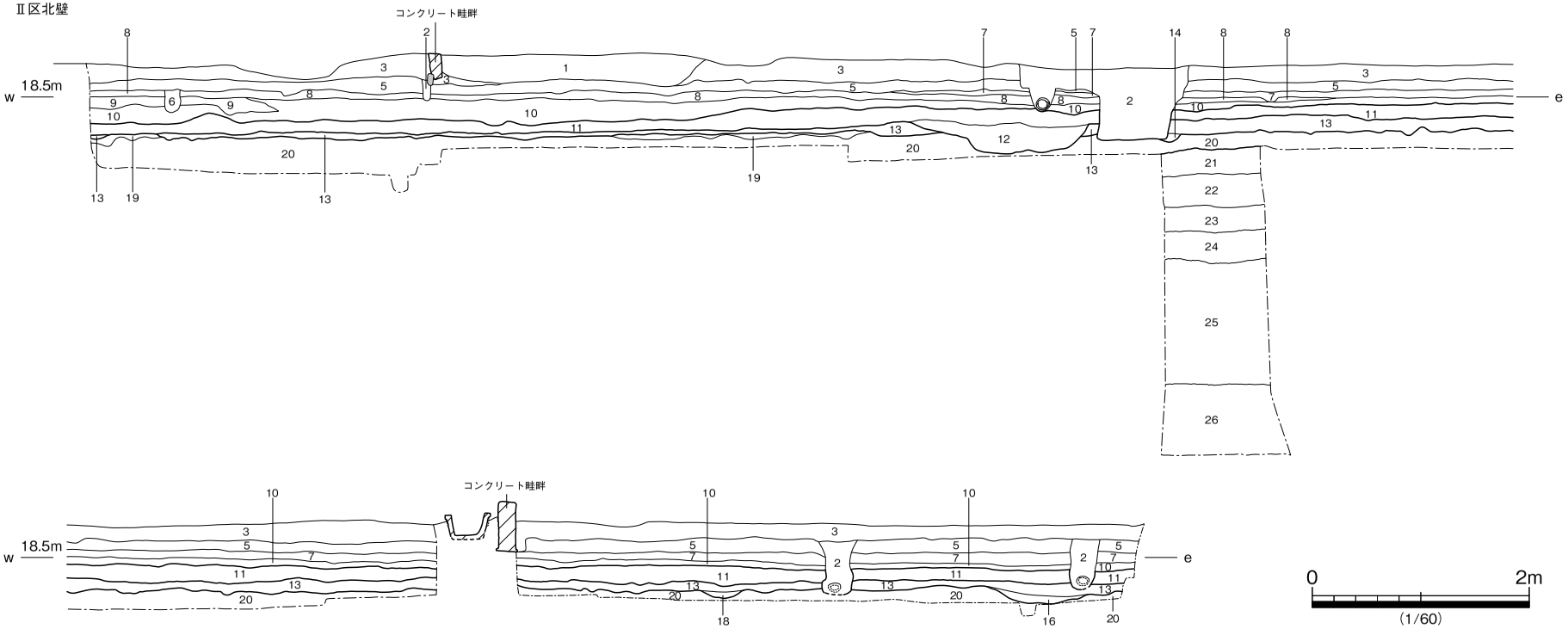
第８図　Ⅰ区調査区北・南壁土層断面図

包含層Ⅲの下位には、強粘質の黄色系粘土（同図 23 層）の水平堆積が、調査区全面において検出された。本層は弥生時代の遺構のベース層で、試掘調査時には無遺物層と考えていた。しかし、調査の進展に伴って、本層よりサヌカイト製石鏃等の石器が出土することが判明した。したがって本層を包含層Ⅳとし、本層より出土した石器類について、次節において報告する。

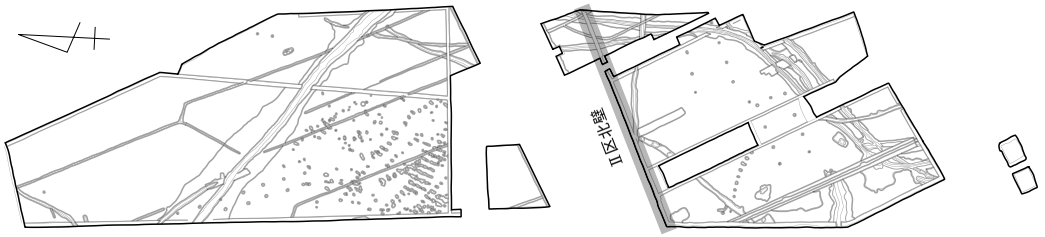
Ⅱ区の基本層序

Ⅱ区は、調査前は３筆の水田等の耕地に造成されており、各筆の現地表面の標高は 18.8 m前後で概ね一定している。現耕土層下には、２～３層に大別される旧耕作土・床土層が水平堆積し、出土遺物より近世後半以降の堆積が想定される。

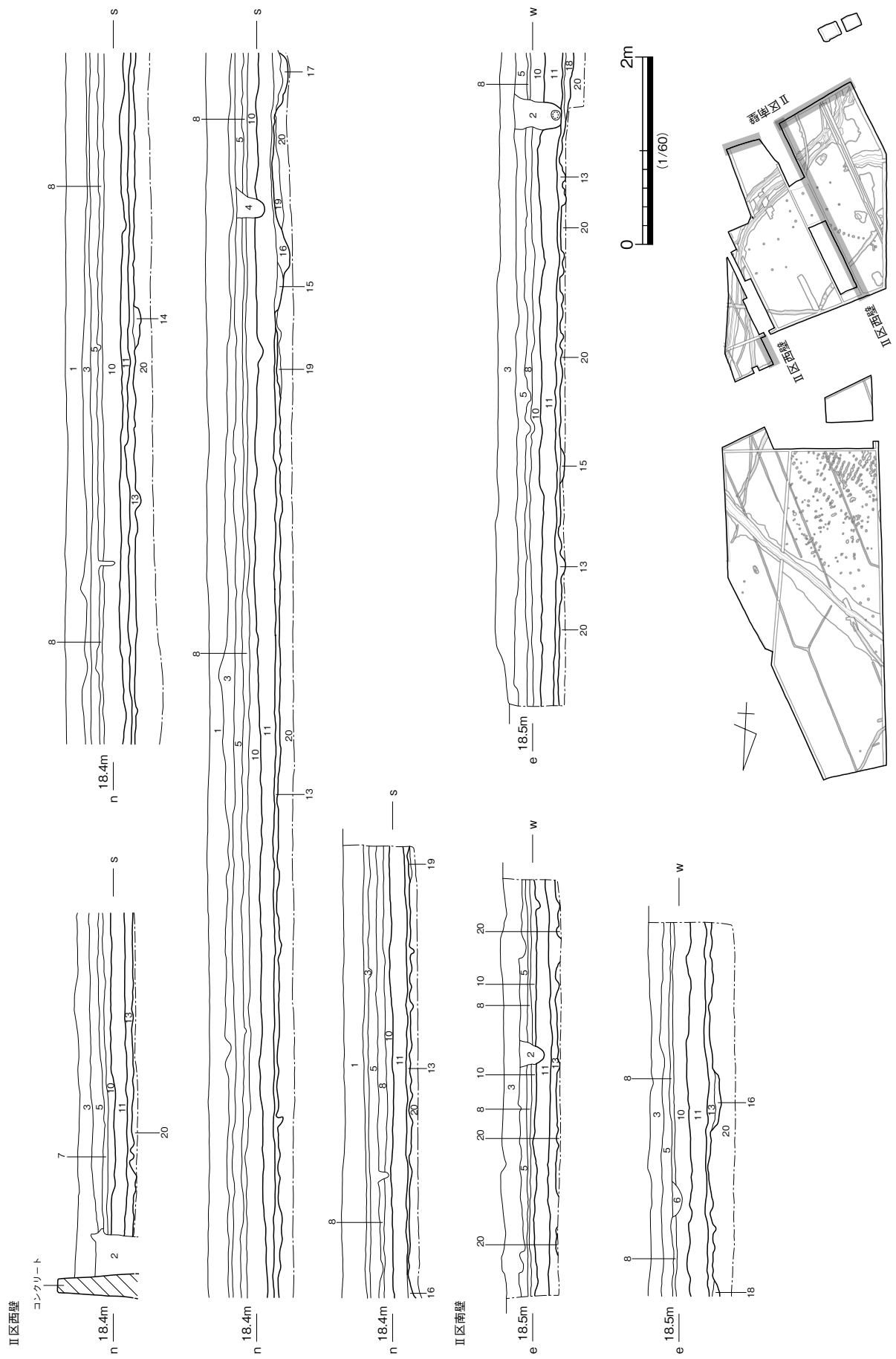
これら旧耕土層下には、にぶい黄色粘土（第９・10 図 10 層）の水平堆積層が、調査区全面において確認された。層厚は 0.05 ～ 0.26 mと、場所により大きな差を認めるものの、一定の



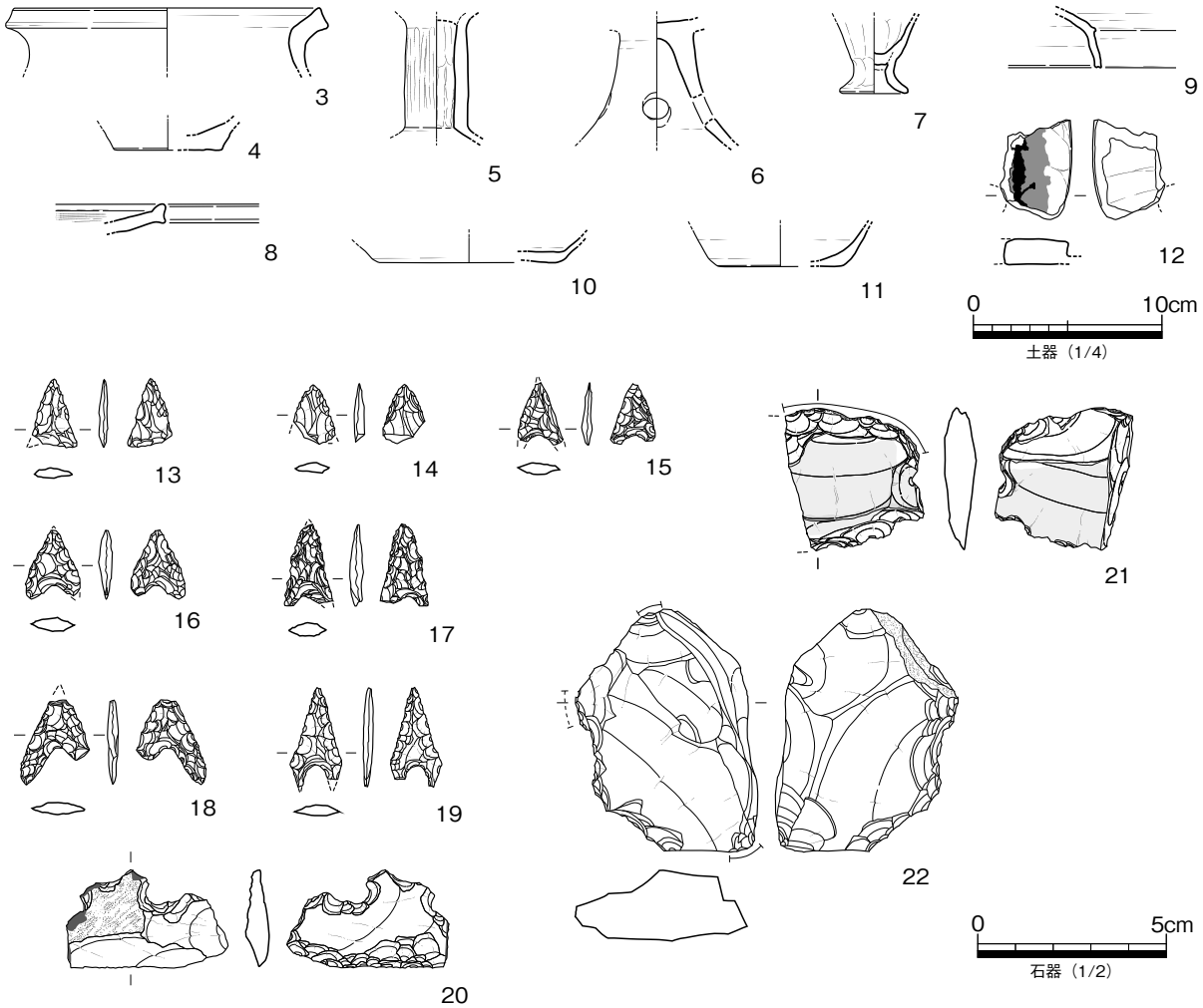
1　盛土
2　撹乱・暗渠
3　耕作土
4　5Y7/1 灰白色シルト（Mn 少、粒径２～４㎝の３・４層ブロック土やや多量に含む床土層）
5　5Y7/1 灰白色シルト（Fe・Mn 少、粒径１～２㎝のブロック土少量含む、床土層）
6　5Y7/1 灰白色シルト（Mn 少、粒径１㎝のベース層ブロック土少量含む、床土層）
7　5GY7/1 明オリーブ灰色シルト（Mn 多、旧耕作土）
8　10YR7/8 黄橙色粘土（Mn 少、旧耕作土 or 床土層）
9　10YR6/8 明黄褐色シルト（Mn 少、やや細砂質）
10　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土（Fe、弱粘質 Mn 少、包含層Ⅰ）
11　5Y5/1 灰色粘土（Fe・Mn 少、部分的に上面付近に細砂～シルトブロック状に含む、包含層Ⅱ）
12　2.5Y4/1 黄灰色粘土（Mn・Fe、粒径１～10㎝のベース層ブロック土多量に含む、SD11）
13　N3/ 暗灰色粘土（Fe、強粘質、包含層Ⅲ）
14　10YR3/1 黒褐色粘土（Mn、強粘質、SD06）
15　2.5Y3/1 黒褐色粘土（Fe 少、やや強粘質、SD10）
16　2.5Y3/2 黒褐色粘土（Fe 少、やや強粘質、粒径２～３㎝のベース層ブロック土を底面付近に少量含む、SD07、SD08）
17　2.5Y5/1 黄灰色粘土（Mn・Fe 少、強粘質、SD08）
18　2.5Y3/1 黒褐色粘土（Mn・Fe、粒径１㎝程度のベース層ブロック土若干量含む、SD05）
19　2.5Y6/1 黄灰色粘土（Fe 少、強粘質、包含層Ⅳ）
20　10YR8/8 黄橙色粘土（強粘質、包含層Ⅳ）
21　10YR7/6 明黄褐色粘土（Mn 少、強粘質、無遺物層）
22　2.5Y7/3 浅黄色粘土（Mn、強粘質、無遺物層）
23　10YR3/2 黒褐色粘土（Mn 多、強粘質、無遺物層）
24　10YR6/6 明黄褐色粘土（Mn 少、強粘質、粒径３～５㎝の砂岩円～亜円礫少量含む、無遺物層）
25　10BG6/1 青灰色砂礫（グライ化、粒径２～30㎝の砂岩円～亜角礫含む、無遺物層）
26　10YR5/6 黄褐色砂礫（無遺物層）



第９図　Ⅱ区調査区北壁土層断面図



第１０図　Ⅱ区調査区中央・南壁土層断面図



第 11 図　包含層Ⅲ出土遺物実測図

方向性は看取できない。また、部分的に灰色系細砂がラミナ状に混じり、弱水流下での低湿地性の水成堆積の可能性が考えられる。本層からは、土師質土器杯・碗、土師器甕・羽釜のほか、器種不詳の須恵器や弥生土器等の小片、サヌカイト剥片等がコンテナ半箱近く出土した。おそらくは 12 世紀前半を下限とする堆積層と考えられ、包含層Ｉとする。本層下面が第１遺構面となり、次節で報告する掘立柱建物等が本遺構面に帰属する。調査時には、調査期間等の都合により、後述する第２遺構面まで掘り下げて遺構を検出したため、本遺構面での調査は実施していない。

第１遺構面のベースとなる灰色粘土（同図 11 層）も、ほぼ調査区全面において水平堆積が確認された。層厚 0.04 ～ 0.26 ｍを測り、本層も場所により層厚に大きな差を認める。土質や堆積位置、出土遺物より、Ｉ区包含層Ⅱに相当すると考える。本層からは、器種不詳の土師器や須恵器、弥生土器等の小片、サヌカイト剥片等が 50 点程度出土した。出土遺物より８世紀を下限とする堆積層と考えられる。本層下面で、SD11 の掘り方を検出し、本遺構面を第２遺構面として報告する。

第２遺構面のベースとして、調査区北半部で暗灰色粘土（同図 13 層）の堆積が確認された。調査区南端部では、同層は削奪され残存せず、後述する黄灰色粘土ないしは黄橙色粘土が露出する。暗灰色粘土は、上面を大きく削奪されたためか層厚 0.04 ～ 0.12 ｍと薄く、わずかに北へ傾斜して堆積し、底面には顕著な起伏が認められる。後述する内容より、本層はＩ区包含層Ⅲに相当する堆積層と考える。本

写真４　Ⅱ区深掘りトレンチ土層断面

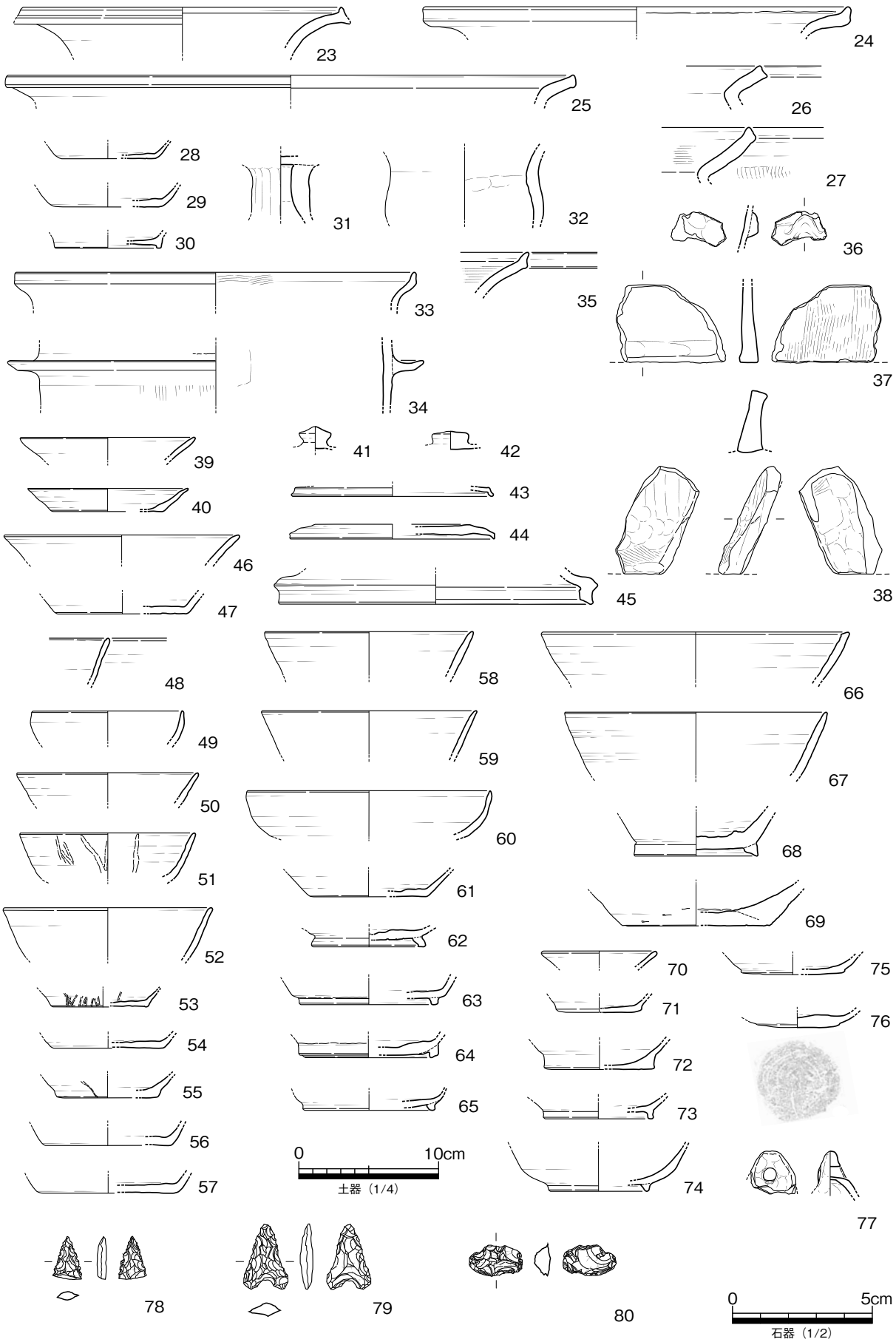
層からは、須恵器杯蓋や弥生土器高杯等の小片のほか、サヌカイト製石鏃や剥片等が、コンテナ半箱近く出土した。須恵器片は１点のみであり、大多数は弥生土器と考えられる土器片である。須恵器片より５世紀後葉を下限とする堆積層と考えられるが、堆積の中心は弥生時代後期にある可能性が高い。本層下面で SD06 の掘り方を検出し、SD05・SD07 は本層と埋土を共有し明確に掘り方を捉えられず、溝埋没と本層堆積が同時期であったと考えられる。本層下面を第３遺構面とし、本層堆積と同時とみられる SD07 等も同遺構面の遺構として、以下報告する。本遺構面は、調査区北端部で 18.1 m前後、同南端部で 18.2 m前後と北へわずかに傾斜する。

既述したように、第３遺構面のベースとなる黄色系粘土（同図 19・20 層）は、0.18 ～ 0.30 m以上の層厚を有する堆積層で、調査区全面に堆積し、Ⅰ区包含層Ⅳ相当層である。本調査区においても、サヌカイト製石鏃や剥片等、少量の石器類が出土しており、出土遺物等の詳細については次節で報告する。

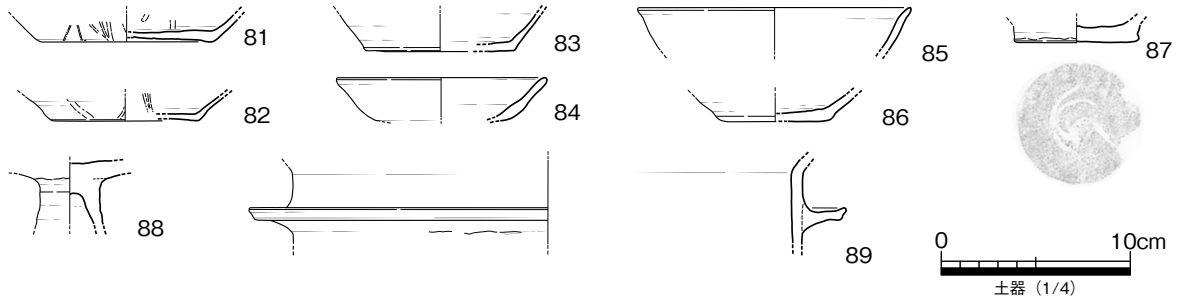
なお、包含層Ⅳ以下の堆積層については、本調査区において深掘りトレンチを掘削し、現地表下 3.6 mまで観察した。包含層Ⅳ以下は、17.0 m付近まで強粘質の黄褐色ないし黒褐色粘土層が水平堆積し、それ以下は粒径２～ 30cmの砂岩円～亜角礫を主体とする青灰色ないし黄褐色砂礫層が厚く堆積していた。これら礫層は、前章で既述したように土器川の営力により形成された扇状地堆積物であり、上位の粘土層等が旧中州間の凹地を埋める細粒堆積層に相当する。

包含層出土の遺物（第 11 ～ 14 図）

第 11 図は、包含層Ⅲ出土の資料を掲載した。**3** は弥生土器甕。後期前葉か。**4** は弥生土器壺の底部片。**5**・**6** は弥生土器高杯の脚部。**6** は、裾部に小円孔４孔を穿つ。**7** は弥生土器台付鉢の底部片。**8** は土師器甕と考え図示したが、小片のため他の器種となる可能性もある。**9** は須恵器杯蓋。TK47 ～ MT15 型式期か。**10** は須恵器杯、**11** は土師器杯である。これら８世紀代に下る資料は、上位層からの混入の可能性がある。**12** は器種不明の円盤状の土師質土器片。左図左端に径 1.5cm程度の円孔を穿つ。左図面左半には、被熱による黒色化を認める。本資料も混入の可能性が高い。**13** ～ **19** はサヌカイト製の打製石鏃である。**14** は、下半部を折損する。**20** はサヌカイト製の石匙である。刃部の調整は片面のみで、つまみ部の形状は不定形であり、未成品の可能性が高い。また **18**・**19** の石鏃とともに、白色風化が進んでおり、本来はベース黄褐色粘土層に包含されていた可能性がある。**21** は打製石庖丁である。刃部



第 12 図　包含層Ⅱ出土遺物実測図



第 13 図　包含層Ⅰ出土遺物実測図

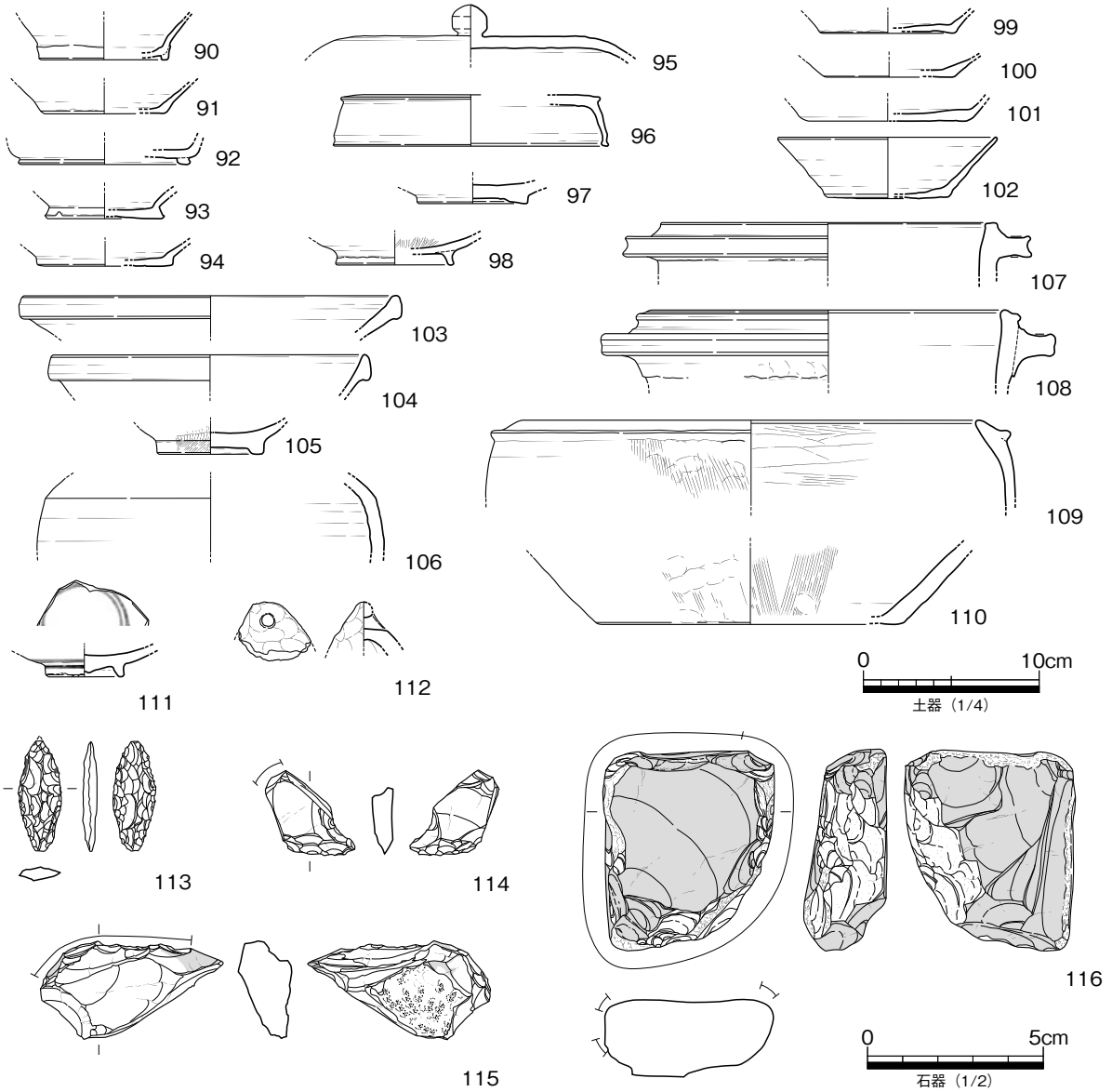
は片面より再調整され、表裏面には弱い磨滅痕を認める。22 は一部に自然面を残す楔形石器である。

第 12 図は、包含層Ⅱ出土の資料である。23・24 は弥生土器広口壺。25 は同大型鉢。いずれも終末期を前後する時期と思われ、本来は下位の包含層Ⅲに包含されていた可能性が考えられる。26・27 は土師器甕。28・29・70 は土師質土器皿である。混入資料か。30 は土師器杯底部。31 は脚部を多角形状にメントリした、８～９世紀代の土師器高杯である。32 は小型甕。ハケ調整を省略した粗製甕である。33 ～ 35 は土師器羽釜口縁部片。36 は土師器甕もしくは壺の把手部分の小片。37・38 は土師器移動式竈の鍔部及び底部片である。39・40・46 は須恵器皿。41 は土師器杯蓋天井部の宝珠ツマミ部の小片である。42 は須恵器杯蓋天井部の破片。43・44 は須恵器杯蓋。45 は須恵器壺蓋口縁部片と考えたが、器壁が厚く、別の器種の可能性もある。47・48・50・51 は須恵器杯。口縁端部内面に浅い沈線１条を施す。53・54・64 は須恵器杯。55 は須恵器碗。56 は須恵器杯。57 ～ 59・62・63・65 は須恵器杯。60･61 は須恵器杯。61 は、内面に墨痕とみられる黒色付着物が認められ、転用硯の可能性がある。66 は須恵器甕口縁部小片である。67 は須恵器鉢。68 は須恵器壺の底部片。69 は須恵器壺か鉢の底部片。マメツ顕著。71・72 はいわゆる円盤状高台を有する土師質土器碗である。73 は土師質土器碗。75 は土師質土器杯である。いずれも全体に剥離や磨滅が進んで調整は不明。77 は土師器飯蛸壺。以上の資料は、41・47・50・57・62・66 が８世紀中葉前後に、43・56・58・59・63 が８世紀後葉に、31・36 が８世紀末から９世紀前葉に、44・46・51・65 が９世紀中葉に、42・53・54・64 が９世紀後葉に、39・40 が 10 世紀前葉に、33 ～ 35・55・71・72 が 11 世紀中葉に、27・73 が 11 世紀後葉から 12 世紀前葉に、それぞれ位置付けられる。11 世紀中葉以降の資料については、それ以前の資料と比して、資料数が乏しく、やや時期も離れているため、上位包含層Ⅰの資料の混入の可能性も考えられる。

78・79 はサヌカイト製石鏃である。79 は器表面の白色風化が著しく、黄褐色粘土層に本来包含されていた可能性がある。80 はメノウ製の二次加工剥片であるが、出土層位からすれば火打石であった可能性が高い。

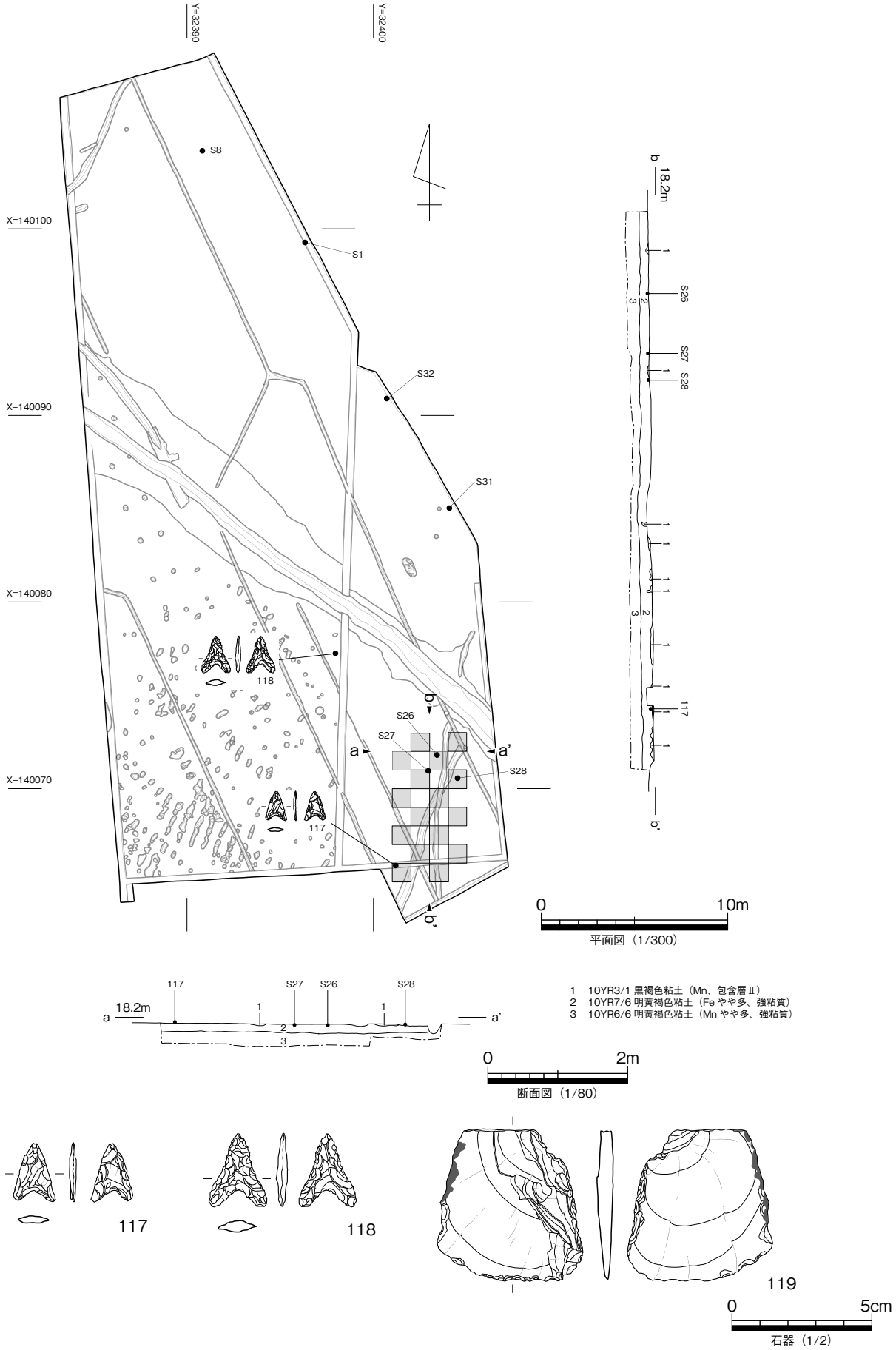
第 13 図は包含層Ⅰ出土の遺物である。81 は須恵器皿。82・83 は須恵器杯。84 は土師器皿。88 は須恵器高杯。以上の資料は９世紀代に遡り、包含層Ⅱの資料の混入と考える。85 は土師質土器碗。86 はいわゆる円盤状高台を有する土師質土器碗である。11 世紀中葉。89 は土師器羽釜。11 世紀後葉。

第 14 図は、耕土層等出土の遺物である。90 は土師器杯。９世紀中葉を前後。91・92 は須恵器杯。92 は８世紀中葉前後、91 は９世紀代に下る可能性がある。93・94 はいわゆる円盤状高台を有する土

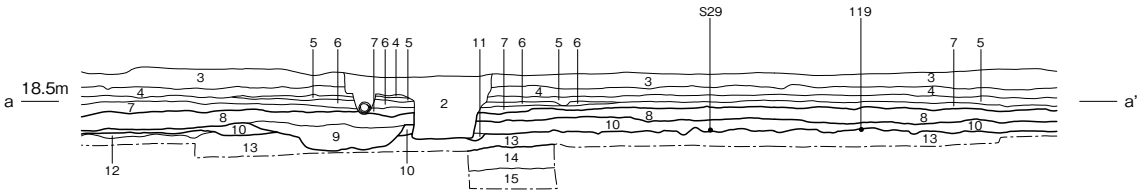


第 14 図　包含層等出土遺物実測図

師質土器碗である。11 世紀中葉に位置付ける。**95** は８世紀前葉の須恵器蓋。**96** は須恵器短頸壺等の蓋である。**97** は東海産緑釉陶器碗。底部蛇の目高台を有する。**98** は黒色土器碗。12 世紀前葉を前後する時期と考える。**99**･**100** は土師器杯。**101**･**102** は、13 世紀前葉の土師質土器杯。**103** は土師質土器捏鉢。14 世紀後半頃に下る。**104**・**105** は、大宰府分類白磁碗Ⅳ - １類の可能性が考えられる。**106** は白磁壺体部小片である。四耳壺とすれば、肩部の強い稜より大宰府分類Ⅲ－２類となると思われる。**107**･**108** は、11 世紀前後の土師器羽釜。**109** は、14 世紀後半から 15 世紀前葉の土師質土器足釜。**110** は撹乱より出土した土師質土器擂鉢。15 世紀前後か。**111** は肥前系磁器皿で、17 世紀前葉に下る。**112** は土師器飯蛸壺。**113** はサヌカイト製の打製石鏃。**114** は楔形石器砕片を利用したスクレイパーもしくは石鏃未成品である。**115** は上縁に顕著な敲打痕のみられる楔形石器砕片だが、一部に強い磨滅痕がみられることから打斧を転用した可能性がある。**116** はサヌカイト製の火打石で、ほぼ全周に使用痕が認められ、表面は使用のためか弱く磨滅する。

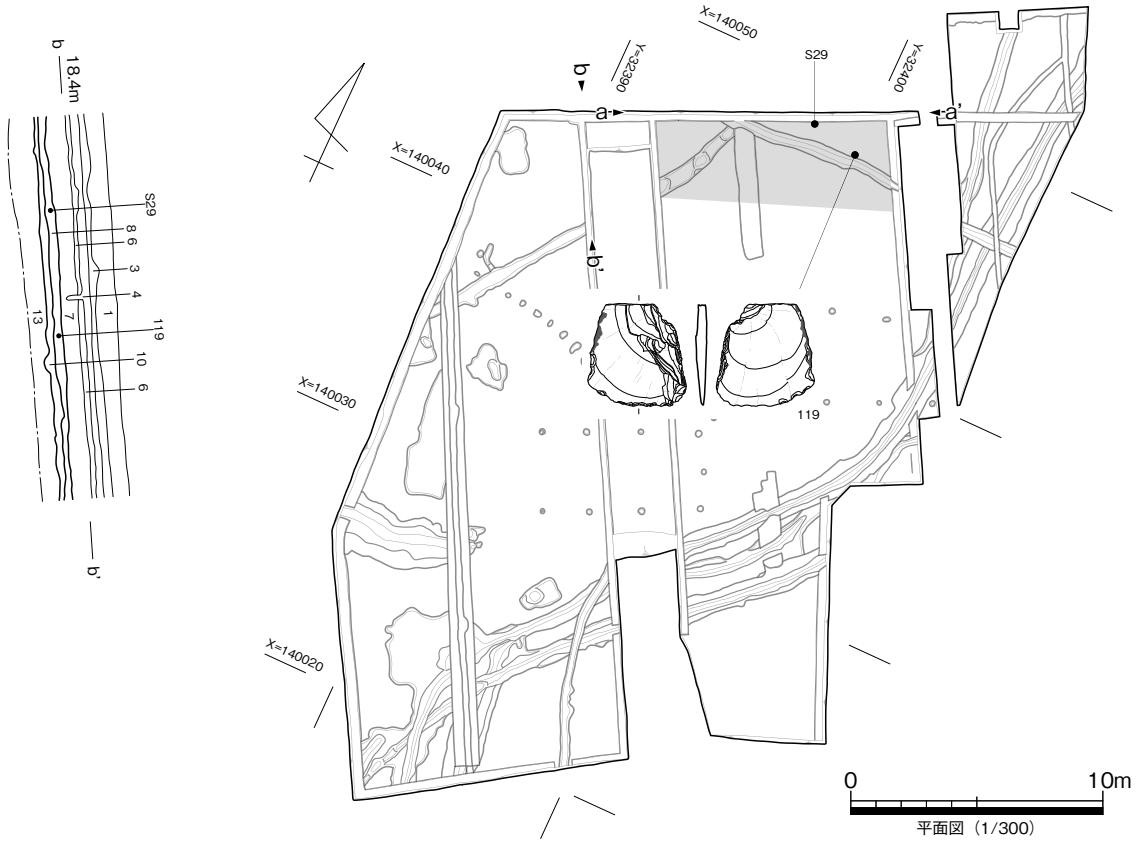


第 15 図　Ⅰ区石器ブロック石器分布・出土石器実測図



1　盛土
2　撹乱・暗渠
3　耕作土
4　5Y7/1 灰白色シルト（Fe・Mn 少、粒径１～２㎝のブロック土少量含む、床土層）
5　5GY7/1 明オリーブ灰色シルト（Mn 多、旧耕作土）
6　10YR7/8 黄橙色粘土（Mn 少、旧耕作土 or 床土層）
7　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土（Fe、弱粘質 Mn 少、包含層Ⅰ）
8　5Y5/1 灰色粘土（Fe・Mn 少、部分的に上面付近に細砂～シルトブロック状に含む、包含層Ⅱ）
9　2.5Y4/1 黄灰色粘土（Mn・Fe、粒径１～10 ㎝のベース層ブロック土多量に含む、SD11）
10　N3/ 暗灰色粘土（Fe、強粘質、包含層Ⅲ）
11　10YR3/1 黒褐色粘土（Mn、強粘質、SD06）
12　2.5Y6/1 黄灰色粘土（Fe 少、強粘質、包含層Ⅳ）
13　10YR8/8 黄橙色粘土（強粘質、包含層Ⅳ）
14　10YR7/6 明黄褐色粘土（Mn 少、強粘質、無遺物層）
15　2.5Y7/3 浅黄色粘土（Mn、強粘質、無遺物層）

0　2m
断面図（1/80）



平面図（1/300）

第 16 図　Ⅱ区石器ブロック石器分布図

第３節　遺構・遺物

縄文時代

本期は、明確な時期が特定される遺構は確認されていない。前節において既述したように、弥生時代の遺構のベースとなる黄褐色系粘土層より、サヌカイト製の石器が少量出土した。以下、石器ブロックとして報告する。

石器ブロック（第 15・16 図）

Ⅰ区東半部において、遺構検出作業中に弥生時代の遺構が掘り込まれた黄橙色粘土層（第 15 図２層）

調査区	層名	調査時取り上げ番号	報文番号	器種	計測値（cm・g）				残存	備考
					長さ	幅	厚さ	重量		
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 1		剥片	4.3	2.5	0.7	7.45	一部折損	
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 8		剥片	4.3	3.1	0.45	5.66		
Ⅰ区	黄褐色粘土	S12	117	石鏃	2.1	1.5	0.25	0.56	完存	
Ⅰ区	黄褐色粘土	S21	164	石鏃	2.6	2.0	0.4	1.03	完存	
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 26		剥片	4.5	3.3	1.0	12.91		
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 27		剥片	2.9	1.4	0.55	1.60		
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 28		チップ	1.1	0.8	0.3	0.21		
Ⅱ区	黄褐色粘土	S 29		チップ	1.3	1.0	0.15	0.20		
Ⅱ区	黄褐色粘土	S 30	119	加工痕のある剥片	5.4	5.2	0.6	17.87	一部折損	
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 31		チップ	1.0	0.7	0.2	0.14		
Ⅰ区	黄褐色粘土	S 32		剥片	3.3	2.4	0.85	4.65		

第１表　石器ブロック出土サヌカイト一覧表

より、サヌカイト剥片が出土した。その後も数点同層中よりサヌカイト剥片等が出土したことから、同層が弥生時代以前に遡る遺物包含層であることが確実となった。しかし、試掘調査時にそうした事実が把握されていなかったため、調査区全面を掘り下げて調査を行うに必要な時間的余裕はなく、上位に遺構の確認されなかったⅠ区南東部にトレンチを設定して掘り下げ、包含層中の遺物量と遺構面の確認を行い、その結果に応じて調査の方法を検討することとした。

トレンチ調査の結果、同層中より出土した遺物はサヌカイト製石鏃等石器４点にとどまり、土器等は出土せず、とくに遺物の集中箇所もなく、また遺構も確認されなかったことから、調査区全面を掘り下げて調査を実施する必要性はないものと判断した。本層に関係して調査を実施したのは、上述したⅠ区南東部のトレンチ部分と、調査終了間際においてⅡ区北端部を面的に掘り下げた約 46.4㎡である。

さて、本層より出土した石器は、遺構検出中等に出土したものも含めて 11 点で、すべてサヌカイト製である。うち第 15 図に３点を図示した。**117･118** は凹基式石鏃。**119** は下縁に微細な刃部調整を認め、スクレイパーとした。図示した以外の石器はいずれも剥片である。微細な剥片類は出土しておらず、遺跡内での石器製作の可能性は乏しいと考える。

なお、当該期と考えられる包含層は、大束川下流の川津六反地遺跡においても確認されており、本遺跡周辺でも当該時期の遺構が存在する可能性は高いと判断される。

弥生時代

当該期は、第２遺構面で検出した溝を主体とする遺構群で、周辺地域の灌漑水路群の一部を確認したと評価される。改修や付替えの痕跡が頻繁に確認され、比較的長期にわたり維持された、重要な水路であった可能性が高い。当該期に至り、遺跡周辺が耕地として、開発が進展したことを示すものと考える。

土坑

SK01（第 18 図）

Ⅰ区中央西端第３面で検出した土坑である。遺構の大半は調査区外へ延長し、東端部の一部が確認できたに過ぎない。東西幅 0.23 m以上、南北長 1.57 m以上、平面形は楕円形を呈するとみられる。残存深 0.03 mと浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色粘土の単層で、遺構廃絶後の自然堆積層とみられる。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。包含層Ⅲ下面で検出したことから、古墳時代中期以前に遡り、埋土の特徴より当該時期の遺構の可能性を考える。

溝

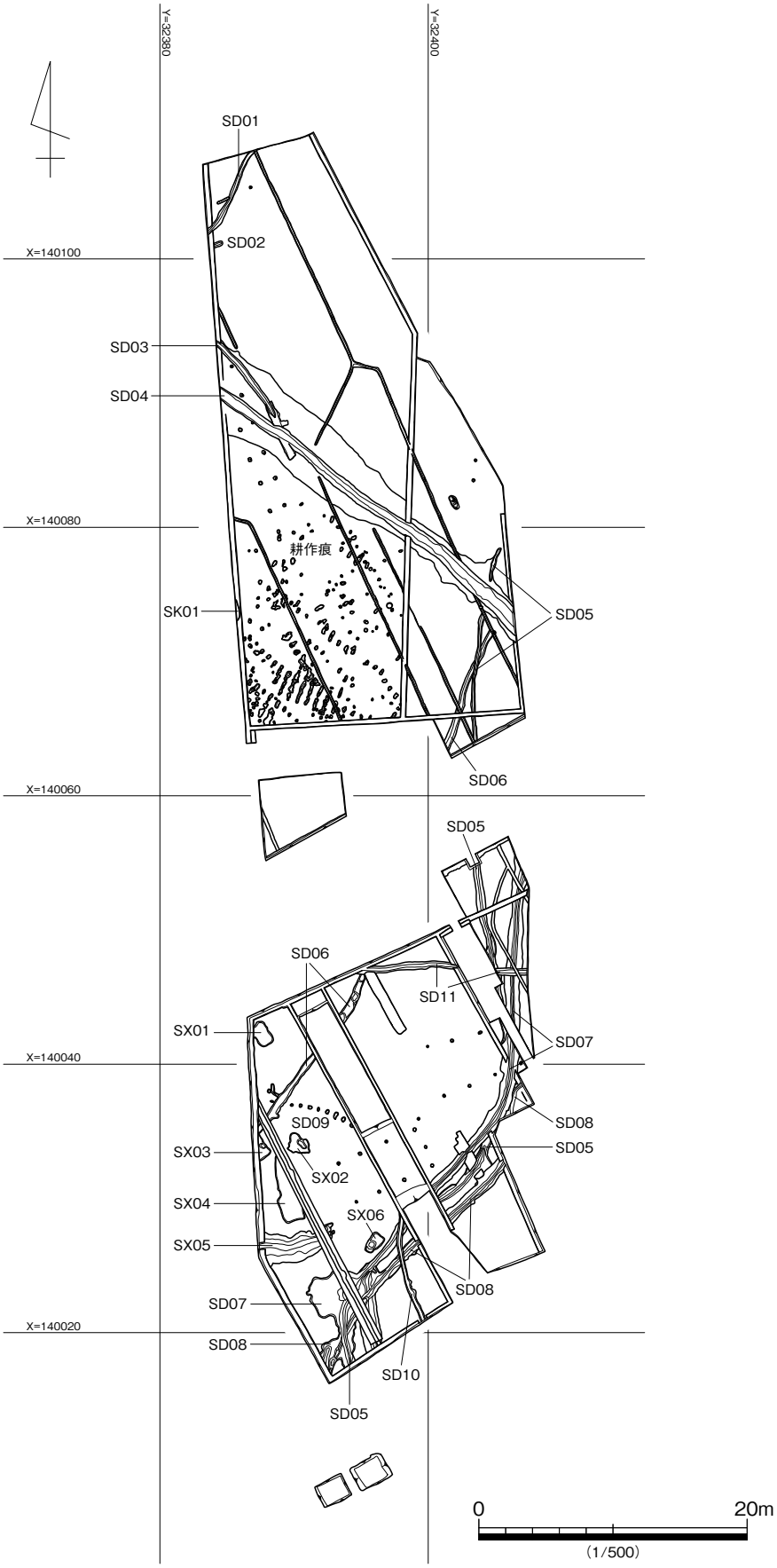
SD01（第 18 図）

Ⅰ区北西隅第３面で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、約 7.0 mを検出した。調査区内でやや蛇行するが、概ねN 24.1° Eに配される。検出面幅 0.27 ～ 0.48 m、残存深 0.34 ～ 0.37 m、断面形はU字状を呈する。底面の標高は、南端部で 17.58 m、北端部で 17.62 mを測り、高低差より南へ流下する可能性がある。埋土は２層に細分され、上層（１層）は下層（２層）上面より掘り込むように堆積しており、改修後の堆積層と考えられる。いずれも黒褐色粘土が堆積し、流水堆積は認められなかった。

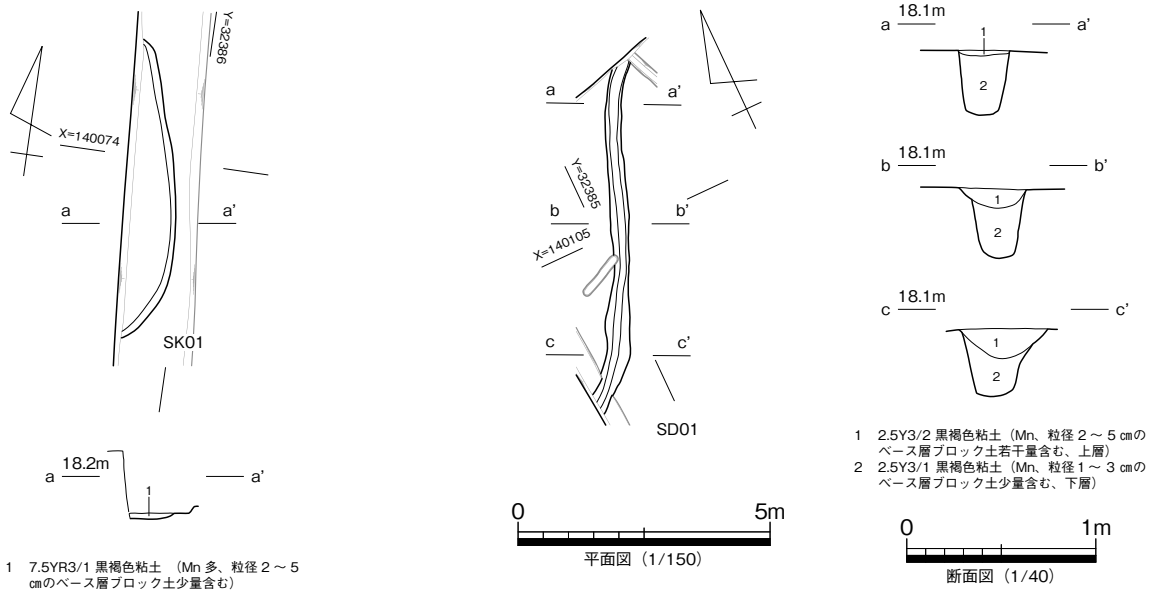
遺物は、器種不詳の弥生土器小片とサヌカイト剥片が各１点出土したのみで、出土遺物より時期を特定することは困難である。埋土の特徴は後述する SD03 と近似しており、当該時期の遺構として報告する。

SD04（第 19 図）

Ⅰ区中央部第３面で検出した大型幹線溝である。東西両端は調査区外へ延長し、約 27.40 mを検出した。調査区内で若干蛇行するが、概ねN 52.68° Wに配さ



第 17 図　第２遺構面平面図



第 18 図　SK01（左）・SD01（右）平・断面図

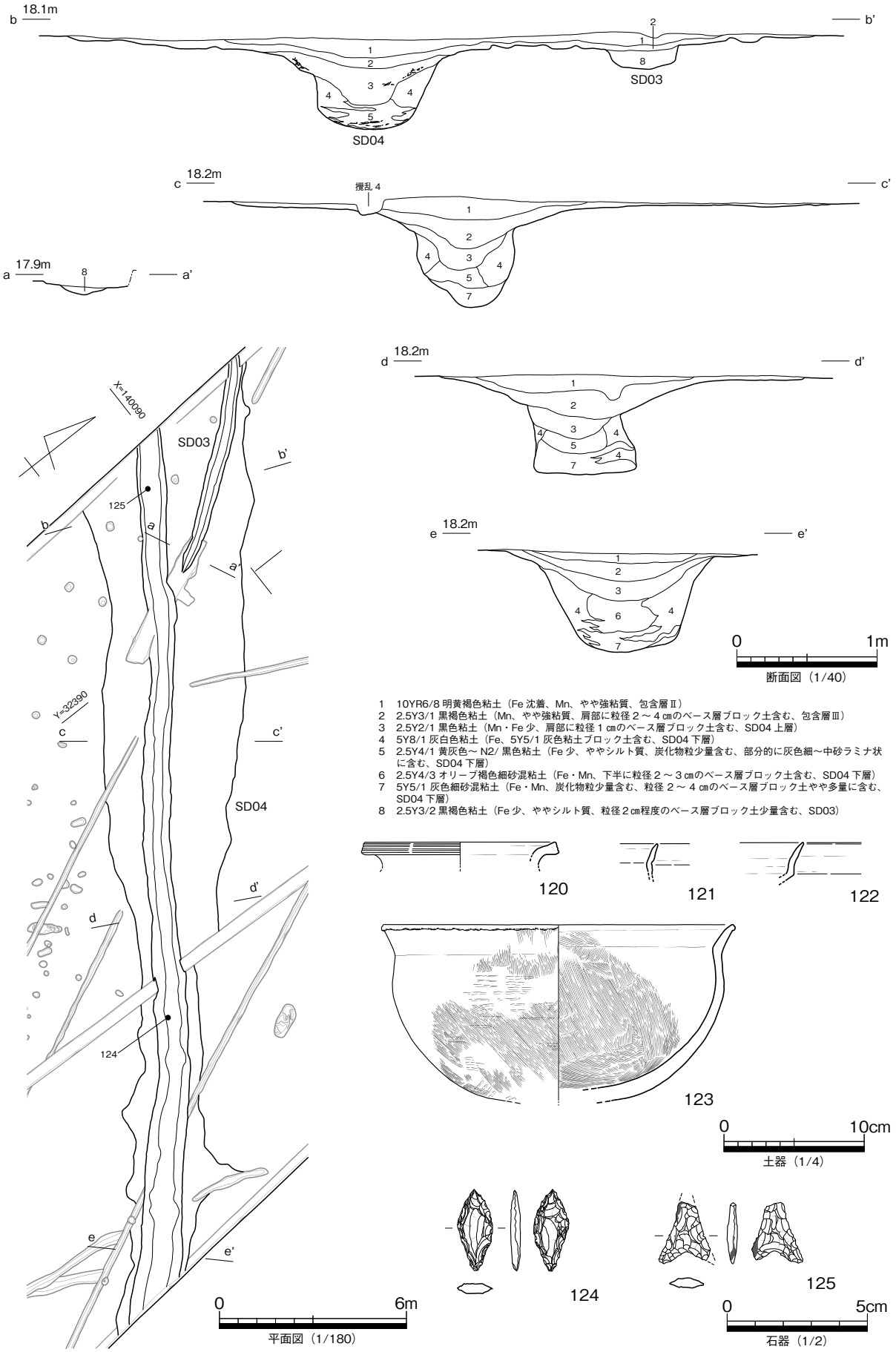
れる。検出面以下の埋土は４～６層に細分された。そのうち上位２層（１・２層）は、流路としての機能停止後、埋没が進行した流路上面に残された浅い皿状の窪地を埋める堆積層で、前節で報告した包含層Ⅱ･Ⅲ層であり、本来的には本溝に伴う堆積層ではない。流路機能時の堆積層は下位５層（３～７層）の部分であり、上下２層に大別して遺物の取り上げを行った。上層（３層）は下層（４～７層）を掘り込むように堆積していることから、改修後の堆積層と考えられる。下層は、中心部に溝機能時の流水堆積とみられる細～中砂をラミナ状に含む灰色系粘土や細～中砂（５・６層）が厚く堆積し、両壁際には壁面の崩落に起因するとみられるベース層のブロック土（４層）が、細砂や粘土を介在させながら堆積する。おそらくは改修を繰り返して､比較的長期間機能したものと考えられる。検出面幅 0.66 ～ 1.59 m、残存深 0.50 ～ 0.79 m、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。底面標高は、西端部で 17.30 m前後を、中央部で 17.39 m前後を、東端部で 17.35 m前後を測る。流路底面に若干の起伏が認められるが、概ね北西方向へ流下していたものと考えられる。

調査区西端部付近で､SD03 が北へ分岐する｡SD03 との合流部には､試掘調査時のトレンチが設定され、残念ながら本溝との層位的な関係は明らかにはできていない。しかし後述する SD03 の埋土や流路底面の標高等からすれば、本溝上層改修時に開削されたものと考えられる。

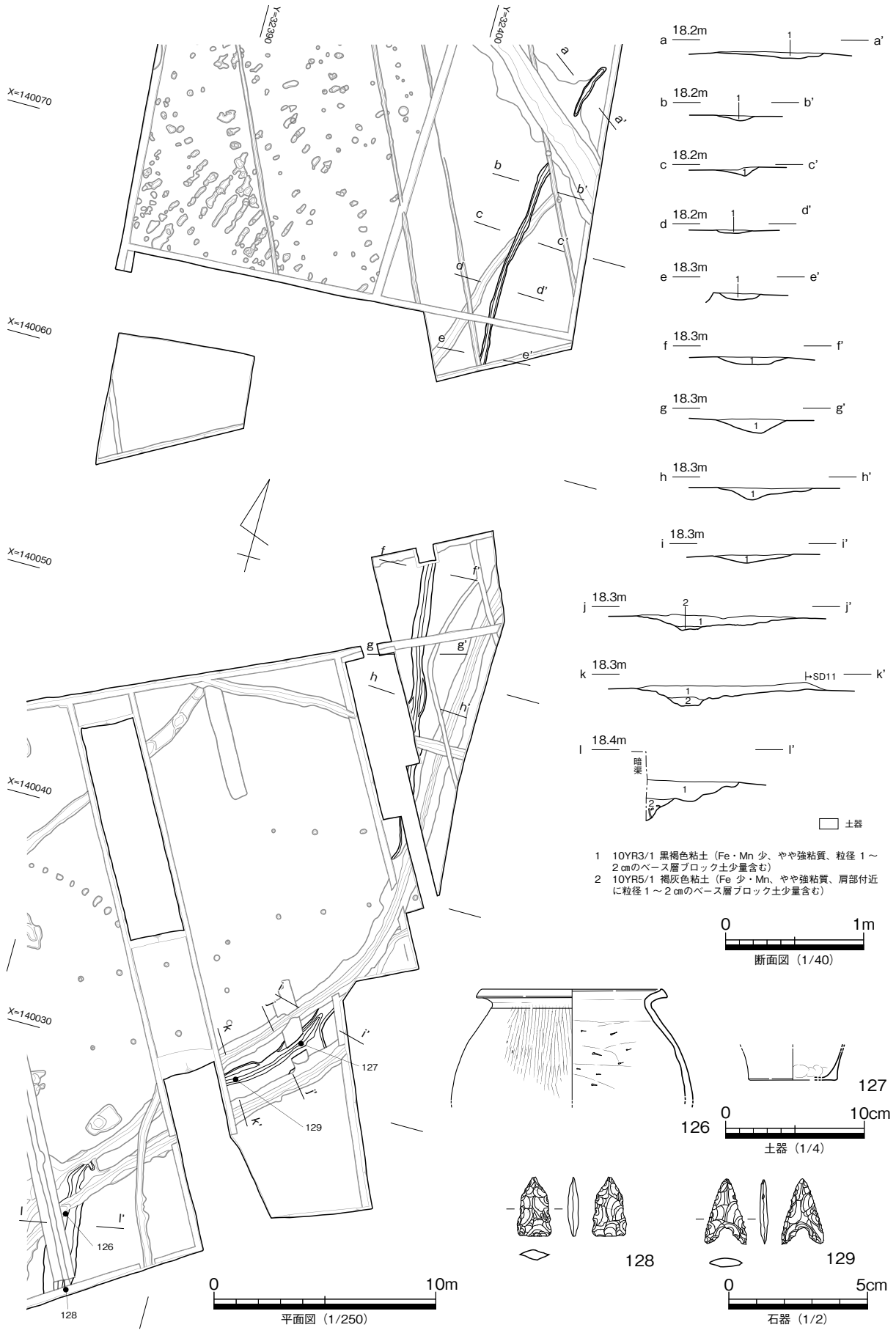
遺物は、各層より弥生土器壺、高杯等の破片、サヌカイト製石鏃や剥片が、28 ℓ 入りコンテナ半箱程度出土した。検出延長及び流路規模と比すと、遺物量はかなり乏しい。**120** は弥生土器甕。**121** は小型の甕もしくは鉢の口縁部小片である。**122** は高杯口縁部小片で、胎土中に角閃石細粒を若干量含み、高松平野香東川下流域からの搬入土器と考えられる。**123** は試掘調査時に出土した資料で、層位は不詳ながら本溝出土の大型鉢である。**124**・**125** はサヌカイト製石鏃。出土遺物が乏しいため時期を特定することは困難だが、概ね弥生時代終末期前後に機能していたものと考える。

SD03（第 19 図）

Ⅰ区中央西端第３面で検出した東西溝である。既述したように、SD04 上層改修時に開削されたと考えられる枝溝である。緩やかに弧を描いて配され、西端は調査区外へ延長し、約 7.7 mを検出した。検



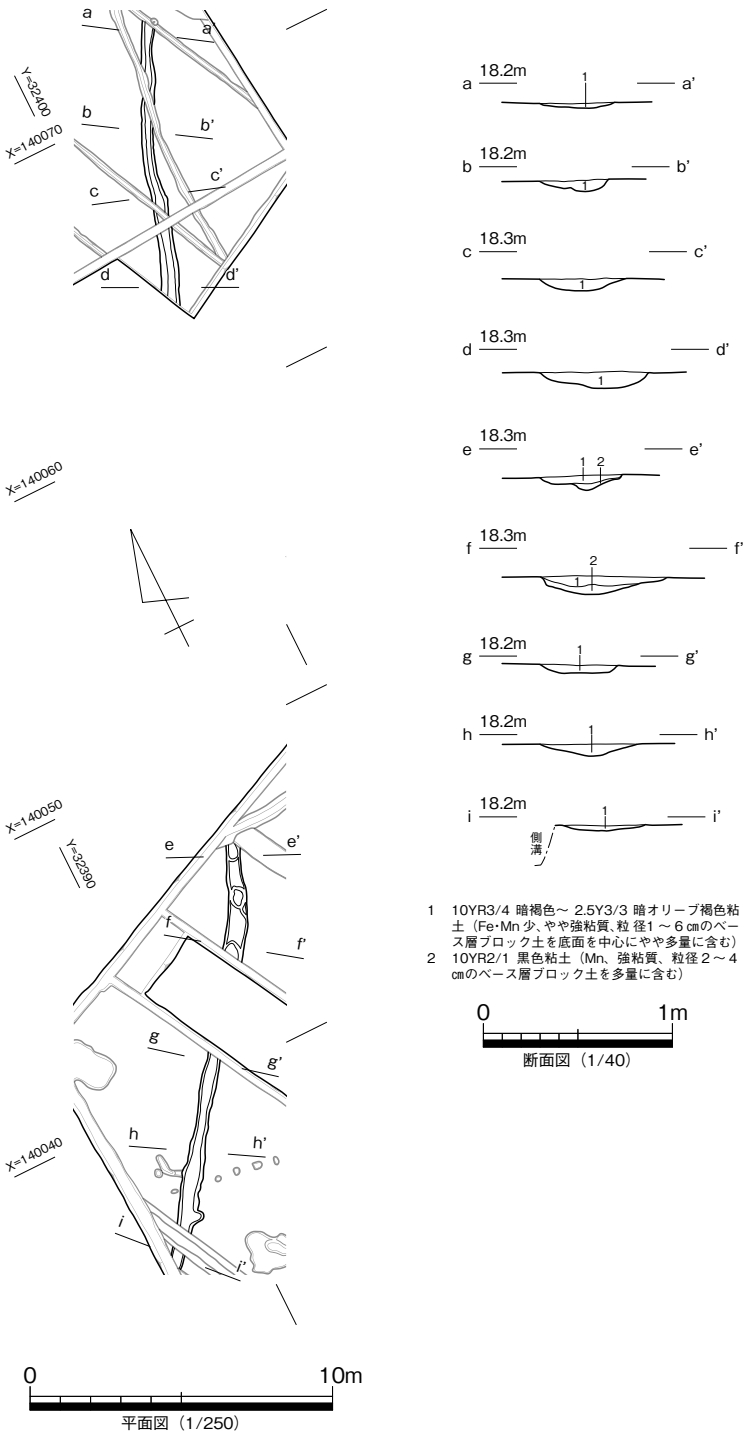
第 19 図　SD03・SD04 平・断面・出土遺物実測図



第 20 図　SD05 平・断面・出土遺物実測図

出面幅 0.42 ～ 0.45 m、残存深 0.14 ～ 0.18 m、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は、西端部で 17.72 mを、SD04 との合流部付近で 17.75 mをそれぞれ測り、底面の高低差より SD04 より分水して北西方向へ流下したものと考えられる。埋土は１～２層に分層され、溝底面に流水痕跡とみられる灰色細砂の薄層が堆積する。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片１点が出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難だが、上述した SD04 との関係より、弥生時代終末期を中心とした時期を想定する。

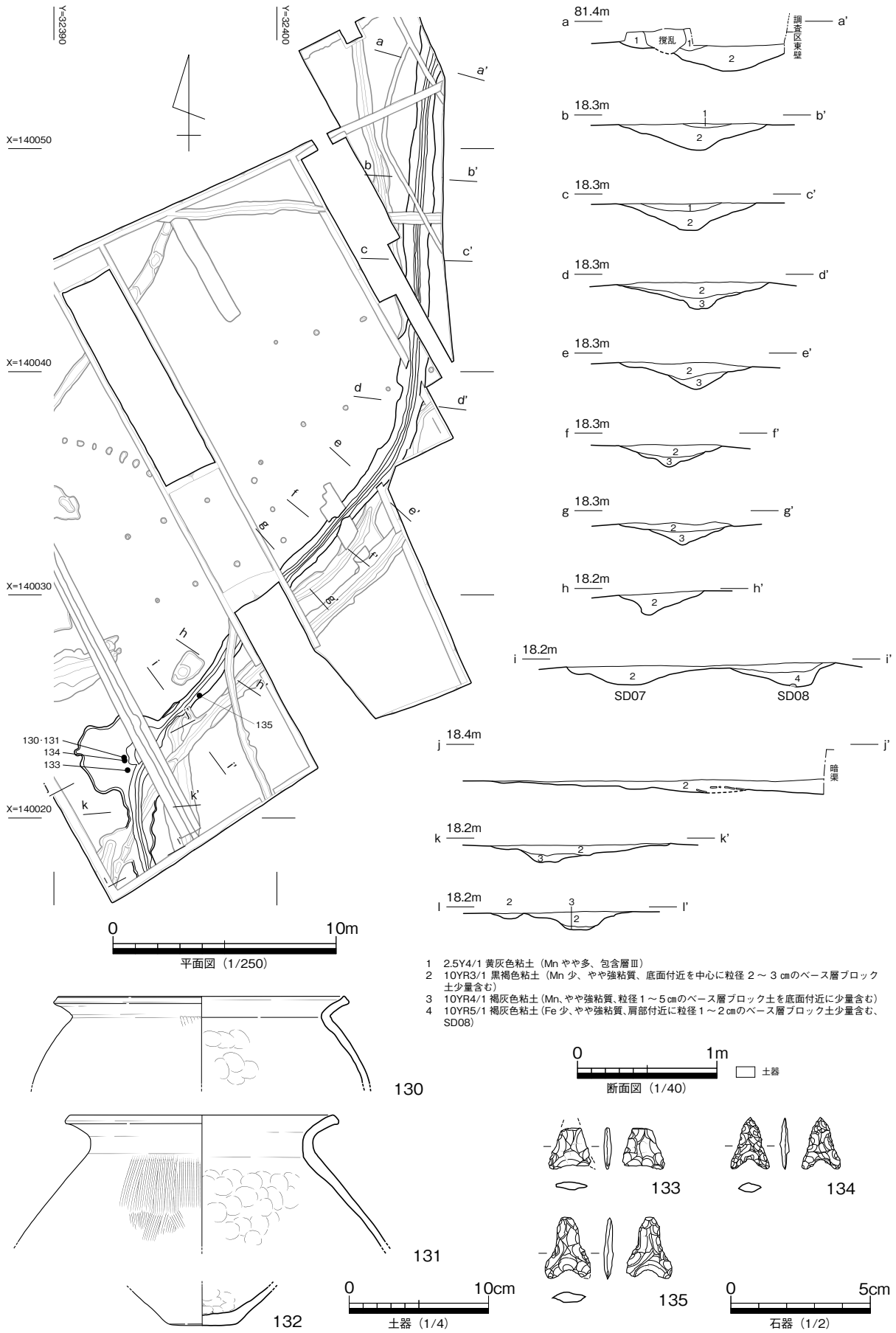


第 21 図　SD06 平・断面図

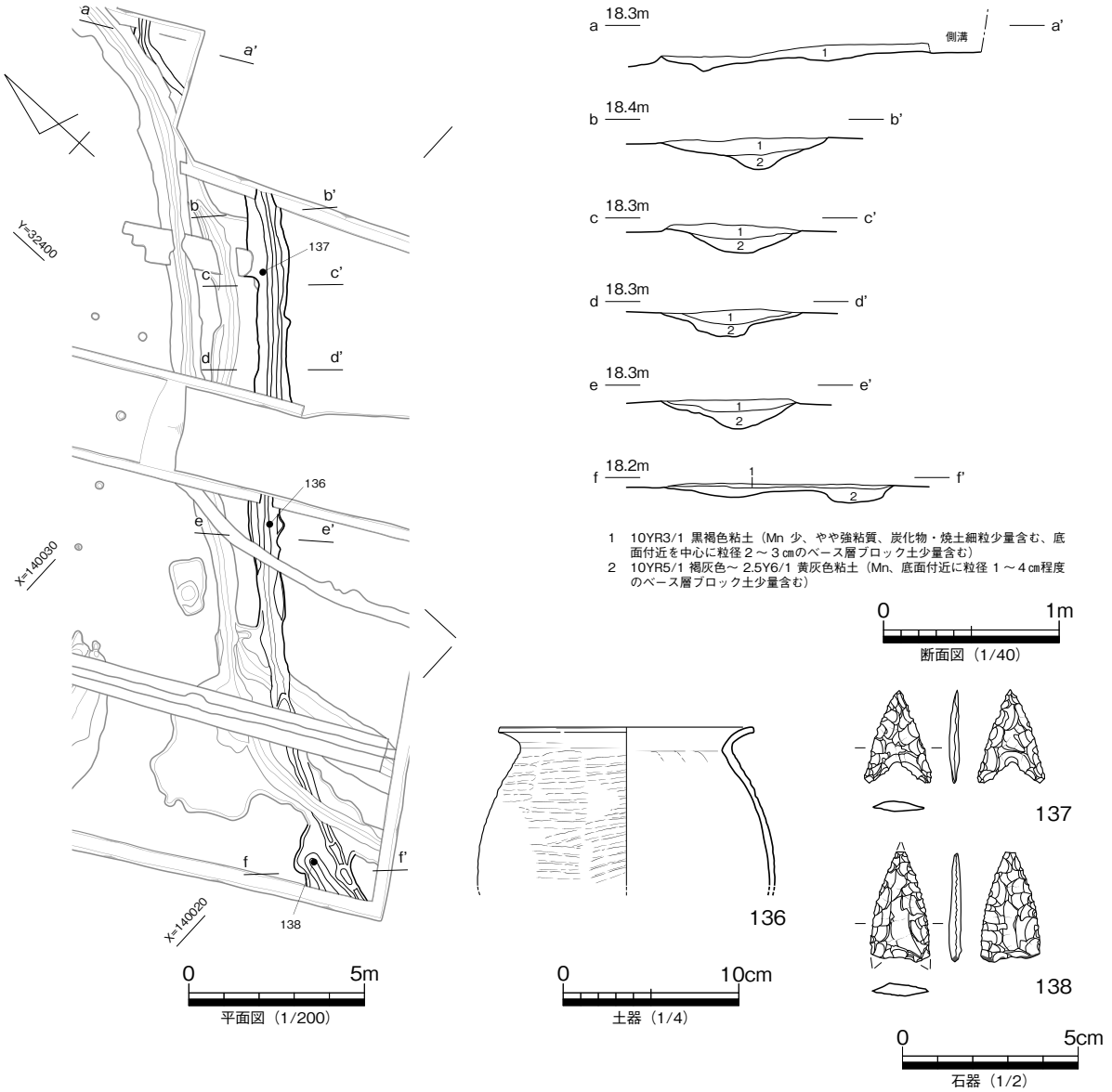
SD05（第 20 図）

Ⅱ区南西隅より大きくクランクしてⅡ区東半部を北へ延び、Ⅰ区南東隅部へつながる南北溝である。調査区間で約 9.2 mの未調査区があるが、流路方向、規模、埋土等より一連の遺構と考え報告する。未調査区を含め延長約 64.0 mを検出した。南半部では SD07 と方向を等しくしてほぼ重複し、規模も大差はなく、同溝の先行溝と考えられ、切り合い関係より SD08 より先行し、本溝→ SD08 → SD07 の順に開削・埋没したことが推測される。また、SD04・SD06・SD11・SD10 とも重複し、切り合い関係より SD06 より後出し、SD04・SD11・SD10 より先行する。

検出面幅 0.22 ～ 1.38 m、残存深 0.02 ～ 0.30 m、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。埋土は１～２層に細分され、灰白色ないし黒褐色粘土が堆積し、流水痕跡は認められず、機能停止後の自然堆積層とみられる。また、SD04 上層と近似し、近接した時期の堆積の可能性が考えられる。底面の標高は、18.07 ～ 18.16 mを測り、一定方向に傾斜した値を示さず、高低差より流下方向を特定することはできなかった。



第 22 図　SD07 平・断面・出土遺物実測図



第 23 図　SD08 平・断面・出土遺物実測図

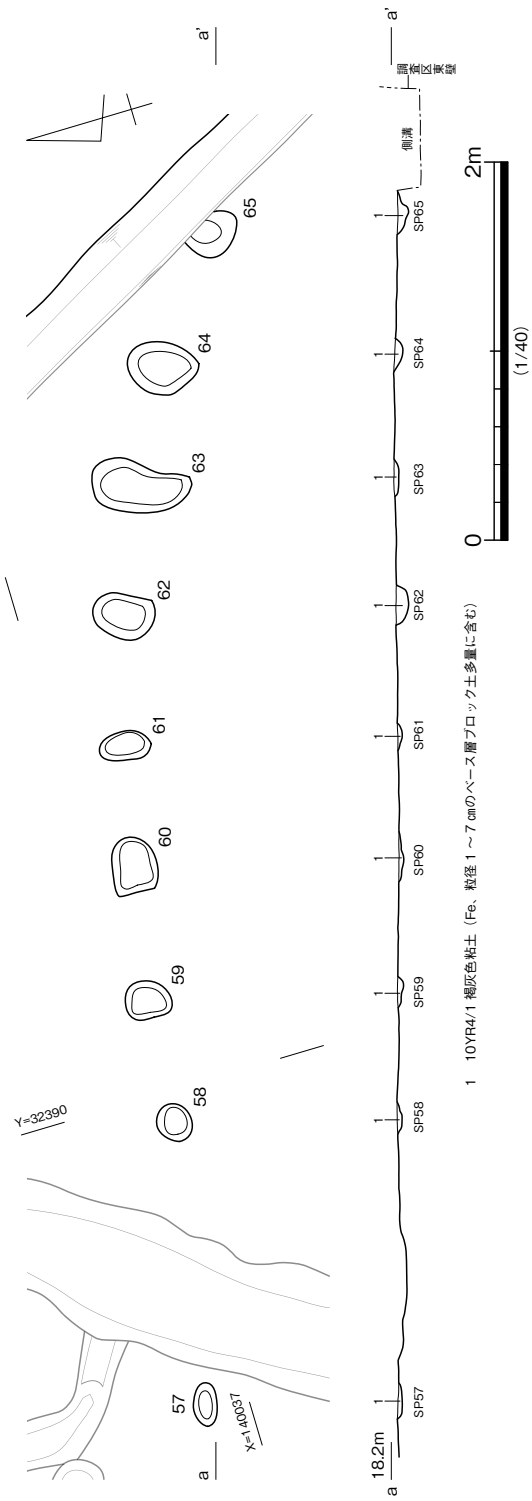
遺物は、弥生土器甕等の小片が 30 点程度とサヌカイト製石鏃２点、剥片２点が出土した。大半は器種不詳の小片であり、出土遺物より遺構の時期を特定することは困難であろう。既述したように重複関係より、SD04・SD07 より後出すること、埋土の特徴、後述する出土遺物等より、弥生時代後期末前後に位置付けられるものと考える。**126**・**127** は弥生土器甕。**126** の体部下半外面に煤付着。**127** は後期前葉以前に遡り、混入資料であろう。**128**・**129** は打製石鏃である。

SD06（第 21 図）

Ⅱ区北西隅よりⅠ区南東隅にかけて検出した南北溝である。調査区間で約 17.28 ｍの未調査部分があるが、流路方向や埋土の特徴が近似することから、一連の遺構と判断した。未調査部を含め検出長は約 41.3 ｍである。調査区内でやや蛇行するものの、概ねＮ 24°Ｅに配される。南端は調査区外へ延長し、北端は撹乱溝により途切れ、撹乱溝以北では延長部分が確認されなかった。したがって SD04 との関係は不明である。また､SD05･SD11 と重複し､切り合い関係よりそのいずれよりも先行する。検出面幅 0.34

～ 0.67 m、残存深 0.02 ～ 0.10 m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は１～２層に細分され、黒～褐色系粘土が堆積する。いずれもベース層ブロック土をやや多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。底面の標高は、南端部で 18.13 m、北端部で 18.07 mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたものと考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片３点が出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。埋土の特徴は、SD04 中層に近似しており、当該時期の遺構として報告する。



第 24 図　SD09 平・断面図

SD07（第 22 図）

Ⅱ区南東隅から北東隅へ緩やかにクランクして配された南北溝である。SD05･SD08･SD10･SD11 と重複し、SD05・SD08 より後出し、SD10・SD11 より先行する。南北両端は調査区外へ延長し、約 40.7 mを検出した。検出面幅 0.74 ～ 1.11 m、残存深 0.11 ～ 0.26 m、断面形は碗底状ないしU字状を呈する。埋土は１～２層に細分され、いずれもやや粘性の強い黒色系粘土が堆積し、流水痕跡は認められず、溝機能停止後の自然堆積層と考えられる。底面の標高は、南端部で 18.01 m前後、北端部で 18.04 m前後と概ね一定し、流下方向を特定するまでには至らなかった。

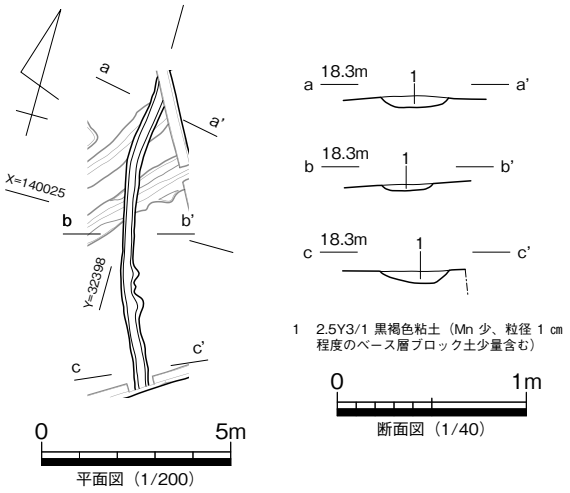
遺物は、弥生土器甕等の小片が 50 点程度及びサヌカイト製石鏃や剥片６点が出土した。大半は器種不詳の土器小片である。**130** ～ **132** は弥生土器甕、**133** ～ **135** は打製石鏃である。遺構の切り合い関係や出土遺物より、弥生時代終末期前後に位置付けられる。

SD08（第 23 図）

Ⅱ区南端第２面で検出した東西溝である。SD05・SD07・SD10 と重複し、切り合い関係より SD05 より後出し、SD07・SD10 より先行する。なお、SD05・SD07 との重複関係は、埋土が近似していることから、その判断には困難を極めた。やや緩やかに北に弧を描いて東西に配され、東西両端は調査区外へ延長し、約 20.5 mを検出した。検出面幅 0.70 ～ 0.95 m、残存深 0.11 ～ 0.18 m、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。埋土は２層に細分され、いずれも褐色系粘土が堆積し、流水痕跡は認められず、溝機能停止後の自然堆積層と考えられた。また、上位層は SD07 下位層と共通し、本溝が完全に埋没していない状況で、SD07 が開削された可能性も考え

られる。底面の標高は、西端部で 18.04 mを、東端部で 18.12 mをそれぞれ測り、高低差より西へ流下する可能性が考えられる。

遺物は、上位層を中心に弥生土器甕等の小片やサヌカイト製石鏃や剥片が、28 ℓ 入りコンテナ 1/3 箱程度出土した。土器類の大半は器種不詳の体部小片であり、図化可能であったのは弥生土器甕 **136** のみであった。出土遺物より、弥生時代終末期を中心とした時期に位置付けられる。**137**・**138** はサヌカイト製石鏃である。



第 25 図　SD10 平・断面図

SD09（第 24 図）

Ⅱ区北西部で検出した東西溝である。掘り方の大半は、遺構面の削奪により失われ、溝底面の鋤痕である小ピット列として検出した。わずかに北に弧を描いて東西に延び、両端は調査区内で途切れ、延長約 6.5 mを検出した。西端部付近で SD06 と重複し、切り合い関係より先行するとみられる。検出面幅 0.17 ～ 0.51 m、残存深 0.01 ～ 0.06 m、断面形は皿状ないし碗底状を呈する。埋土は小ピットすべて褐灰色粘土の単層で、ベース層ブロック土を多量に含むことから人為的に埋め戻された可能性が高い。底面の標高は、18.11 ～ 18.16 mを測るが、遺構の検出状況より流下方向を特定することはできなかった。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。SD06 より先行することから当該期の遺構として報告する。

SD10（第 25 図）

Ⅱ区中央南端部第２面で検出した溝である。緩やかに弧を描いて南北に配される。南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れ、約 8.0 mを検出した。SD07・SD08 と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。流路方向は、SD05・SD07・SD08 と近似することから、それら溝の後継溝と考えられる。検出面幅 0.28 ～ 0.39 m、残存深 0.03 ～ 0.06 m、断面形は皿状を呈する。埋土は黒褐色粘土の単層で、流水痕跡は認められず、溝機能停止後の自然堆積層であろう。底面の標高は、南端部で 18.17 mを、北端部で 18.13 mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下する可能性が高いと判断した。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片７点とサヌカイト剥片１点が出土したのみで、出土遺物より時期を特定することは困難である。既述した遺構の内容より、当該時期に位置付けられるものと考える。

弥生時代の水路群

既述したように、本遺跡からは多数の溝が検出された。これらは概ねⅠ区を中心に検出された東西方向の溝群と、Ⅱ区を中心に検出された南北方向の溝群に大別される。前者はほぼ同位置に重複、後者はほぼ同方向に併走して検出され、おそらくは改修や付替えを経て、それぞれが比較的長期に利用されたことを示していよう。

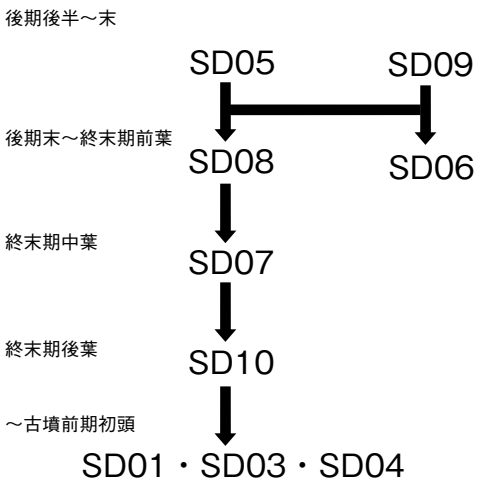
検出された溝を、重複関係や出土遺物等から整理すると、最も古く位置付けられるのは SD05 であり、埋没時期は後期後半～末が想定される。Ⅱ区を中心とする南北溝の開削を端緒として、遺跡周辺の灌漑

水路の整備が始められたと考えられる。次に、切り合い関係より SD08 と SD06 が開削されるが、両溝のどちらが先行するかは不明である。また、SD06 に先行して、SD09 が開削されるが、SD09 と SD05、SD08 との先後関係も明らかではない。SD08 の次には、SD07 が開削され、次に SD10 が配されて、南北方向の水路網は廃される。

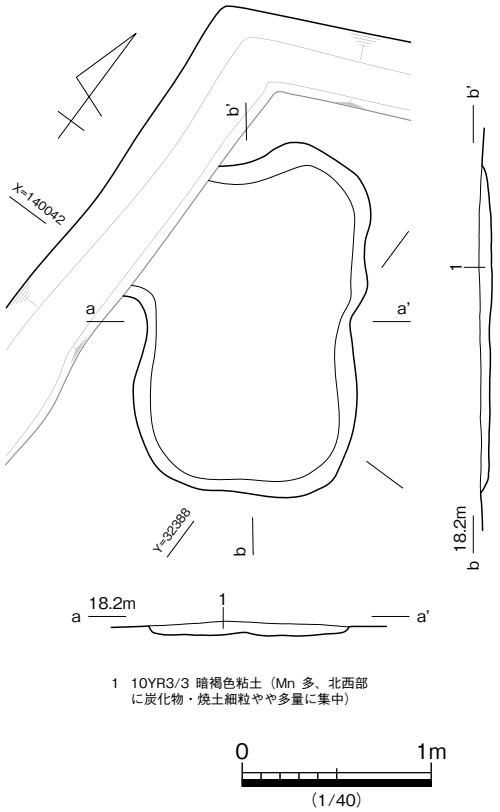
上述した SD08 以降の諸溝と、残る SD04 等東西溝との先後関係は不明ながら、南北溝群はほぼ同位置に開削されていることから、取水源が共通する同系統の水路群と考えられ、一方、それらとは流路方向が大きく異なる SD04 等の東西溝群は、取水源が異なり、まったく別系統の水路であろう。つまり、全体として南北溝から東西溝への変遷の可能性が想定される。以上を整理すると、第 26 図のとおりとなる。

出土遺物の点からも、SD05 は弥生時代後期後半から末ころに、SD08 は後期末から終末期前葉に、SD07 は同中葉、SD03、SD04 は同後葉～古墳時代前期初頭頃に位置付けられると考えられ、上記の想定と概ね矛盾しないと思われる。

南北溝はおそらくはその流路方向より、遺跡南部の土器川支流の旧河道より取水し、遺跡周辺の水田等の灌漑に利用された後、さらに旧河道へ排水したことが想像される。一方、検出した溝のなかで最も規模が大きく幹線水路と位置付けられる SD04 は、その流路方向より、旧大束川より直接取水し、土器川支流の旧河道へ排水したのであろう。つまり、こうした流路の変遷は、おそらくは耕地の拡大により、より規模が大きく安定した水源へと開発が進められたことがその要因と考えられる。また、出土遺物の僅少さは、集落との位置関係を反映している可能性がある。



第 26 図　溝変遷図



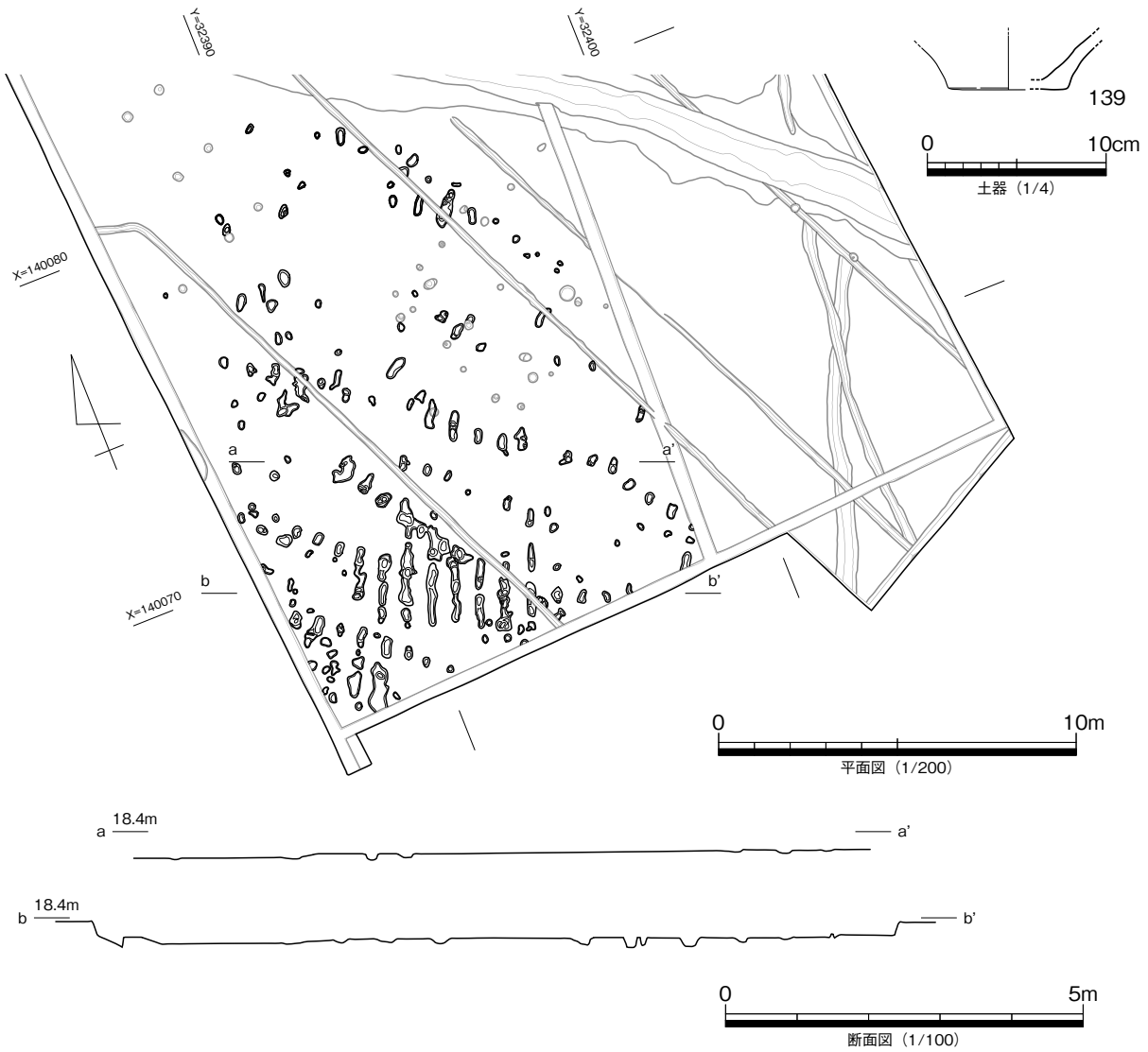
第 27 図　SX01 平・断面図

性格不明遺構

SX01（第 27 図）

Ⅱ区北西隅部で検出した浅い土坑状の落ち込みである。西端部は調査区外へ延長するが、そう大きくは広がらないとみられる。平面形は、東西 1.05 m、南北 1.73 mの歪な隅丸長方形状を呈する。残存深 0.05 m、断面形は浅い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は、暗褐色粘土の単層で、炭化物や焼土細粒がやや多量に含まれ、SD06 埋土に近似していた。

遺物は、器種不詳の土器小片 1 点が出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。積極的な根拠に乏しいが、埋土の特徴より当該時期の遺構として報告する。



第 28 図　耕作痕群平・断面・出土遺物実測図

古墳時代

明確に詳細な時期を特定できる遺構は確認されていないが、包含層出土の遺物から、Ⅰ区を中心に検出された耕作痕が当該期に位置付けられる可能性を想定する。今後周辺地での調査の進展により、明確な時期が特定されることを期待する。

耕作痕（第 28 図）

Ⅰ区南西部、SD04 南側で検出した。検出状況より、検出面幅 0.25 m前後の溝 21 条以上が併走するものとみられ、鋤溝群の可能性を考える。北東部では上面の削平により、一部平面小ピット状を呈しているが、これらも一連の遺構であろう。流路方向N 21.5° E、各溝の残存深 0.04 ～ 0.10 m、断面形は浅い皿状を呈し、埋土はいずれも灰色粘土の単層で、包含層Ⅲと酷似する。

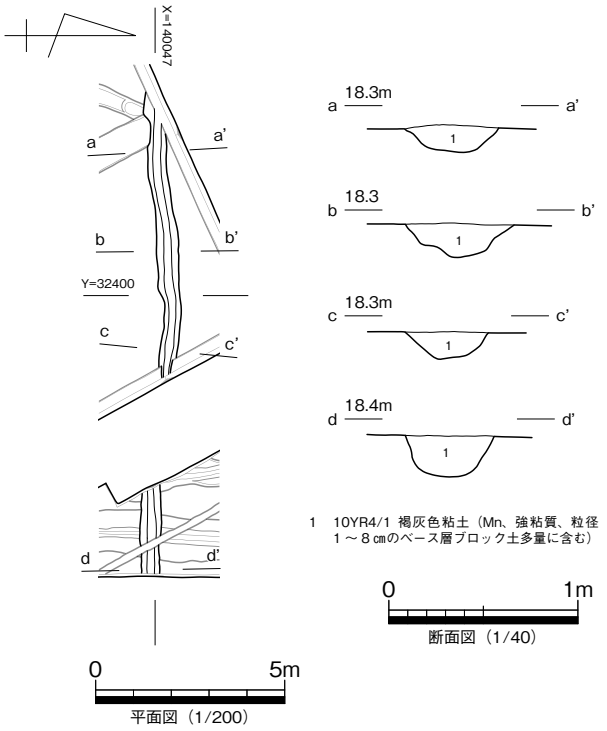
各溝からの出土遺物は乏しく、弥生土器小片２点とサヌカイト剥片１点が出土したのみで、出土遺物より、詳細な時期を特定することは困難である。**139** は弥生土器壺で、弥生前期に遡り、混入資料と考える。各溝埋土が、包含層Ⅲと酷似することから、包含層Ⅲの堆積時期５世紀後葉を下限とし、また、

流路方向が周辺の条里型地割に合致していないことからも、弥生時代終末期から古墳時代中期の時期幅のなかで位置付けられるものと考えられる。

古代

当該期は、Ⅱ区で溝 SD11 が確認されたのみである。そのほか、不定形土坑についても、当該期に位置付けられる可能性があるが、明確な時期は特定できない。また人為的に形成された遺構として判断に迷うものでもある。包含層中からは、当該期の遺物が比較的多量に出土しており、近在に遺跡が展開する可能性は高いと考えられる。

丸亀平野での条里型地割は、北から西へ約 30° 偏した方向で設定され、その施工時期は最も古く遡る地域で７世紀末から８世紀初頭の年代が想定されている（森下 1997）。



第 29 図　SD11 平・断面図

溝

SD11（第 29 図）

Ⅱ区北端部第１面で検出した東西溝である。東西両端は調査区外へ延長し、12.5 m を検出した。SD05 ～ SD07 と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。やや蛇行するものの、流路方向 89.04° W とほぼ正方位に配され、検出面幅 0.43 ～ 0.56 m、残存深 0.13 ～ 0.22 m、断面形は逆台形状を呈する。底面の標高は、西端部で 18.05 m、東端部で 18.09 m をそれぞれ測り、わずかに西へ傾斜する。埋土は褐灰色粘土の単層で、流水痕跡は認められず、ベース層ブロック土が多量に含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

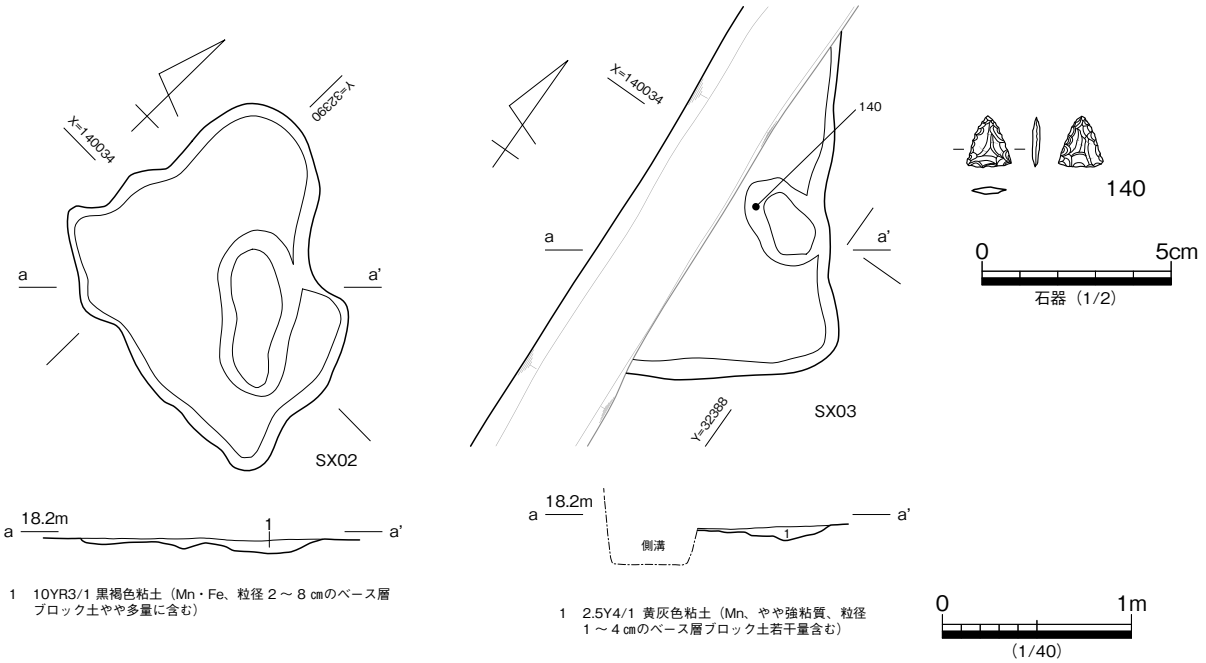
遺物は、器種不詳の土器小片が４点出土したのみで、出土遺物より時期を特定することは困難である。正方位に配されることから当該時期に位置付けられるものと考える。

性格不明遺構

SX02（第 30 図）

Ⅱ区北西部で検出した、浅い落ち込みである。平面形は、東西 1.22 m、南北 1.92 m の規模を測るが、一定した形状を呈さない。残存深は 0.07 m で、断面形は概ね皿状を呈するが、底面には顕著な起伏が認められる。埋土は、黒褐色粘土の単層で、上位包含層Ⅱに近似する。平・断面形状より、人為的な遺構ではなく、自然地形の落ち込みである可能性が高いと判断した。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、上述したように埋土が包含層Ⅱと近似することから、９世紀代には埋没したものと考えられる。



第 30 図　SX02（左）・SX03（右）平・断面・出土遺物実測図

SX03（第 30 図）

Ⅱ区中央西端で検出した、浅い落ち込みである。溝 SD06 と重複し、切り合い関係より SD06 より後出する。東西 0.61 m以上、南北 1.80 m以上の平面歪な略方形を呈する。残存深は 0.02 ～ 0.06 mで、断面形は概ね皿状を呈するが、底面には顕著な起伏が認められる。埋土は黄灰色粘土の単層で、上位の包含層Ⅱに近似する。遺構の大半は調査区外へ延長するが、平・断面形状より人為的な遺構ではなく、自然地形の落ち込みである可能性が高いと判断した。

遺物は、小型の平基式石鏃 **140** が出土したのみで、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。SD06 より後出することは確実であり、また、上述したように埋土が包含層Ⅱと近似することから、9 世紀代には埋没したものと考えられる。

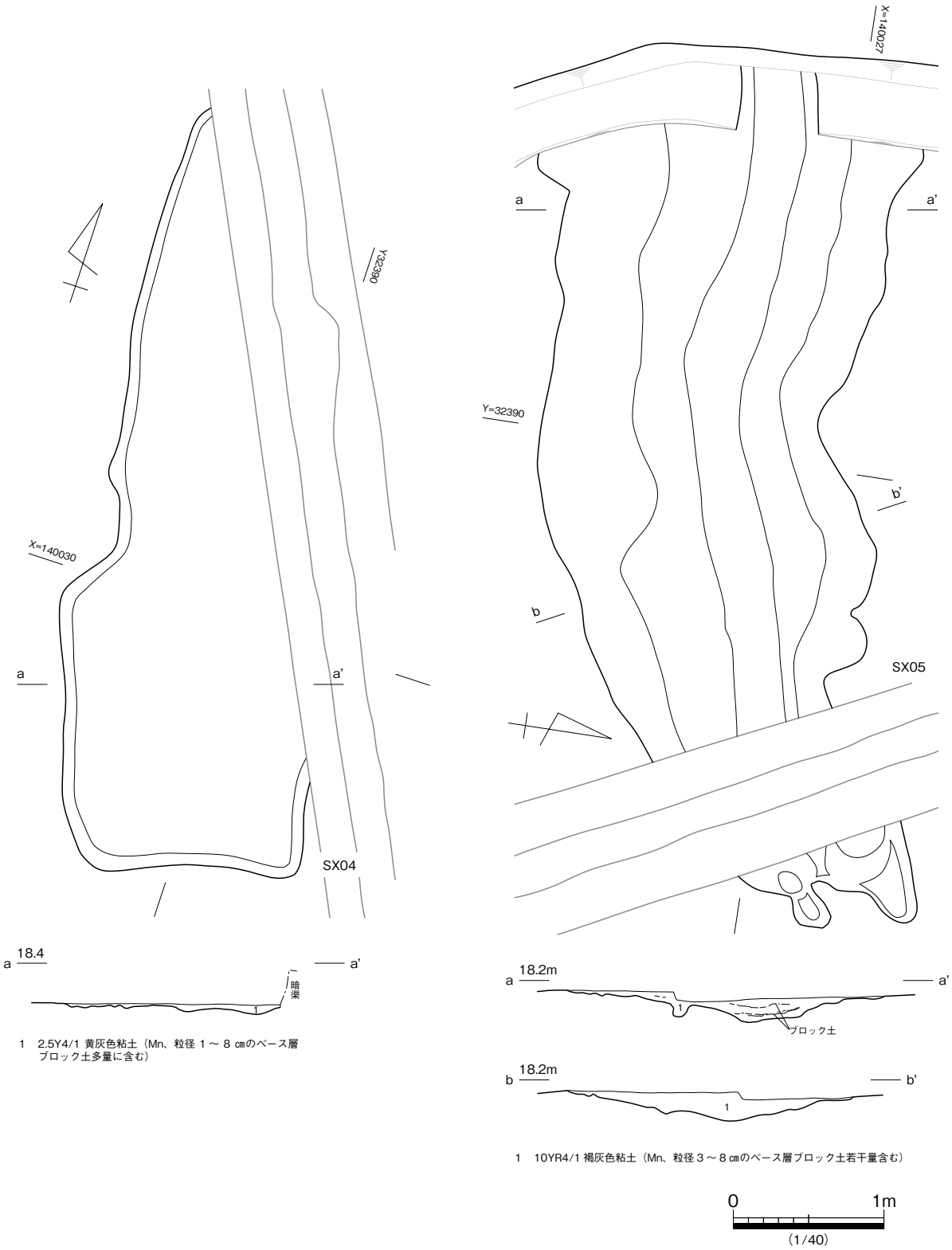
SX04（第 31 図）

Ⅱ区中央西端付近で検出した、浅い落ち込みである。東半部は攪乱溝に切られるが、攪乱溝より東側で延長部は確認されなかった。平面形は、東西 1.43 m以上、南北 5.02 m以上のやや歪な隅丸長方形状を呈するとみられる。残存深は 0.06 mと浅く、断面形は概ね皿状を呈するが、底面には顕著な起伏が認められた。埋土は黄灰色粘土の単層で、上位の包含層Ⅱに近似する。既述した SX02 と同様に、人為的な遺構ではなく、自然地形の落ち込みである可能性が高いと判断した。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、既述したように SX02 と同内容の性格が想定され、9 世紀代には埋没したものと考えられる。

SX05（第 31 図）

Ⅱ区中央西端部で検出した、東西に配された溝状を呈する浅い落ち込みである。西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れ、延長約 5.73 mを検出した。検出面幅 1.20 ～ 2.15 m、残存深 0.18 m、断面形は概ね皿状ないし碗底状を呈するが、底面には顕著な起伏が認められる。埋土は褐灰色粘土の単



第 31 図　SX04（左）・SX05（右）平・断面図

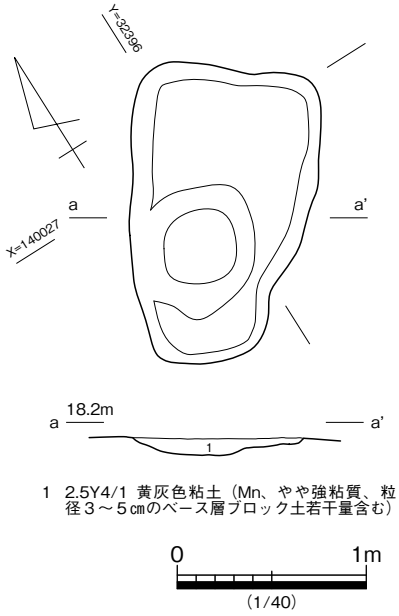
層で、若干量のブロック土が含まれるものの、自然堆積層と考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片 3 点が出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。既述した SX02 等と同様の性格が想定され、埋土も近似することから、同時期の埋没の可能性が考えられる。

SX06（第 32 図）

Ⅱ区中央南半部で検出した土坑状の落ち込みである。東西 1.54 m、南北 0.90 mの平面不整な隅丸長方形を呈する。残存深は 0.09 mと浅く、断面形は浅い逆台形状を呈し、底面には若干の起伏が認められた。埋土は黄灰色粘土の単層で、SX03 と近似する。平･断面形状より人為的な遺構ではなく、自然地形の落ち込みである可能性が高いと判断した。

遺物はサヌカイト剥片１点が出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。しかし、上述したように埋土が包含層Ⅱと近似することから、9 世紀代には埋没したものと考えられる。



第 32 図　SX06 平・断面図

中世

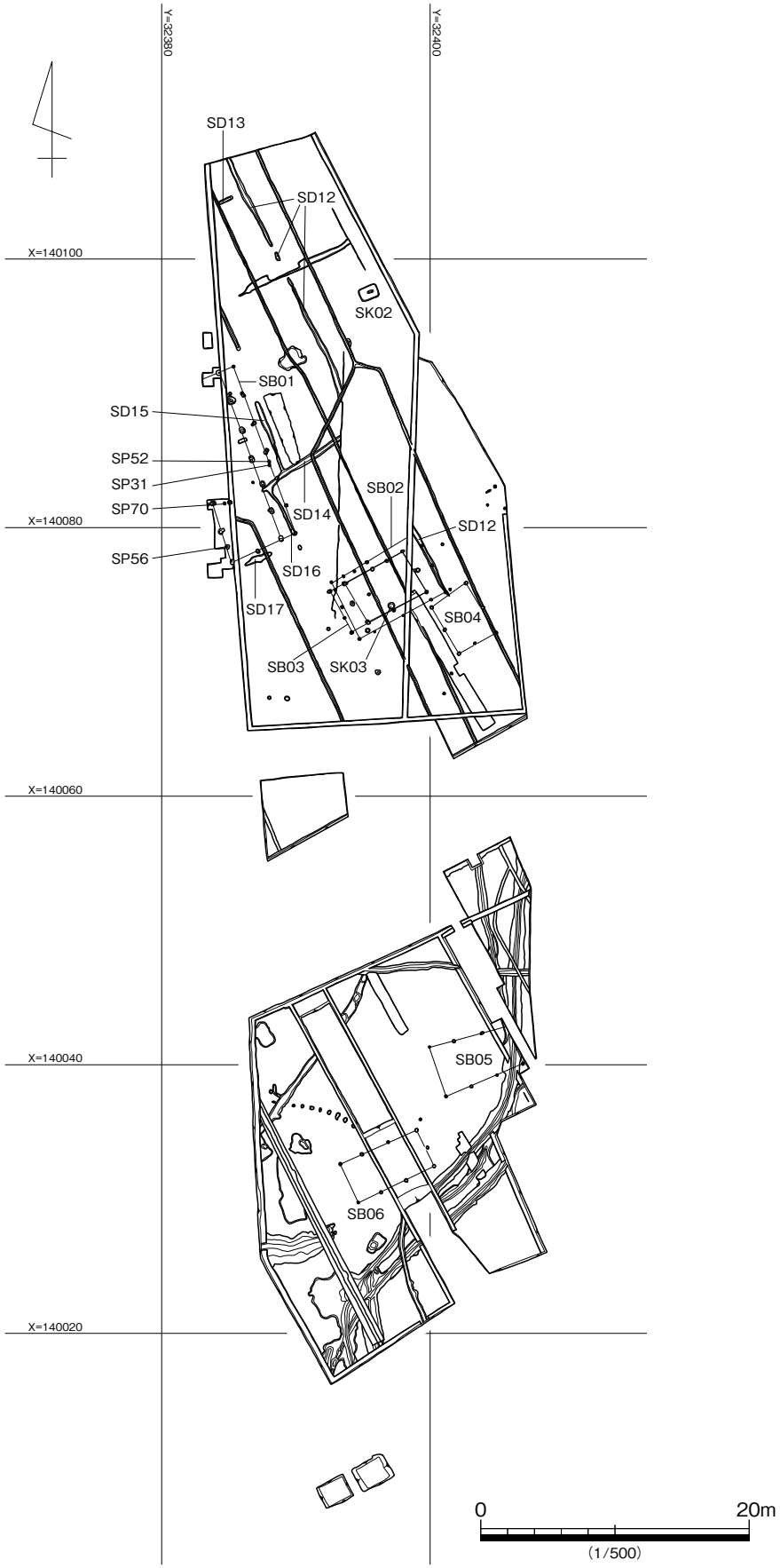
当該期の遺構は、第１遺構面において６棟の掘立柱建物と溝群を検出した。建物群は、床面積 53㎡の大型建物を含み、有力階層の屋敷地等と評価される。また、その主軸方向は、概ね条里型地割の方向と合致し、本地域での地割の形成が当該期に求められる可能性を示唆するものである。溝群は、建物群と概ね重複する位置で検出され、屋敷地内の区画溝もしくは建物雨落溝の可能性が考えられる。なお、屋敷地周囲を囲繞する溝等の施設は確認されていない。

掘立柱建物

SB01（第 34 図）

Ⅰ区中央西端で検出した掘立柱建物である。西半部は調査区外へ延長するが、建物規模等主要な情報は得ることができた。梁間２間（4.01 m）、桁行６間（13.22 m）、床面積 53.01㎡、主軸方向N 20.49° W、平面プランは整った矩形を呈し、東面に庇を伴う南北棟の大型側柱建物として復元した。東面庇の柱穴が溝 SD14･SD16 と重複し、切り合い関係より両溝より先行する。桁行東列の柱間寸法は、1.85 ～ 2.419 mとやや不均等だが、柱列の通りは概ね揃う。身舎部分の柱穴掘り方は、辺もしくは径 0.25 ～ 0.61 m の隅丸方形ないし不整円形等を呈し、残存深 0.29 ～ 0.57 mとやや深いものが多く、底面の標高 17.62 ～ 17.92 mであった。身舎部分を中心に、SP27 等多くの柱穴で、柱材の抜き取り痕を確認した。また、庇列南より３間目の列上で、土師皿埋納ピット２基を検出した。詳細は後述するが、位置関係より本建物に伴う地鎮遺構と考える。

遺物量は多く、各柱穴より土師器甕、土師質土器皿･杯･碗、黒色土器碗、器種不詳の須恵器、瓦器碗、白磁、布目平瓦、焼土塊等の破片、サヌカイト石鏃が、計約 230 点出土した。**149** は SP25 より出土した土師質土器杯。SP27 からは土師質土器碗 **157**、同杯 **147**・**148**、布目平瓦片 **160** が、SP30 からは土師質土器皿 **141**・**146**、黒色土器碗 **151** が、SP32 からは土師質土器皿 **144** が、SP33 からは土師質土器碗 **156** や土師器甕 **161** が、SK03 からは土師質土器皿 **145** や同碗 **153**・**155**、黒色土器碗 **154** が、SP45 からは和泉型瓦器碗 **158** が、SP47 からは土師質土器皿 **142**・**143** や同杯 **150** が、SP54 からは土師質土器碗 **152** がそれぞれ出土した。**146** を除いていずれも小片化しており、混入資料であろう。SP30 よ

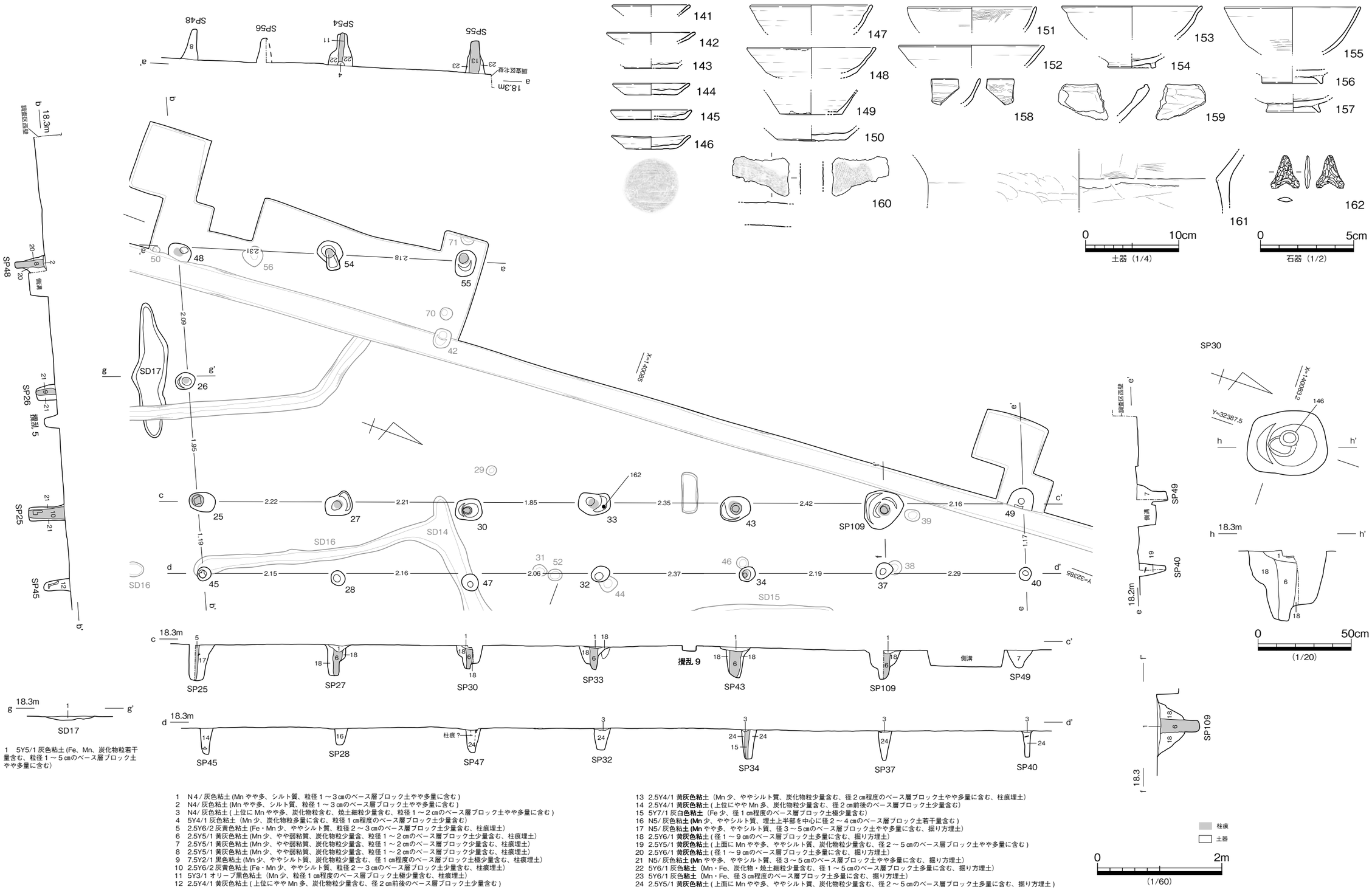


第 33 図　第 1 遺構面平面図

り出土した黒色土器碗の口縁部小片 **151** は、SP33 より出土した破片と接合した。土師質土器皿 **146** は完形品であり、地鎮等の祭祀に伴う資料の可能性がある。**161** の外面には煤が付着する。**162** は、SP33 より出土した凹基式石鏃である。出土遺物より、12 世紀中葉での廃絶の可能性が考えられ、後述する SB02 と同時併存の建物と評価したい。

SB02（第 35 図）

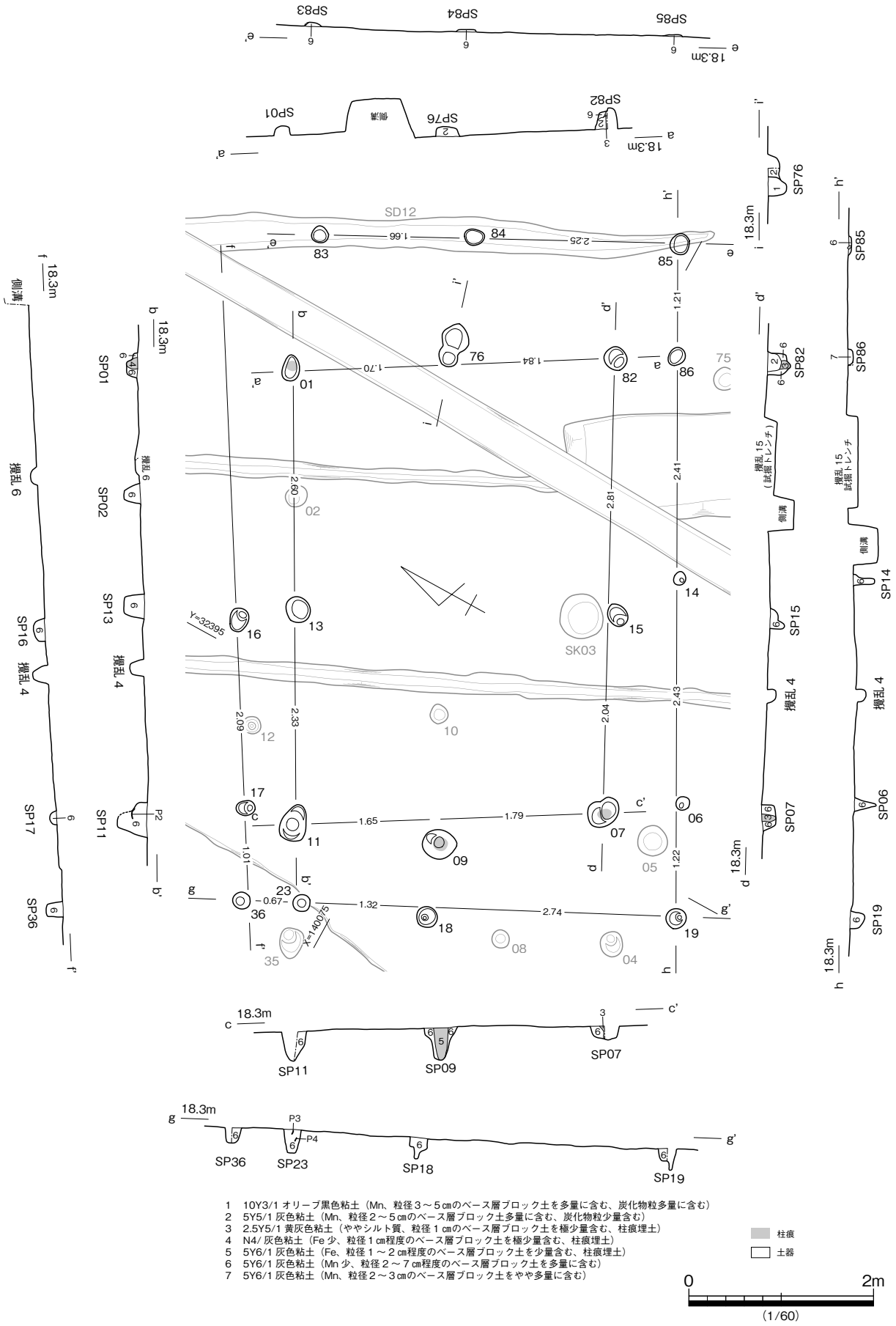
Ⅰ区中央南半部第 1 面で検出した掘立柱建物である。梁間 2 間（3.43 m）、桁行 2 間（4.93 m）、床面積 16.93 ㎡、主軸方向 N 61.29° E、平面プランはやや整った矩形を呈し、四面に庇を有する東西棟の側柱建物として復元した。建物主軸は、周辺の条里型地割の方向と概ね合致する。東面庇の柱穴が SD12 と重複し、切り合い関係より SD12 より先行する。桁行の柱間寸法は 2.04 ～ 2.81 m と、東側がやや広く配され、とくに桁行南辺では中央柱と南東隅柱間が 2.81 m と最も広く、建物出入口として使用されていた可能性がある。梁間中央穴は、南北隅柱を結んだラインよ



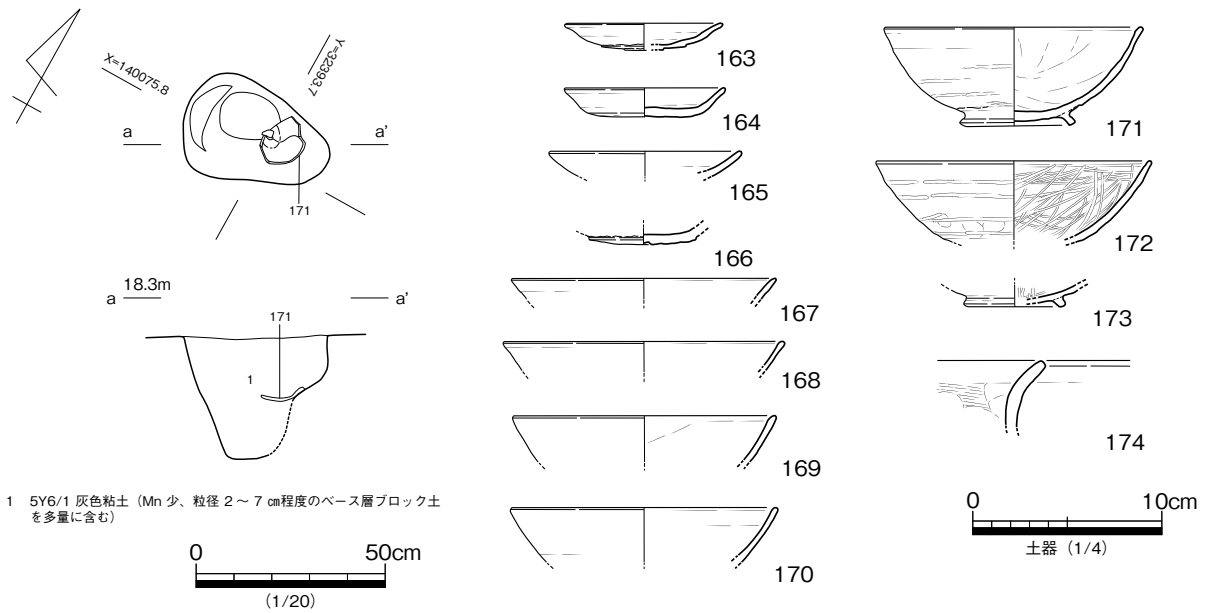
1　5Y5/1 灰色粘土 (Fe、Mn、炭化物粒若干量含む、粒径 1 ～ 5 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む)

1　N 4 / 灰色粘土 (Mn やや多、シルト質、粒径 1 ～ 3 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む)
2　N4/ 灰色粘土 (Mn やや多、シルト質、粒径 1 ～ 3 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む)
3　N4/ 灰色粘土 (上位に Mn やや多、炭化物粒含む、焼土細粒少量含む、粒径 1 ～ 2 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む)
4　5Y4/1 灰色粘土（Mn 少、炭化物粒多量に含む、粒径 1 ㎝程度のベース層ブロック土少量含む）
5　2.5Y6/2 灰黄色粘土 (Fe・Mn 少、ややシルト質、粒径 2 ～ 3 ㎝のベース層ブロック土少量含む、柱痕埋土）
6　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (Mn 少、やや弱粘質、炭化物粒少量含、粒径 1 ～ 2 ㎝のベース層ブロック土少量含む、柱痕埋土）
7　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (Mn 少、やや弱粘質、炭化物粒少量含、粒径 1 ～ 2 ㎝のベース層ブロック少量含む、柱痕埋土）
8　2.5Y5/1 黄灰色粘土 (Mn 少、やや弱粘質、炭化物粒少量含、粒径 1 ～ 2 ㎝のベース層ブロック少量含む、柱痕埋土）
9　7.5Y2/1 黒色粘土 (Mn 少、ややシルト質、炭化物粒少量含む、径 1 ㎝程度のベース層ブロック土極少量含む、柱痕埋土）
10　2.5Y6/2 灰黄色粘土 (Fe・Mn 少、ややシルト質、粒径 2 ～ 3 ㎝のベース層ブロック土少量含む、柱痕埋土）
11　5Y3/1 オリーブ黒色粘土（Mn 少、粒径 1 ㎝程度のベース層ブロック土極少量含む、柱痕埋土）
12　2.5Y4/1 黄灰色粘土 (上位にやや Mn 多、炭化物粒少量含む、径 2 ㎝前後のベース層ブロック土少量含む)
13　2.5Y4/1 **黄灰色粘土**（Mn 少、ややシルト質、炭化物粒少量含む、径 2 ㎝程度のベース層ブロック土やや多量に含む、柱痕埋土）
14　2.5Y4/1 **黄灰色粘土** (上位にやや Mn 多、炭化物粒少量含む、径 2 ㎝前後のベース層ブロック土少量含む）
15　5Y7/1 **灰白色粘土**（Fe 少、径 1 ㎝程度のベース層ブロック土極少量含む）
16　N5/ 灰色粘土 **(Mn)** 少、ややシルト質、埋土上半部を中心に径 2 ～ 4 ㎝のベース層ブロック土若干量含む)
17　N5/ 灰色粘土 **(Mn** やや多、ややシルト質、径 3 ～ 5 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む、掘り方埋土）
18　2.5Y6/1 **黄灰色粘土** (径 1 ～ 9 ㎝のベース層ブロック土多量に含む、掘り方埋土）
19　2.5Y5/1 **黄灰色粘土** (上面に Mn やや多、ややシルト質、炭化物粒少量含む、径 2 ～ 5 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む)
20　2.5Y6/1 **黄灰色粘土** (径 1 ～ 9 ㎝のベース層ブロック土多量に含む、掘り方埋土）
21　N5/ 灰色粘土 **(Mn** やや多、ややシルト質、径 3 ～ 5 ㎝のベース層ブロック土やや多量に含む、掘り方埋土）
22　5Y6/1 灰色**粘土**（Mn・Fe、炭化物・焼土細粒少量含む、径 1 ～ 5 ㎝のベース層ブロック土多量に含む、掘り方埋土）
23　5Y6/1 灰色**粘土**（Mn・Fe、径 3 ㎝程度のベース層ブロック土多量に含む、掘り方埋土）
24　2.5Y5/1 **黄灰色粘土** (上面に Mn やや多、ややシルト質、炭化物粒少量含む、径 2 ～ 5 ㎝のベース層ブロック土多量に含む、掘り方埋土)

第 34 図　SB01 平・断面・出土遺物実測図



第 35 図　SB02 平・断面図



第 36 図　SB02 遺物出土状況・出土遺物実測図

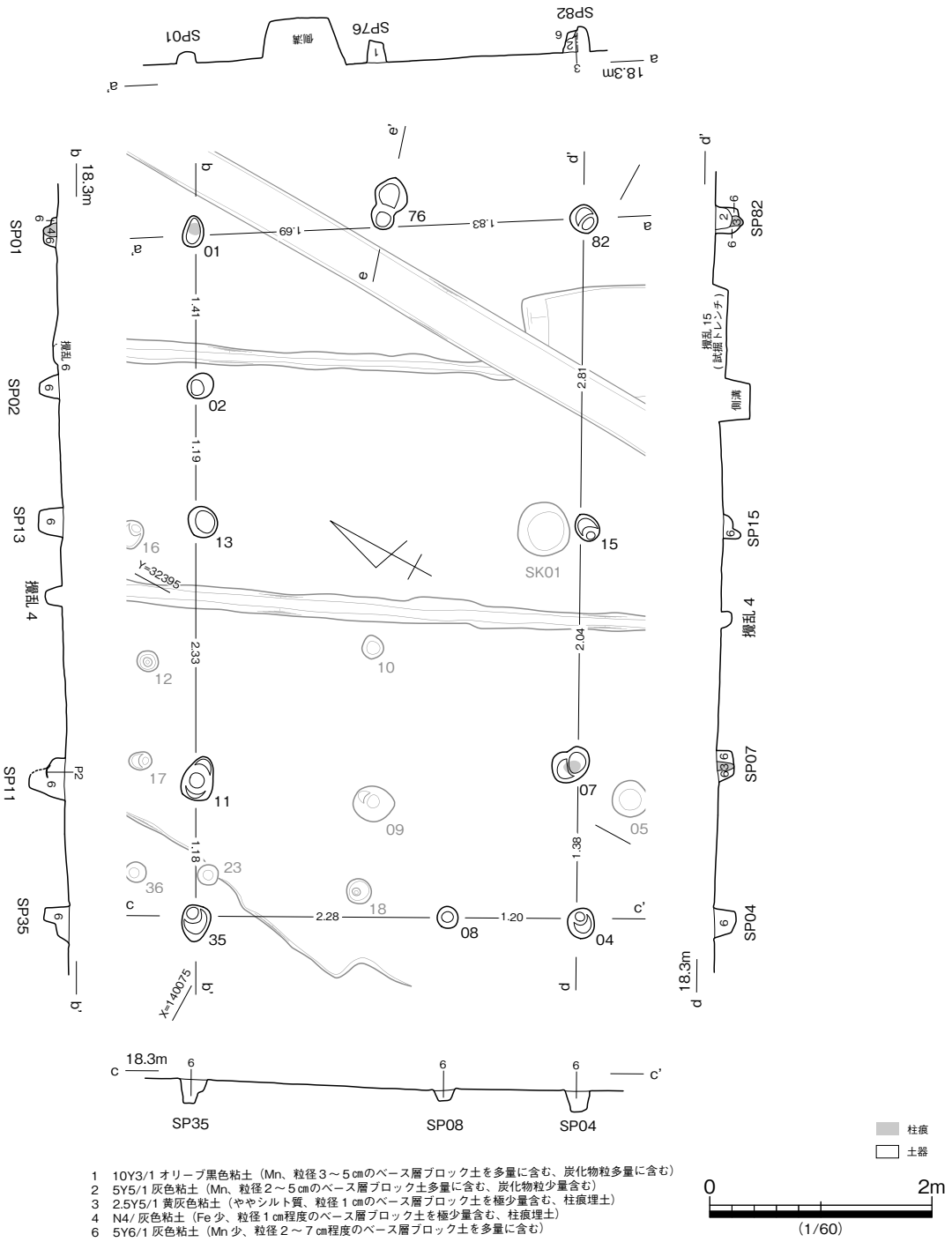
り約 0.25 m外側に配され、棟持ち柱状を呈する。身舎部分の柱穴の掘り方は、径もしくは長軸 0.12 ～ 0.35 mの円ないし楕円形を呈し、残存深 0.12 ～ 0.35 m、底面の標高 17.83 ～ 18.09 mであった。また、SP82 では柱材の抜き取りを確認している。

遺物は、柱穴より土師器甕、土師質土器皿・杯・碗、黒色土器碗、焼土塊のほか、器種不詳の土師質土器や須恵器等の小片が 40 点程度出土した。**164**・**169** は SP01 より出土したそれぞれ黒色土器碗と土師質土器皿である。**165** は SP36 より出土した土師質土器皿である。SP11 からは土師質土器碗 **168**・**171**、黒色土器碗 **167** が出土した。**171** は口縁部を欠損する以外は、ほぼ完形に近い。高台端及び高台内に被熱による黒化部分を認める。柱穴中位のテラス部分より、口縁部を上に出土しており、柱材抜き取り後の地鎮に伴う可能性が考えられる。**170**・**172**・**173** は SP23 出土の黒色土器碗。**170** は炭素の吸着はややあまい。**163**・**166** は SP76 出土の土師質土器皿。**174** は SP76 出土の土師器甕である。出土遺物より、12 世紀前半代に廃絶したものと考える。

SB03（第 37 図）

Ⅰ区中央南半部第 1 面、SB02 とほぼ重複して検出された掘立柱建物である。SB02 と梁間西列を除く柱穴を共有し、ほぼ同位置に建て替えられたものと判断されるが、どちらが先行する建物なのかは、調査成果からは判断できなかった。後述するように、本建物梁間西列からの遺物は乏しく、その点で他の柱穴とは差異を認めることができ、SB02 より先行する可能性を想定したい。また、ほぼ同位置に建て替えられていることから、本建物が本調査区の建物群のなかで、重要な位置を占めていたことを示していると考える。梁間 2 間（3.50 m）、桁行 4 間（6.17 m）、床面積 21.60㎡、主軸方向 N 61.61° E、平面プランはやや歪な矩形を呈する東西棟の側柱建物として復元した。

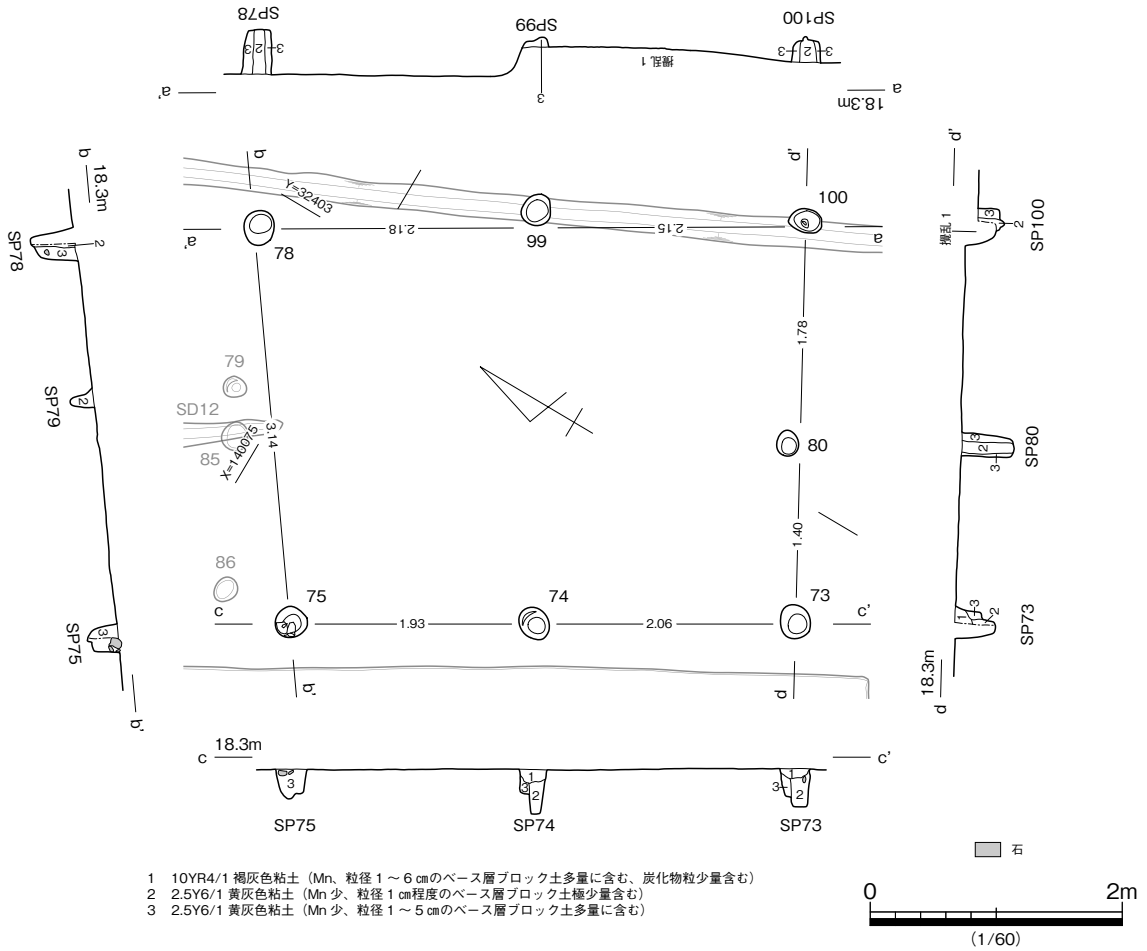
遺物は、梁間西列の各柱穴より、器種不詳の土師質土器や須恵器の小片が各 1 点出土したのみである。既述したように、SB02 の先行建物と考えられ、12 世紀前半代に機能していたものと考える。



第 37 図　SB03 平・断面・出土遺物実測図

SB04（第 38 図）

Ⅰ区南東部第１面で検出した掘立柱建物である。梁間２間、桁行２間、床面積 13.07㎡、主軸方向N 31.19° W、平面プランは桁行東列が西列と比して 0.4 m程長い、不整な矩形を呈する南北棟の側柱建物として復元した。既述した SB02 とはほぼ接して配されており、同時併存の可能性は低い。一方建物の主軸方向は、SB02・SB03 と概ね直交し、SB03 とは約 1.2 m離れて位置していることから、SB03 と同時併存の可能性を想定したい。桁行の柱間寸法は 1.93 ～ 2.15 mとやや一定しないが、柱列の通りは概ね揃う。柱穴掘り方は、径もしくは長軸 0.17 ～ 0.27 mの略円ないし楕円形を呈し、底面標高は 17.77 ～



第 38 図　SB04 平・断面図

17.97 mを測り、SB02 と比してやや深く掘り込まれている。

本建物からは、土師質土器皿・碗、黒色土器碗、須恵器等の小片が計 26 点出土した。図化可能な遺物はないが、既述した SB03 との併存関係より、12 世紀前半代を中心とした時期と考えられる。

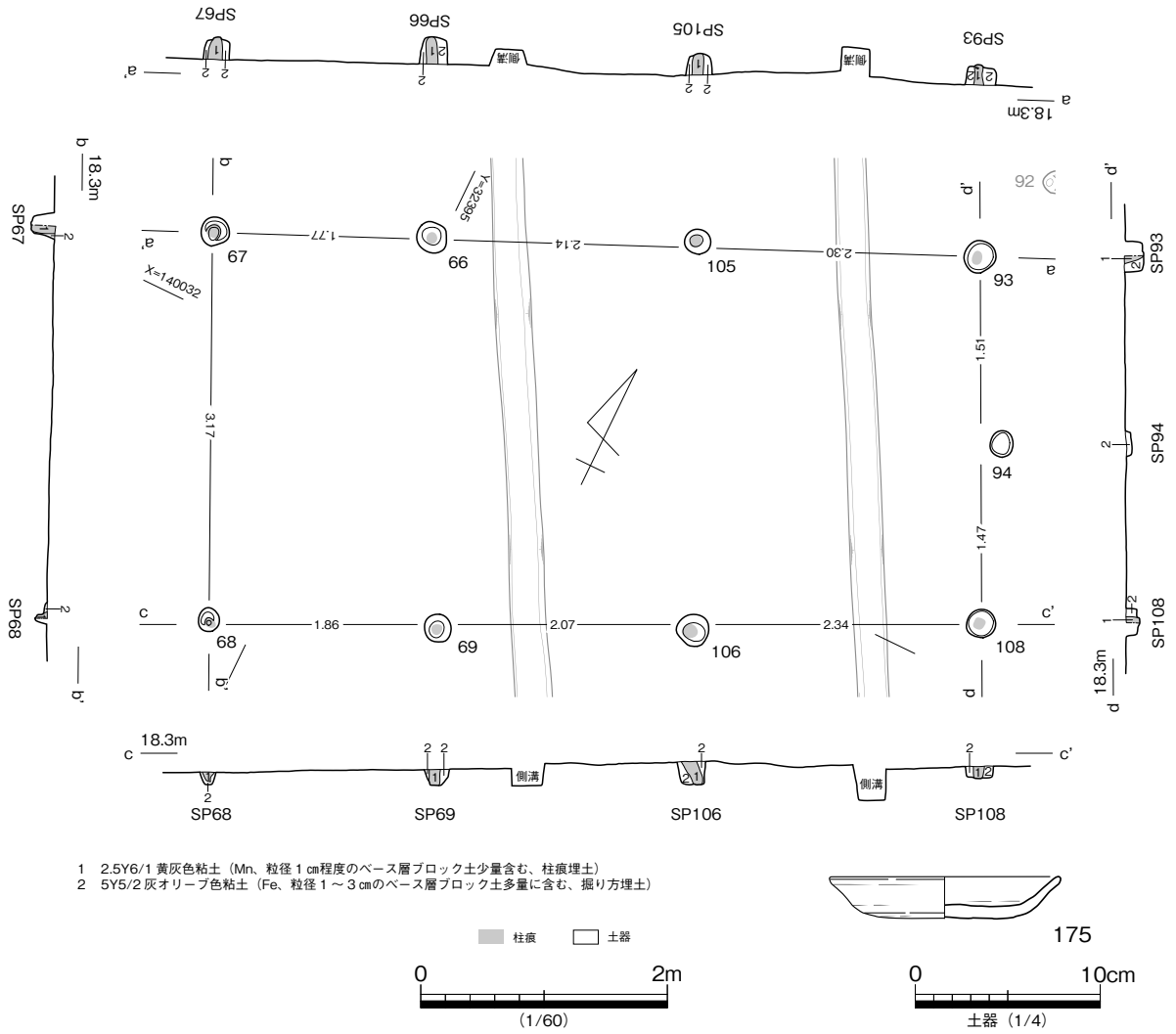
SB05（第 39 図）

Ⅱ区中央部第２面で検出した掘立柱建物である。梁間２間、桁行３間、床面積 19.21㎡、主軸方向N 65.08° W、平面プランは概ね整った矩形を呈する東西棟の側柱建物として復元した。桁行の柱間寸法は 1.77 ～ 2.34 mと一定しないが、柱通りは概ね揃う。桁行南列東端の柱間寸法は 2.34 mと最も広く、この部分が出入口となる可能性が高い。柱穴掘り方は、径もしくは長軸 0.16 ～ 0.25 mの略円ないしは不整円形を呈し、底面標高は 17.94 ～ 18.19 mであった。

遺物は、SP66 の掘り方より器種不詳の土師質土器小片１点、SP93 の柱痕部より土師質土器杯等の小片３点が出土したのみである。**175** は土師質土器杯で、13 世紀前葉頃の遺物と考えられる。

SB06（第 40 図）

Ⅱ区中央東端第２面で検出した掘立柱建物である。北東隅柱が調査区堺となるため、検出できていない。梁間１間、桁行３間、床面積 24.00㎡、主軸方向N 70.78° E、平面プランは桁行北列と南列の軸方向が７°程異なり、不整な四辺形を呈する東西棟の側柱建物として復元した。桁行の柱間寸法は 1.88 ～



第 39 図　SB05 平・断面・出土遺物実測図

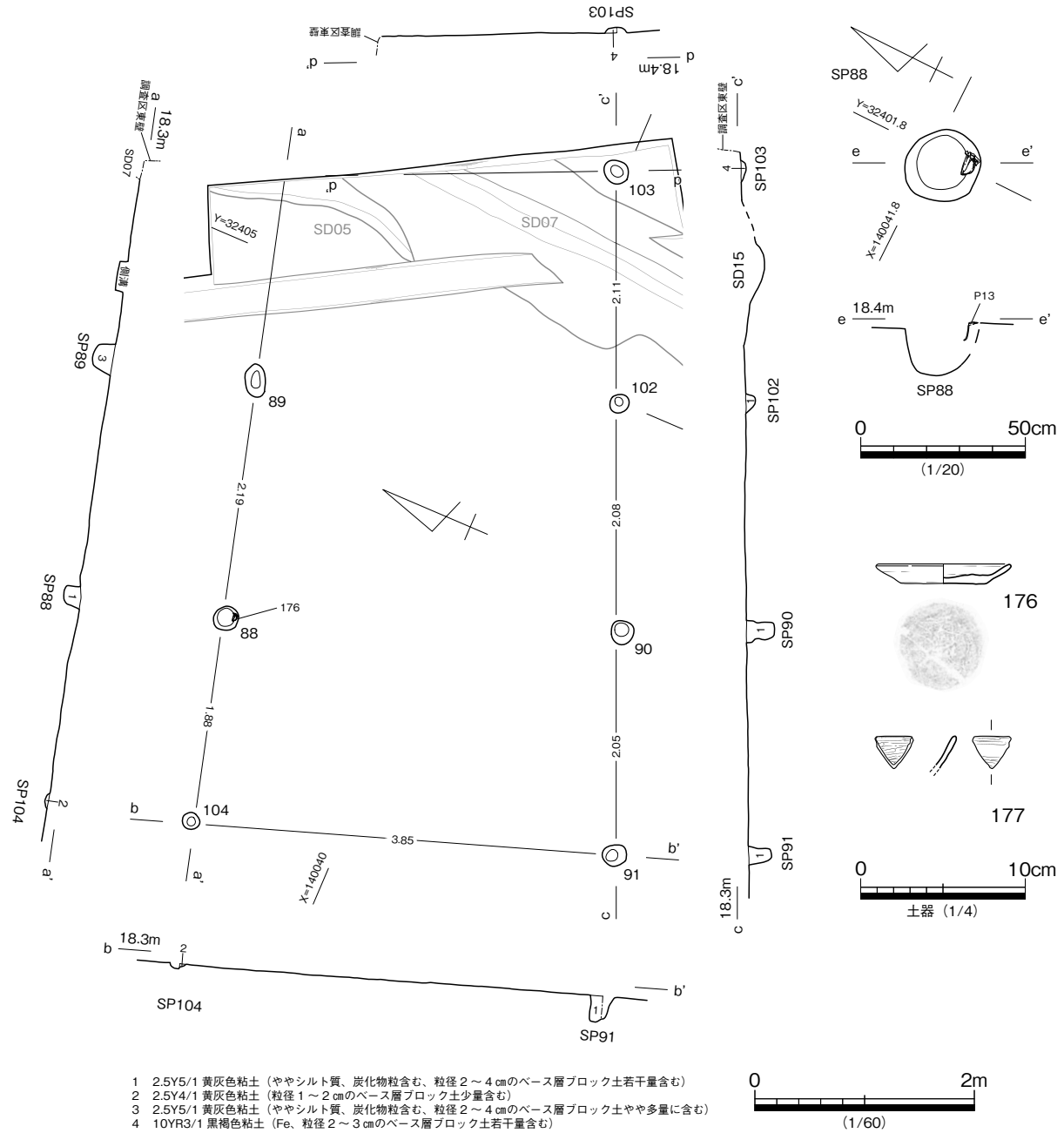
2.19 mと一定しないが、各列の柱通りは概ね揃う。柱穴掘り方は、径もしくは長軸 0.14 ～ 0.28 mの略円ないしは不整円形を呈し、底面標高は 17.96 ～ 18.22 mであった。

遺物は比較的多く、SP88 ～ 91 より土師質土器皿や須恵器、瓦器の小片が計 12 点出土した。**176** は、SP88 の掘り方上端付近より出土したほぼ完形の土師質土器皿で、地鎮等の祭祀に用いられたものと思われる。**177** は瓦器碗口縁部小片である。出土遺物より、12 世紀中葉から後半の建物と考える。

土器埋納遺構

SP31・SP52（第 41 図）

Ⅰ区中央西端、SB01 東側庇列中央穴南側で２基南北に並列して検出された。いずれも土師質土器皿の口縁部を下に伏せ置きした土師皿埋納遺構で、SB01 の地鎮遺構と考えられる。径 0.1 m前後の平面歪な円形の掘り方を有し、残存深 0.01 m程度と浅く、底面より若干上位で土師皿が出土した。皿はいずれも遺構検出時に破砕し小片化してしまったが、本来は完形品が埋納されたと考えられる。SP31 には２点、SP52 には１点の土師皿がそれぞれ埋納され、それ以外に遺物は出土していないが、遺構上面は大きく削平されているため、本来の遺物の埋納状況は不詳である。土師皿下面には灰色シルトが堆積し、いずれも若干量の炭化物の遺存が確認されたことから、火を使用した儀礼に用いられた可能性も考



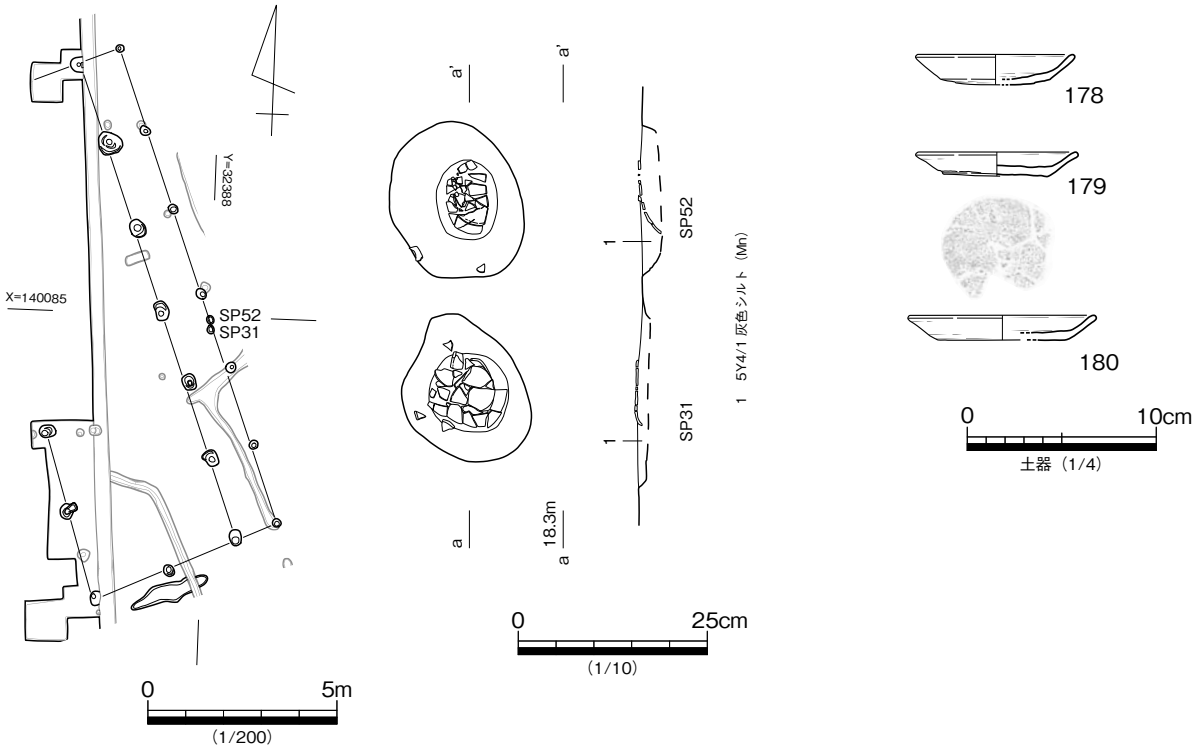
第 40 図　SB06 平・断面・出土遺物実測図

えられる。

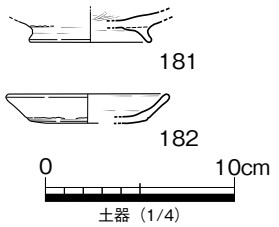
179・**180** は SP31 より、**178** は北側 SP52 よりそれぞれ出土した土師質土器皿である。SP31 出土資料は取り上げ後に２点であることが判明したが、写真等より判断して、**180** を上にして重ねて埋納されていたと考えられる。出土遺物は 11 世紀後葉～ 12 世紀中葉の年代と考えられ、建物の時期を考慮すれば、12 世紀中葉頃の遺構と考える。

柱穴出土の遺物（第 42 図）

以下では、第１面で検出した柱穴のうち、建物遺構を構成しない柱穴より出土した遺物を報告する。**181** は I 区 SP56 より出土した黒色土器碗。やや外方へ強く踏ん張る高台を付す。12 世紀前葉を中心とした時期。**182** は SP70 より出土した土師質土器皿。12 世紀前葉を中心とする。



第 41 図　SP31・SP52 平・断面・出土遺物実測図



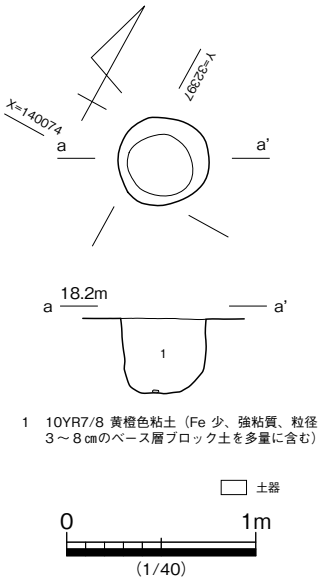
第 42 図　柱穴出土遺物実測図

土坑

SK03（第 43 図）

Ⅰ区中央南半部第１面で検出した土坑である。SB02・SB03 と重複するが、柱穴と切り合いはなく、先後関係は不明である。平面形は、径 0.45 m前後の略円形を呈する。残存深は 0.39 mあり、壁面はほぼ直に近く掘り込まれ、底面はほぼ平坦で、断面形は概ね箱形を呈する。埋土は、ほぼベース層ブロック土である黄橙色粘土により充填されていた。人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片３点が出土したのみである。SB02・SB03 との位置関係より、これら建物の床下貯蔵穴等の性格が考えられるが、断定することはできなかった。

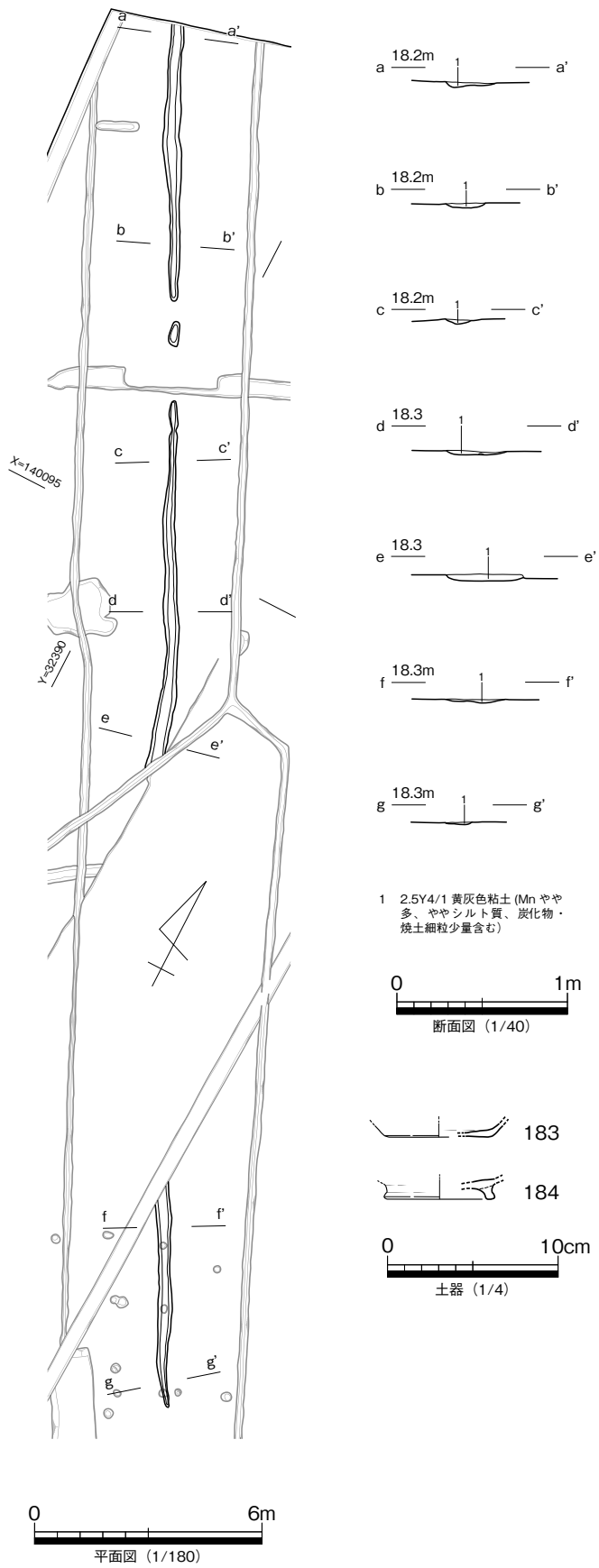


第 43 図　SK03 平・断面図

溝

SD12（第 44 図）

Ⅰ区東半第１面で検出した南北直線溝である。中位で遺構面を下げ過ぎたため約 11.1 mに渡って途切れるが、流路方向、規模、埋土より一連の溝とみてよく、延長 36.53 mを検出した。この部分で後述する SD15 が合流するものとみられる。北端は調査区外へ延長し、南端は SB02・SB03 付近で途切れる。若干屈曲するものの、流路方向N 26.84° Wを測り、周辺の地割の方向と概ね合致する。既述したように、SB02 東面庇の柱穴列と重複し、切り合い関係より SB02 より後出する。検出面幅 0.14 ～ 0.42 m、残存深



第 44 図　SD12 平・断面・出土遺物実測図

0.02 ～ 0.03 m、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は北端部で 18.08 m、中央部で 18.15 m、南端部で 18.18 mをそれぞれ測り、高低差より北へ流下する。埋土は黄褐色シルトの単層で、流水痕跡は認められなかった。溝の規模や検出位置より、SB01 の雨落溝の可能性が考えられる。

遺物は、土師器甕、土師質土器皿、黒色土器碗のほか、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器の小片が 64 点出土した。**183** は土師質土器皿、**184** は黒色土器碗である。外方へ強く踏ん張る高台を付す。出土遺物より、12 世紀前葉を中心とした時期に位置付けられる。

SD13（第 45 図）

Ⅰ区北西端第 1 面で検出した東西溝である。東西両端は調査区内で途切れ、延長 1.17 mを検出したに留まる。流路方向N 65.88° Eを測り、周辺の地割の方向と概ね合致する。検出面幅 0.23 m、残存深 0.18 m、底面の標高は 17.94 m前後で、断面形はU字状を呈する。埋土は 2 層に細分され、下位層にはベース層ブロック土が多量に含まれ人為的に埋め戻された可能性が高い。断面形状や埋土からは、土坑として開削された可能性が高いと判断する。

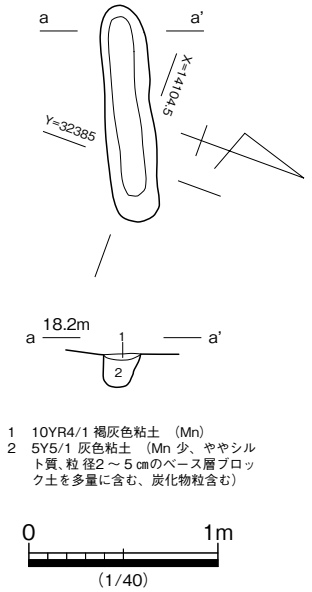
遺物は、土師質土器杯のほか、器種不詳の土師質土器や須恵器、瓦質土器の小片が 13 点出土した。出土遺物より当該時期の遺構と考える。

SD14（第 46 図）

Ⅰ区中央西半第 1 面で検出した東西直線溝である。西端部は SB01 付近で途切れ、東端は遺構面の下げ過ぎにより途切れるため、延長 7.05 mを検出したに過ぎない。Ⅰ区東端調査区で延長部分が検出されず、埋土が近

似すること等よりSD12と合流する可能性が高い。西端部付近で南よりSD16が、北よりSD15がそれぞれ合流する。また、西端部付近でSB01東面庇の柱穴と重複し、切り合い関係よりSB01より後出する。流路方向N 56.01° Eを測り、周辺の地割の方向と概ね合致する。検出面幅0.31～0.48 m、残存深0.03～0.04 m、断面形は浅い皿状を呈する。底面の標高は東端部で18.16 m、西端部で18.17 mとほぼ平坦で、流下方向は特定できない。埋土は黄灰色粘土の単層で、流水堆積は認められない。SD12同様に、建物の雨落溝の性格が考えられるが、SB01とは重複するため、SB01前身建物の存在を想定したい。

遺物は検出延長に比較すると他の溝よりやや多く、土師質土器皿･杯･碗、黒色土器碗のほか、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器等の小片が64点、サヌカイト剥片が1点出土した。**185**・**186**は土師質土器皿である。前者は11世紀中葉前後に、後者は11世紀後葉から12世紀前葉にそれぞれ位置付けられる。



第45図　SD13平・断面図

SD15（第46図）

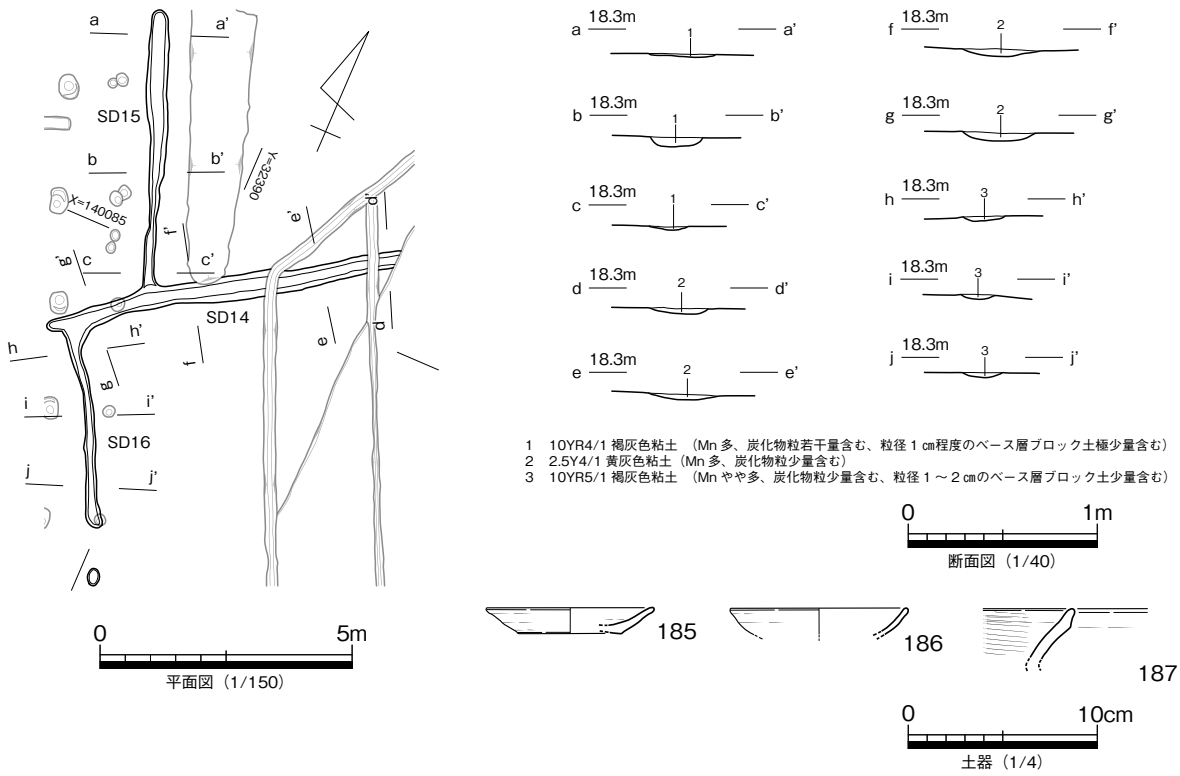
Ⅰ区西半第1面で検出した南北直線溝である。既述したように南端はSD14に合流し、北端は調査区内で途切れ､延長5.44 mを検出した。SB01東面庇と併走し､位置関係よりSB01の雨落溝と考えられる。既述したように、SD14はSB01の前身建物に伴うことを指摘し、この場合本溝がSB01の雨落溝とすると矛盾が生じる。しかし、調査時に整合的な所見は得られなかったものの、SD14がSB01の排水溝として依然機能していた可能性を想定したい。流路方向N 20.91° W､検出面幅0.15～0.41 m､残存深0.01～0.05 m、断面形は浅い皿状を呈する。底面標高は南端部で18.16 m、北端部で18.15 mを測るが、底面は凹凸がやや顕著で、流下方向は特定できなかった。埋土は褐灰色粘土の単層で、流水堆積は明瞭ではない。

遺物は、土師質土器皿片のほか、器種不詳の土師質土器や須恵器小片が26点出土した。出土遺物や既述したSB01との関係より、12世紀前半代の遺構と考える。

SD16（第46図）

Ⅰ区中央西端部第1面で検出した南北溝である。既述したように北端はSD14に合流し、南端は調査区内で途切れ、延長約4.0 mを検出した。南端部でSB01東面庇の柱穴と重複し、切り合い関係よりSB01より後出する。本溝も､SB01前身建物の雨落溝と考えられる。検出面幅0.18～0.23 m､残存深0.02～0.04 m、断面形は浅い皿状を呈する。北端部SD14との合流部付近で若干西へ屈曲するが、概ね流路方向N 26.57° Wに配され、周辺の地割と合致する。底面の標高は南端部で18.19 m、北端合流部付近で18.18 mを測る。おそらくは北へ流下してSD14へ通水するものと考えられるが、検出長が短く断定はできない。埋土は褐灰色粘土の単層で、流水痕跡は認められなかった。

遺物は、土師器甕、黒色土器碗のほか、器種不詳の土師質土器や須恵器の小片が17点出土した。**187**は土師器甕もしくは羽釜口縁部小片である。11世紀中葉前後に位置付けられる。出土遺物や既述した建物群との関係より、12世紀前葉の遺構と考えられる。

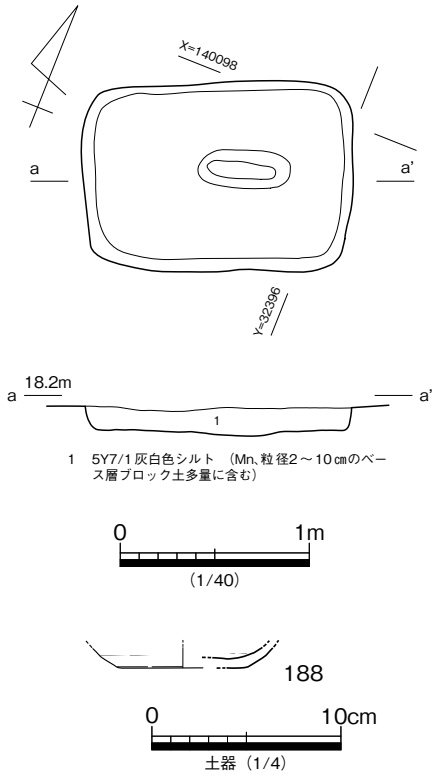


第 46 図　SD14・SD15・SD16 平・断面・出土遺物実測図

SD17（第 34 図）

Ⅰ区南西部第 1 面で検出した。SB01 南辺とほぼ併走し、位置関係から SB01 の雨落溝と考えられる。東西両端は調査区内で途切れ、延長 2.16 m を検出した。流路方向 N 65.53° E、検出面幅 0.20 ～ 0.53 m、残存深 0.04 m前後、断面形は浅い皿状を呈する。底面標高は 18.17 m前後を測り、やや東に傾斜するが、流下方向を特定するまでには至らない。埋土は灰色粘土の単層で、ベース層ブロック土をやや多量に含むことから、最終的には人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は、黒色土器碗のほか、器種不詳の土師質土器や須恵器の小片が 12 点出土したのみである。出土遺物や既述した SB01 との関係より、12 世紀前半代の遺構と考えられる。



第 47 図　SK02 平・断面・出土遺物実測図

近世以降

当該期の遺構は、Ⅰ区第 1 遺構面で土坑 1 基を確認したにとどまる。おそらく周辺は耕地化されていたことが想定され、土坑は耕地に関係する遺構と考えられる。

土坑

SK02（第 47 図）

Ⅰ区北東部で検出した土坑である。平面形は、東西 1.40 m、南北 0.99 mの整った隅丸方形を呈する。残存深は 0.14 mで、底面は概ね平坦に整えられ、断面形は逆台形状を呈する。埋土は、締まりのないベース層ブロック土である灰白色シルトにより充填されていた。人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、少量の土師器竈や土師質土器杯、器種不詳の土師質土器や須恵器小片等の土器類と、サヌカイト剥片１点が出土した。188 は土師質土器杯。出土遺物の下限は古代に求められるが、埋土の特徴は当該時期の特徴を示しており、出土遺物は包含層等からの混入の可能性を考え、当該時期に位置付けられるものと考える。

参考文献

森下英治 1997「丸亀平野条里型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要　Ⅴ』，財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第４章　自然科学的分析の成果

第１節　丸亀市北岸南遺跡における自然科学分析報告

株式会社古環境研究所

１．はじめに

北岸南遺跡は、丸亀市飯山町に所在し、丸亀平野中央部を北流する大束川左岸の沖積地上に立地する。平成 23 年度に実施された国道 438 号バイパス建設工事に伴う発掘調査において、12 ～ 13 世紀代の掘立柱建物跡と小規模な水路跡、弥生時代の用水路跡とみられる幅約 1.2 m、深さ約 70cmの大溝等の遺構が検出されている。

ここでは、北岸南遺跡における稲作の可能性および周辺環境を検討する目的で、プラント・オパール分析と花粉分析を行った。

２．試料

分析試料は、北岸南遺跡Ⅰ区より採取された試料１（包含層Ⅰ）、試料２（包含層Ⅱ）、試料３（SD04 中層）、試料４（SD04 下層）の４点である。プラント・オパール分析は試料１と試料２の２点、花粉分析はすべての試料を対象として分析を行った。なお、試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当社に送付されたものである。

３．プラント・オパール分析

（１）原理

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO ２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント･オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント･オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

（２）方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）

２）試料約 1 g に直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

５）沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント･オパール個数（試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント･オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10 － 5ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１cm あたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）数は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山，2000）。

（３）結果

分析試料から検出されたプラント･オパールは、イネ、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第２表、第 48 図に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント･オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

包含層Ⅰ（試料１）では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出されている。ススキ属型とネザサ節型がやや高い密度である以外は、いずれも低い密度である。

包含層Ⅱ（試料２）では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出されている。ススキ属型、メダケ節型およびネザサ節型が高い密度であり、ヨシ属がやや高い密度であるが、その他の分類群は低い密度である。

（４）考察

１）北岸南遺跡Ⅰ区における稲作

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、通常、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたり 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、近年の分析調査によると、密度が 3,000 個 /g 程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された事例が多く報告されていることから、ここでは 3,000 個 /g を目安として検討する。

本遺跡では、包含層Ⅰと包含層Ⅱの両層からイネのプラント･オパールが検出されている。プラント･オパール密度はいずれも 1,200 個 /g とやや低い値であり、稲作跡の判断基準値には達していない。このことから、調査地においては包含層Ⅰと包含層Ⅱの層準で稲作が行われていた可能性を積極的に支持することはできない。これらの層で稲作が行われていたならば、耕作地は調査地の周辺であったと考えられる。

２）プラント・オパール分析から推定される周辺植生と環境

ヨシ属やマコモ属などは沼や河川、湖など湿地に生育する。一方、タケ亜科やススキ属などは山野など乾いたところを好んで生育する。こうしたことから、これらの植物の産出状況を検討することで、堆積当時の土壌環境を推定することができる。本遺跡では、包含層Ⅱでススキ属型、メダケ節型、ネザサ節型が高い密度で検出されている。このことから、包含層Ⅱの時期は、調査地は乾いた環境であり、ススキ属（おもにススキ）やタケ・ササ類が生育していたと推定される。なお、ヨシ属もやや高い密度であることから、周辺にはヨシ属の生育する湿地もあったと推定される。包含層Ⅰではススキ属型とネザサ節型がやや高い密度であることから、堆積当時の調査地は比較的乾いた環境であったと推定される。

４．花粉分析

（１）原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。しかし花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

（２）方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１㎤を採量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12 水）溶液を加え 15 分間湯煎

３）水洗処理の後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ～ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この分析処理を施すとクスノキ科の花粉は分解し検出されない。

（３）結果

１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 19、樹木花粉と草本花粉を含むもの５、草本花粉 17、シダ植物胞子２形態の計 43 である。これらの学名と和名および粒数を表２に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試

料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第49図に示す。なお、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、カエデ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ユリ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ワレモコウ属、アカバナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

２）Ⅰ区の花粉群集の特徴

下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

SD04下層（試料４）では、樹木花粉と草本花粉の占める割合がほぼ同率である。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが比較的高率に検出される。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科が優占し、ついでヨモギ属が多い。

SD04中層（試料３）では、草本花粉の占める割合がやや高くなる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属が増加し、それに対応してコナラ属アカガシ亜属が減少する。また、シイ属、スギ、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などは同様に検出される。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科が少し減少し、ヨモギ属が増加、ワレモノコウ属、チドメグサ亜科、セリ亜科が微増する。

包含層Ⅱ（試料２）、包含層Ⅰ（試料１）では、花粉密度が低くほとんど検出されない。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、スギ、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、カエデ属が検出され、樹木・草本花粉では、クワ科－イラクサ科がわずかに検出された。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属が検出される。

（４）考察

花粉群集の特徴から、植生と環境の復元を行う。

SD04は、下層から中層において花粉組成、構成とも類似した出現傾向を示す。樹木花粉、草本花粉がほぼ同率に出現することから、堆積地は草本が優勢であったが、近隣に森林も分布していたと推定される。SD04の周囲には、イネ科、カヤツリグサ科などの多様な環境に生育する水生植物と比較的排水のよいところを好むヨモギ属などの人里植物ないし耕地雑草が繁茂していたとみなされ、人為環境が分布していたと考えられる。またガマ属－ミクリ属、ミズアオイ属などの水生植物も出現し、SD04には

これらの水生植物が繁茂する滞水した環境も分布していたとみなされる。中層の時期になると、堆積地にはワレモコウ属、セリ亜科、キク亜科などの草本も多くなる。

近隣の森林植生は、コナラ属アカガシ亜属（カシ類）、シイ属、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）を主要素とする森林が分布し、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹林も隣接していた。

包含層Ⅰ、Ⅱの時期になると、花粉密度が極めて低くなり、花粉などの有機質遺体が分解される比較的乾燥した堆積環境であったと考えられる。

検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群（和名・学名）＼層位		Ⅰ区 包含層Ⅰ 1	Ⅰ区 包含層Ⅱ 2
イネ科	Gramineae (Grasses)		
イ　ネ	Oryza sativa	12	12
ヨシ属	Phragmites	6	18
ススキ属型	Miscanthus type	24	84
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	18	96
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	42	108
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	5	6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	6	6
その他	Others	6	6
未分類等	Unknown	113	132
プラント・オパール総数	Total	232	468
おもな分類群の推定生産量（単位：kg /㎡・cm）			
イ　ネ	Oryza sativa	0.35	0.35
ヨシ属	Phragmites	0.38	1.14
ススキ属型	Miscanthus type	0.30	1.04
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.21	1.11
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.20	0.52
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.	0.04	0.04
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.02

第２表　北岸南遺跡におけるプラント・オパール分析結果

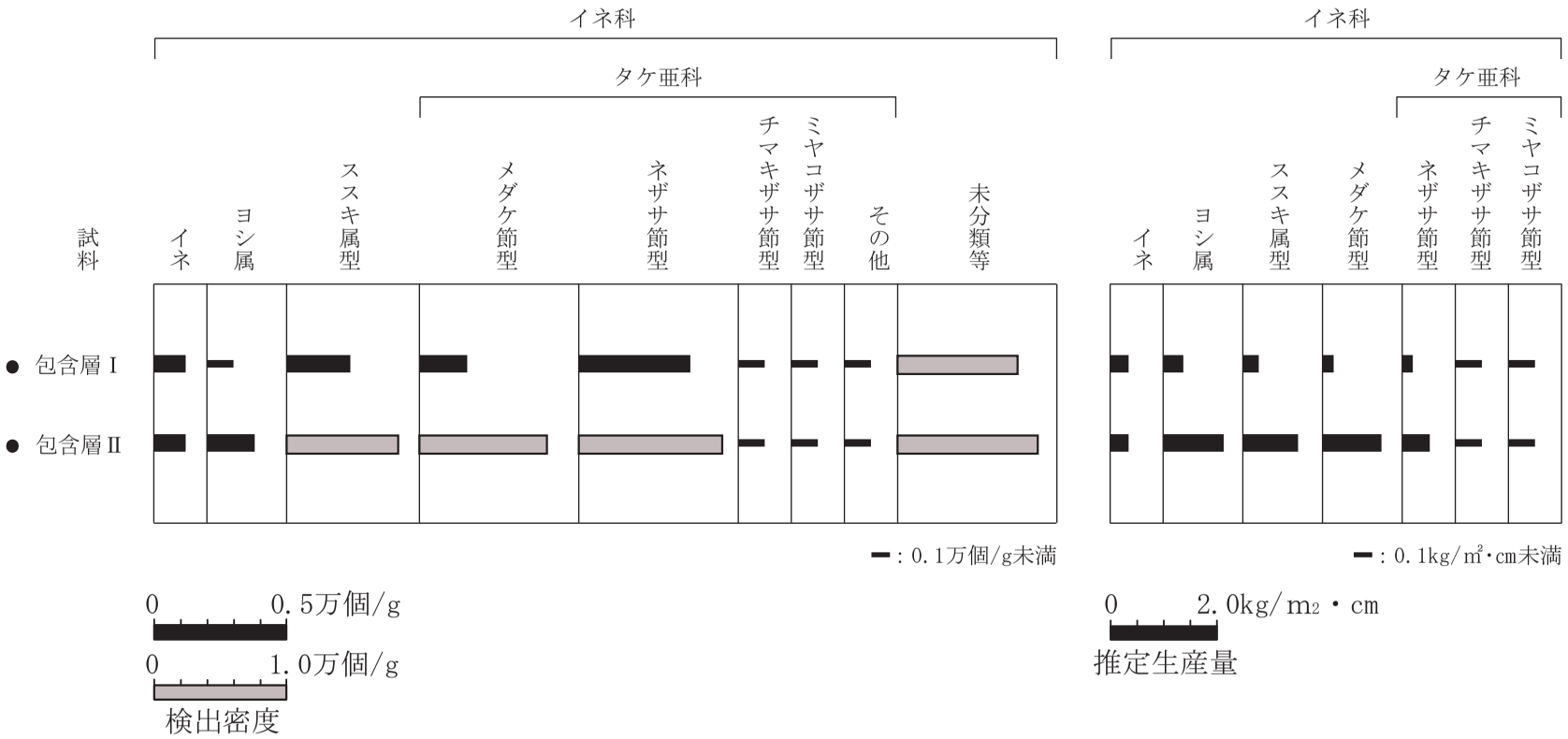
５．まとめ

北岸南遺跡においてプラント・オパール分析と花粉分析を行い、稲作の可能性と堆積環境ならびに周辺植生について検討を行った。その結果、SD04 はガマ属－ミクリ属、ミズアオイ属などの水生植物が繁茂する滞水した環境であった。周辺には、イネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などの人里植物ないし耕地雑草の繁茂する人為環境が分布しており、近隣にはコナラ属アカガシ亜属（カシ類）、シイ属、コナラ属コナラ亜属（ナラ類）を主要素とする森林が分布していた。また、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹林も隣接して分布していたと推定された。

包含層Ⅰ、Ⅱの時期は、花粉などの有機質遺体が分解される比較的乾燥した堆積環境になり、ススキ属やタケ・ササ類などが生育していた。周辺にはヨシなどの生育する湿地もみられた。なお、調査地において稲作が行われていたことを肯定することはできなかったが、周辺に水田が分布していた可能性が示唆された。

文献

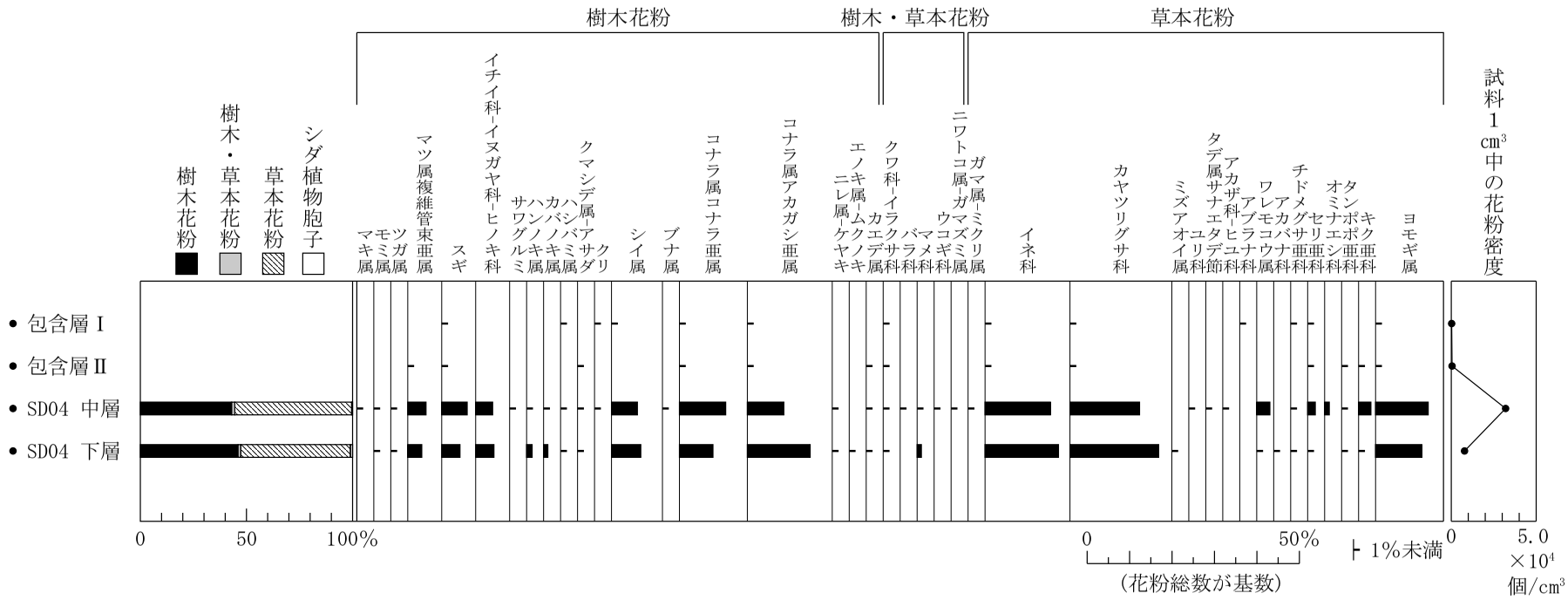
杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70-83.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント･オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－ . 考古学と自然科学 ,17,p.73-85.
藤原宏志（1998）稲作の起源を探る．岩波新書 .
金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集，60p.
中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-102.
中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として . 第四紀研究 ,13,p.187-193.
中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第 10 号，p.21-30.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集，91p.



第48図　北岸南遺跡Ⅰ区におけるプラント・オパール分析結果

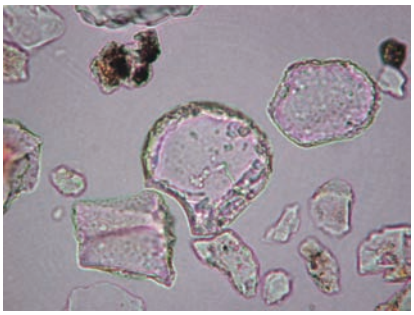
分類群		Ⅰb区			
		包含層Ⅰ	包含層Ⅱ	SD04 中層	SD04 下層
学名	和名	1	2	3	4
Arboreal pollen	樹木花粉				
Podocarpus	マキ属			1	
Abies	モミ属			3	2
Tsuga	ツガ属			4	1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属		2	28	13
Cryptomeria japonica	スギ	3	2	39	17
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科			26	17
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ			2	
Alnus	ハンノキ属			1	5
Betula	カバノキ属			2	4
Corylus	ハシバミ属	1		1	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属−アサダ		1	2	3
Castanea crenata	クリ	1		2	
Castanopsis	シイ属	4		40	27
Fagus	ブナ属			3	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	4	14	71	31
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1	5	56	58
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属−ケヤキ			1	2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属−ムクノキ				1
Acer	カエデ属		1	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科−イラクサ科	1	1	2	1
Rosaceae	バラ科			1	
Leguminosae	マメ科			3	4
Araliaceae	ウコギ科			1	
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属−ガマズミ属			2	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Typha-Sparganium	ガマ属−ミクリ属			4	
Gramineae	イネ科	7	7	101	68
Oryza type	イネ属型			2	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	4	107	82
Monochoria	ミズアオイ属				1
Liliaceae	ユリ科			3	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科−ヒユ科			1	
Cruciferae	アブラナ科	7			
Sanguisorba	ワレモコウ属			20	2
Onagraceae	アカバナ科				1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1		3	1
Apioideae	セリ亜科	1	1	12	1
Valerianaceae	オミナエシ科			7	
Lactucoideae	タンポポ亜科		4	1	1
Asteroideae	キク亜科		2	19	2
Artemisia	ヨモギ属	3	26	81	43
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	2	1		1
Trilate type spore	三条溝胞子		1	3	3
Arboreal pollen	樹木花粉	14	25	283	183
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	1	9	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	20	44	362	205
Total pollen	花粉総数	35	70	654	393
Pollen frequencies of 1cm^3	試料1cm^{3}中の花粉密度	2.2 $\times 10^{2}$	4.6 $\times 10^{2}$	3.2 $\times 10^{4}$	7.8 $\times 10^{3}$
Unknown pollen	未同定花粉	3	7	15	14
Fern spore	シダ植物胞子	2	2	3	4
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)	(−)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+++)	(+)

第３表　北岸南遺跡における花粉分析結果

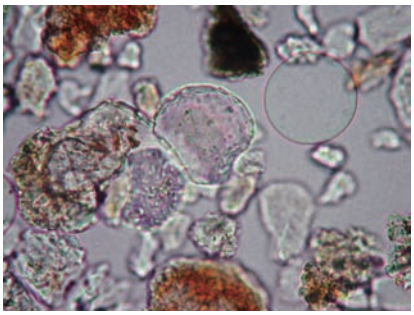


第49図　北岸南遺跡Ⅰ区における花粉ダイアグラム

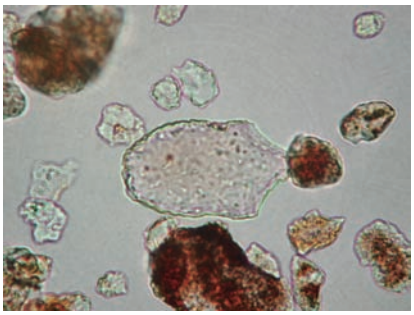
図版 1　北岸南遺跡のプラント・オパール顕微鏡写真



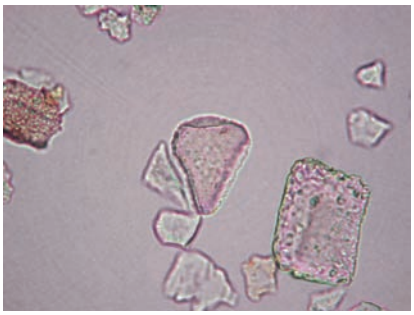
イネ



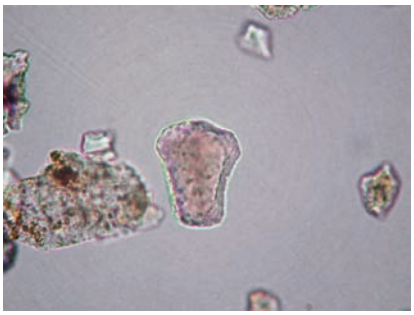
イネ



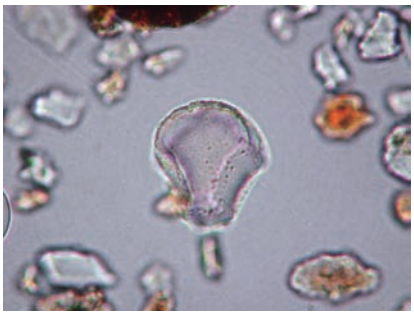
ヨシ属



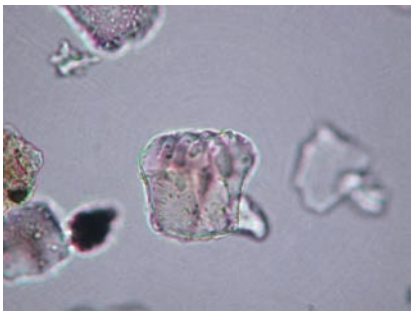
ススキ属型



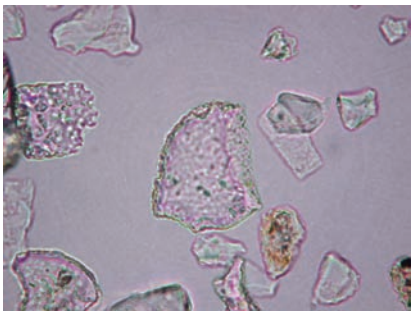
ススキ属型



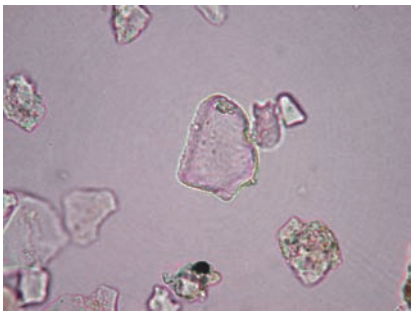
メダケ節型



ネザサ節型



チマキザサ節型

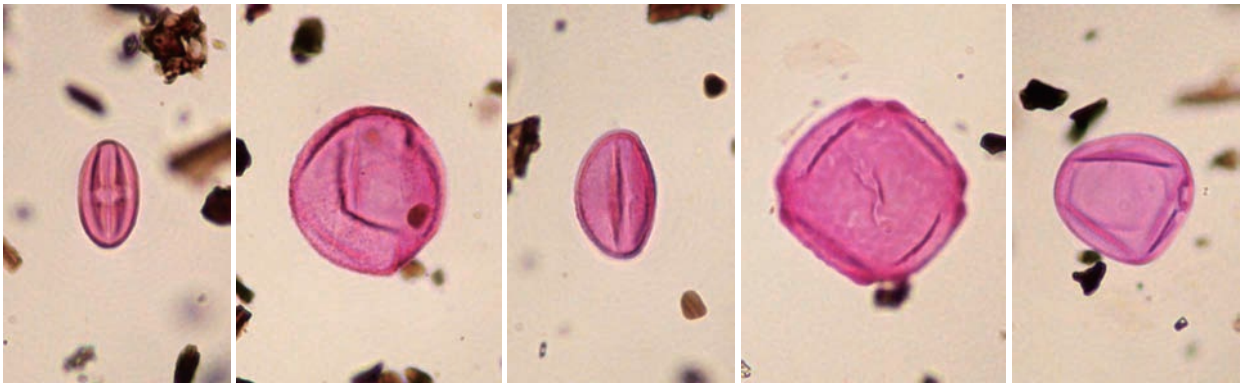


ミヤコザサ節型

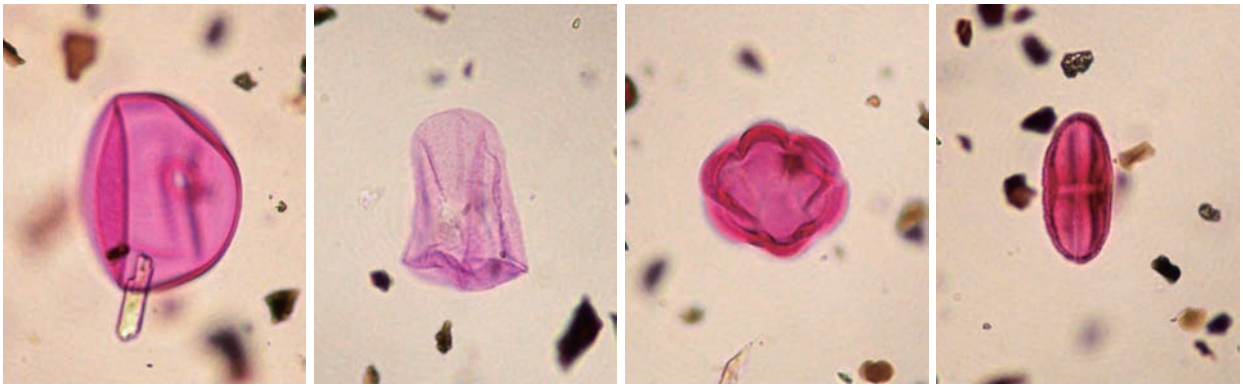
50 μm

図版２　北岸南遺跡の花粉・胞子顕微鏡写真

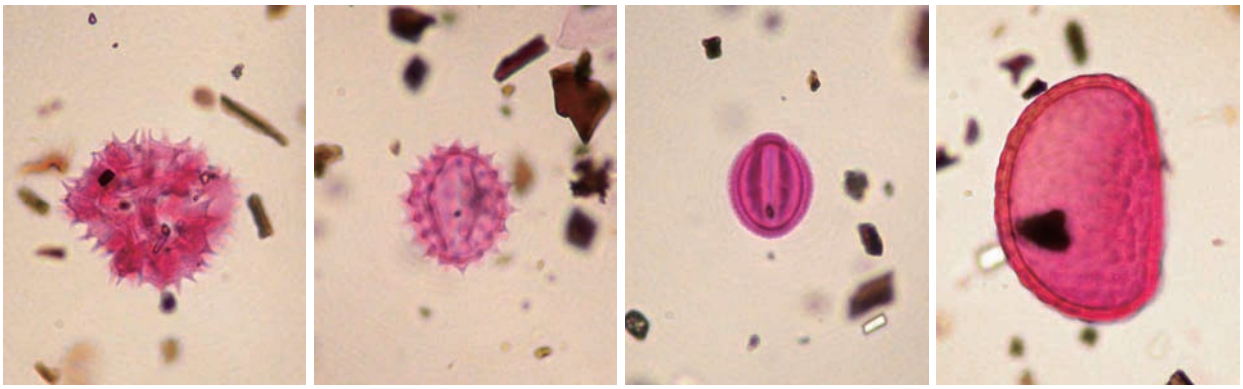
1　マツ属複維管束亜属　2　スギ　3　イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科　4　ハンノキ属



5　シイ属　6　コナラ属コナラ亜属　7　コナラ属アカガシ亜属　8　ニレ属－ケヤキ　9　イネ科



10　イネ属型　11　カヤツリグサ科　12　ワレモノコウ属　13　セリ亜科



14　タンポポ亜科　15　キク亜科　16　ヨモギ属　17　シダ植物単条溝胞子

SD04　下層より検出　10μm

第２節　北岸南遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

北岸南遺跡は、香川県丸亀市飯山町川原 189-4（北緯 34° 26′ 27″、東経 133° 85′ 20″）外に所在する。測定対象試料は、SD04 下層出土炭化物（No.1：IAAA-112222）１点である（第４表）。

２　測定の意義

考古学的に年代を特定することが困難な遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸 - アルカリ - 酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第４表に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４　測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、14C 濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算出方法

（１）δ 13C は、試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第４表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）14C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。14C 年代はδ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第４表に、補正していない値を参考値として第５表に示した。14C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、14C 年代の誤差（± 1 σ）は、試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（３）pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。

pMC が小さい（14C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（14C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ 13C によって補正する必要があるため、補正した値を第４表に、補正していない値を参考値として第５表に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の 14C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の 14C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1 σ = 68.2%）あるいは 2 標準偏差（2 σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ 13C 補正を行い、下一桁を丸めない 14C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第５表に示した。暦年較正年代は、14C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

SD04 下層出土炭化物 No.1 の 14C 年代は 1700 ± 20yrBP、暦年較正年代（1 σ）は 264 ～ 394cal AD の間に 2 つの範囲で示され、古墳時代前期から中期頃に相当する年代値である。

なお、No.1 が含まれる 1 ～ 3 世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCal09 に対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜 2009、坂本 2010 など）。その日本版較正曲線を用いて No.1 の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ 13C (‰) (AMS)	δ 13C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC (%)
IAAA-112222	No.1	SD04　下層	炭化物	AaA	-23.54 ± 0.57	1,700 ± 20	80.96 ± 0.24

[#4811]

第４表　放射性炭素年代測定結果１

測定番号	δ 13C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　（%）			
IAAA-112222	1,670 ± 20	81.20 ± 0.22	1,696 ± 24	264calAD - 275calAD (8.4%)	258calAD - 299calAD (20.5%)
				333calAD - 394calAD (59.8%)	319calAD - 411calAD (74.9%)

[参考値]

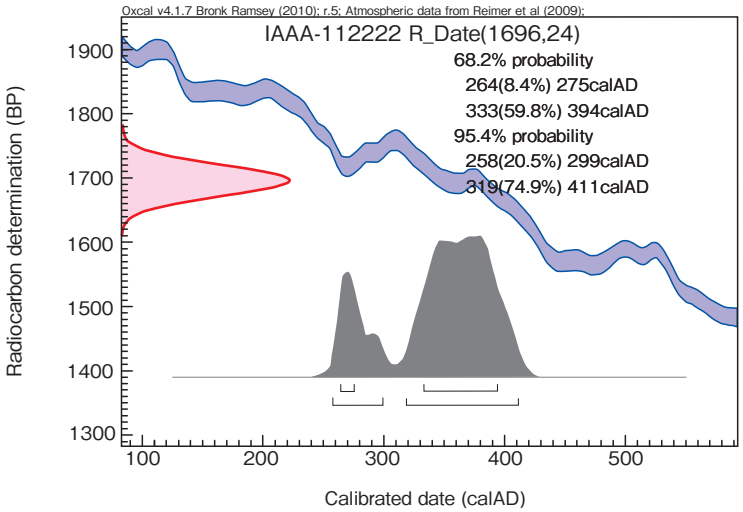
第５表　放射性炭素年代測定結果２

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150
尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代 , 弥生時代の考古学 1　弥生文化の輪郭 , 同成社 , 225-235

北岸南遺跡 (香川県教育委員会　2017 年)

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－ , 第 5 回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集 , (株) 加速器分析研究所 , 85-90



第 50 図　[参考] 暦年較正年代グラフ

第３節　埋蔵文化財整理業務（北岸南遺跡）に係る火山灰分析業務報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

１.試料

試料は、北岸南遺跡のＩ区より採取された火山灰分析用試料１点である。肉眼では黄褐色を呈する砂質粘土（包含層Ⅳ）である。

２.分析方法

試料 20.0g を、1/2mm(1 Φ)、1/4mm(2 Φ)、1/8mm(3 Φ) および 1/16mm(4 Φ) の篩で湿式篩分を行い、各篩上の残渣の重量を計測した。乾燥の後、得られた粒径 1/8mm-1/16mm(4 Φ残渣) の砂分をポリタングステン酸ナトリウム (比重約 2.96 に調整) により重液分離する。軽鉱物は、スライドガラスに乗せて蒸留水を滴下してカバーグラスを被覆して簡易プレパラートとする。重鉱物はペトロポキシ 154 を用いて封入し、プレパラートとする。軽鉱物および重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。

重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。軽鉱物比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を 250 粒数え、その中の石英、長石類、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤 (1995) の MAIOT を使用した温度変化法を用いた。

３.結果

結果を、第６表および第 51 図、鉱物写真を図版３に示す。重鉱物組成は、角閃石および不透明鉱物が中量、斜方輝石が少量含まれ、単斜輝石、緑簾石、斜ゆうれん石が微量、黒雲母、電気石、ジルコンが極めて微量伴われるという組成となっている。軽鉱物組成は、石英を主体とし、長石類を伴い、極めて微量の火山ガラスが含まれる組成となっている。

火山ガラスは、無色透明のバブル型、褐色を呈するバブル型の火山ガラスが混在する。火山ガラスの屈折率を図２に示す。レンジは n1.508-1.515、モードは n1.513 付近にある。

鉱物の各粒度の重量 (g) および重量比を表２および図３に示す。1/2mm> が、0.356g、1/2mm ～ 1/4mm が 0.847g、1/4mm ～ 1/8mm が 0.840g、1/8mm ～ 1/16mm が 0.780g である。含砂率は、14.49% である。

４.考察

上述した火山ガラスの形態、色調および屈折率の特性により、火山灰とされた試料から検出された

火山ガラスは、九州島南方の鬼界カルデラを給源とする鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah: 町田・新井 ,1978）に由来する。K-Ah の噴出年代は、町田・新井 (1978) 以来、放射性炭素年代である 6,300 年前という年代で知られていた。近年の第四紀学および考古学においては、放射性炭素年代を表記するのではなく、放射性炭素年代を「換算」した暦年代で表記されることが多い。また、湖底堆積物における年縞による K-Ah の噴出年代も推定されている (福沢 ,1995)。これらのことから、K-Ah の噴出年代については暦年代である 7,300 年前という年代が表示されるようになってきている (例えば町田・新井 (2003) など)。なお、試料とした黄褐色の砂質粘土は、火山ガラスが極めて微量であることから、K-Ah の降下堆積物ではないと判断される。おそらく K-Ah 降灰以降に K-Ah の火山ガラスを含む砕屑物を巻き込んで堆積した砂質粘土層であろう。

重鉱物組成は、斜方輝石や不透明鉱物といった K-Ah に由来するものが含まれているが、角閃石は K-Ah に由来するものではなく、遺跡周辺の地質に由来すると考えられる。遺跡が所在する丸亀市周辺は、白亜紀後期の黒雲母花崗岩および角閃石黒雲母花崗閃緑岩が広く分布している (松浦ほか ,2002)。角閃石のほか、検出された黒雲母、緑簾石、斜ゆうれん石、電気石およびジルコンは、上述の花崗岩類を構成する鉱物に由来すると考えられる。

粒度分析の結果、中粒砂 (1/2mm ～ 1/4mm) が 0.847g、細粒砂 (1/4mm ～ 1/8mm) が 0.840g と多く、ついで、極細粒砂 (1/8mm ～ 1/16mm) が 0.780g、粗粒砂 (1/2mm>) が、0.356g 含まれる。重量比から砂分の粒度を見ると、粗粒砂より粒度の大きい粒子が少なく、砂分において中粒砂～細粒砂が主体を占める試料となっている。

引用文献

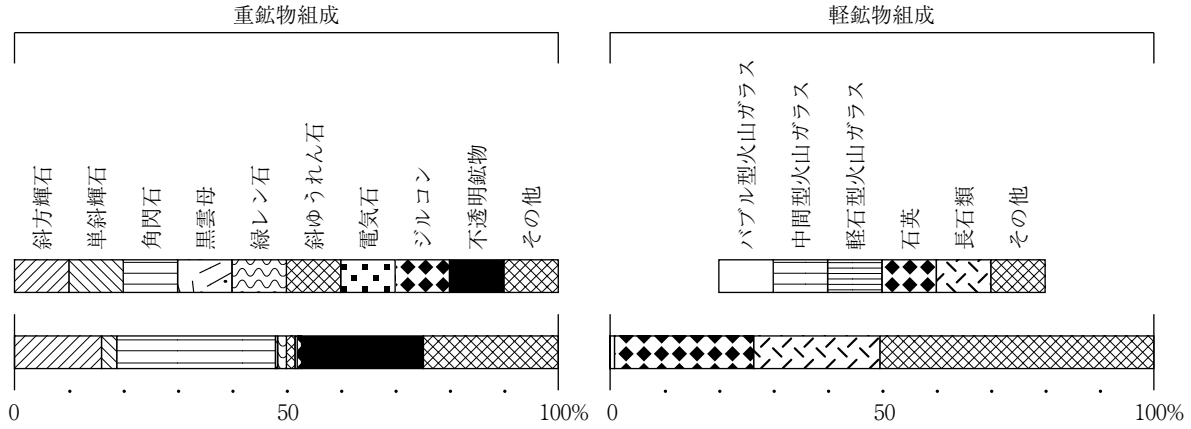
福沢仁之 ,1995, 天然の「時計」・「環境変動検出計」としての湖沼の年縞堆積物 . 第四紀研究 ,34,135-149.
古澤　明 ,1995, 火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別 . 地質学雑誌 ,101,123-133.
町田　洋・新井房夫 ,1978, 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰 . 第四紀研究 ,17,143-163.
町田　洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.
松浦浩久・栗本史雄・吉田史郎・斎藤文紀・牧本　博・利光誠一・巌谷敏光・駒澤正夫・広島俊男 ,2002,20 万分の 1 地質図幅「岡山及丸亀」. 地質調査総合センター .

調査区・出土位置	重鉱物組成											軽鉱物組成				
	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	黒雲母	緑簾石	斜ゆうれん石	電気石	ジルコン	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	石英	長石類	その他	合計
Ⅰ区　黄褐色粘土	40	7	73	1	4	4	1	2	56	62	250	2	64	58	126	250

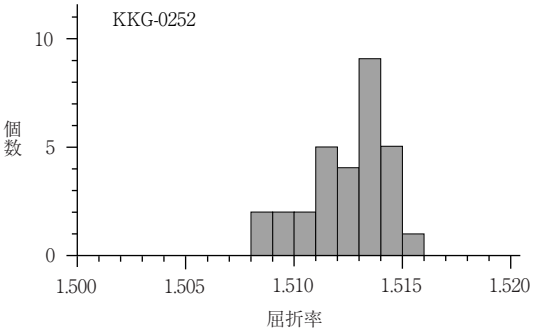
第６表　重軽鉱物組成分析結果

調査区・出土位置	砂の粒径別重量（g）					含砂率（%）	含水率（%）	湿重量（g）	乾燥重量（g）
	500 μ m>	500 ～ 250 μ m	250 ～ 125 μ m	125 ～ 63 μ m	計				
Ⅰ区　黄褐色粘土	0.356	0.847	0.840	0.780	2.823	14.49	97.42	20.00	19.48

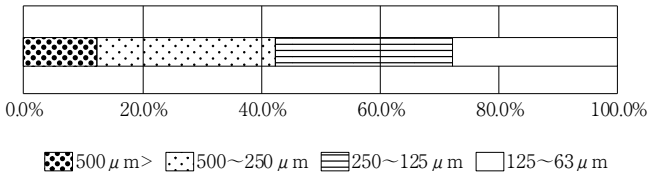
第７表　砂の粒径別重量（g）



第 51 図　重軽鉱物組成

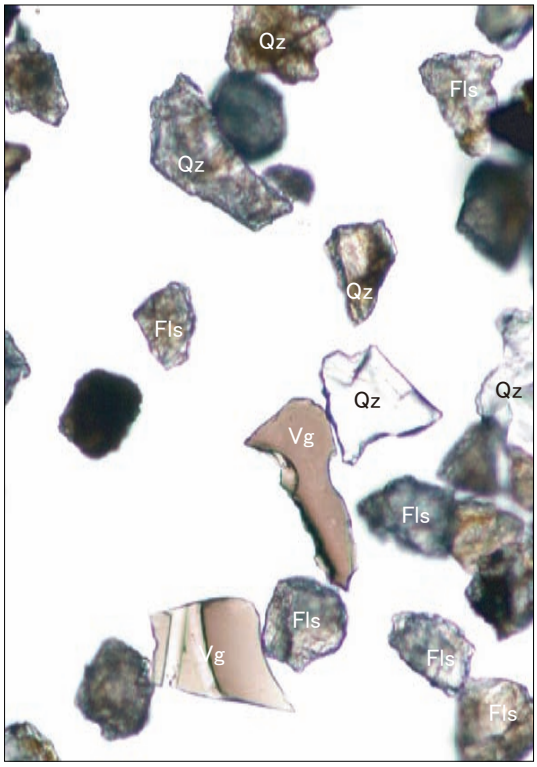


第 52 図　火山ガラス屈折率

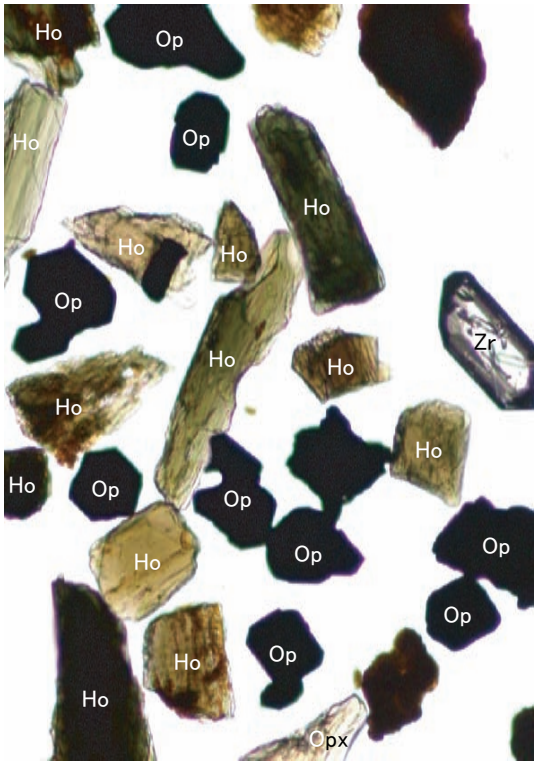


第 53 図　粒度別重量比

図版３　北岸南遺跡Ⅰ区黄褐色粘土（包含層Ⅳ）試料中の火山ガラス重鉱物顕微鏡写真



1. K-Ahの火山ガラス　　0. 2mm



2. 重鉱物　　0. 2mm

Opx:斜方輝石．Ho:角閃石．Zr:ジルコン．Op:不透明鉱物．Vg:火山ガラス．Qz:石英．Fls:長石類．

第４節　北岸南遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

丸亀市飯山町に所在する北岸南遺跡から出土したサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、北岸南遺跡より出土した縄文時代のサヌカイト製石器８点である（第８表）。試料は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を露出させ、測定箇所とした。

試料番号	調査区	出土位置	取上げ番号
1	Ⅰ区	黄褐色粘土層	S1
2	Ⅰ区		S8
3	Ⅰ区		S26
4	Ⅰ区		S27
5	Ⅱ区		S29
6	Ⅱ区		S30
7	Ⅰ区		S31
8	Ⅰ区		S32

第８表　分析対象

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム(Rh)、Ｘ線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8㎜、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法としては、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を用い、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計７元素のＸ線強度(cps；count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

1)Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
2)Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
3)Mn強度×100/Fe強度
4)log(Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図）を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。原石試料も、採取原石を割って

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
奈良	二上山	春日山	春日山みかん畑内(10)、株山(61)
香川	讃岐	国分台１	自衛隊演習場付近(5)、神谷神社前(13)、高産霊神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)、神谷(17)、蓮光寺(26)、出雲神社裏手(8)
		国分台２	
		国分台３	
		赤子谷・法印谷	赤子谷第１地点(5)、赤子谷第２地点(5)、法印谷(10)
		金山１	北峰道路脇(10)、金山南麓(31)、金山北東部(27)
		金山２	
		城山	城山南側(5)、城山北側(5)
		雄山・雌山	雄山(5)、雌山(5)
		双子山	双子山南嶺(10)

第９表　原石採取地と判別群名称

新鮮な面を露出させた上で、分析対象の試料と同様の条件で測定した。第９表に各原石の採取地とそれぞれの試料点数を示す。

3. 分析結果

第 10 表に試料の測定値および算出された指標値を、第 54 図と第 55 図に、サヌカイト原石の判別図に試料の分析結果をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定の結果、試料番号 1、8 の 2 点が国分台 1 群、試料番号 2 ～ 7 の 6 点が金山 1 群の範囲にプロットされた。第 10 表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

試料番号	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	$\frac{Mn^{*}100}{Fe}$	Sr 分率	$\log \frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	試料番号
1	174.5	107.6	4835.4	487.8	1193.1	225.6	1347.5	14.99	2.22	36.67	1.44	国分台 1	讃岐	1
2	212.0	166.2	7522.1	515.3	1335.9	268.6	1589.2	13.89	2.21	36.02	1.55	金山 1	讃岐	2
3	209.6	172.9	7771.1	494.6	1304.5	250.4	1510.2	13.89	2.22	36.65	1.57	金山 1	讃岐	3
4	222.7	173.8	7874.6	530.1	1395.4	272.3	1634.4	13.83	2.21	36.41	1.55	金山 1	讃岐	4
5	151.2	130.2	5942.8	385.3	1002.5	187.9	1161.8	14.08	2.19	36.62	1.59	金山 1	讃岐	5
6	194.6	151.4	6844.1	470.3	1258.6	246.7	1478.6	13.62	2.21	36.44	1.55	金山 1	讃岐	6
7	135.7	101.9	4674.1	295.1	771.9	153.2	910.2	13.85	2.18	36.23	1.54	金山 1	讃岐	7
8	221.7	132.4	6090.9	578.2	1426.7	264.4	1586.9	14.99	2.17	37.00	1.44	国分台 1	讃岐	8

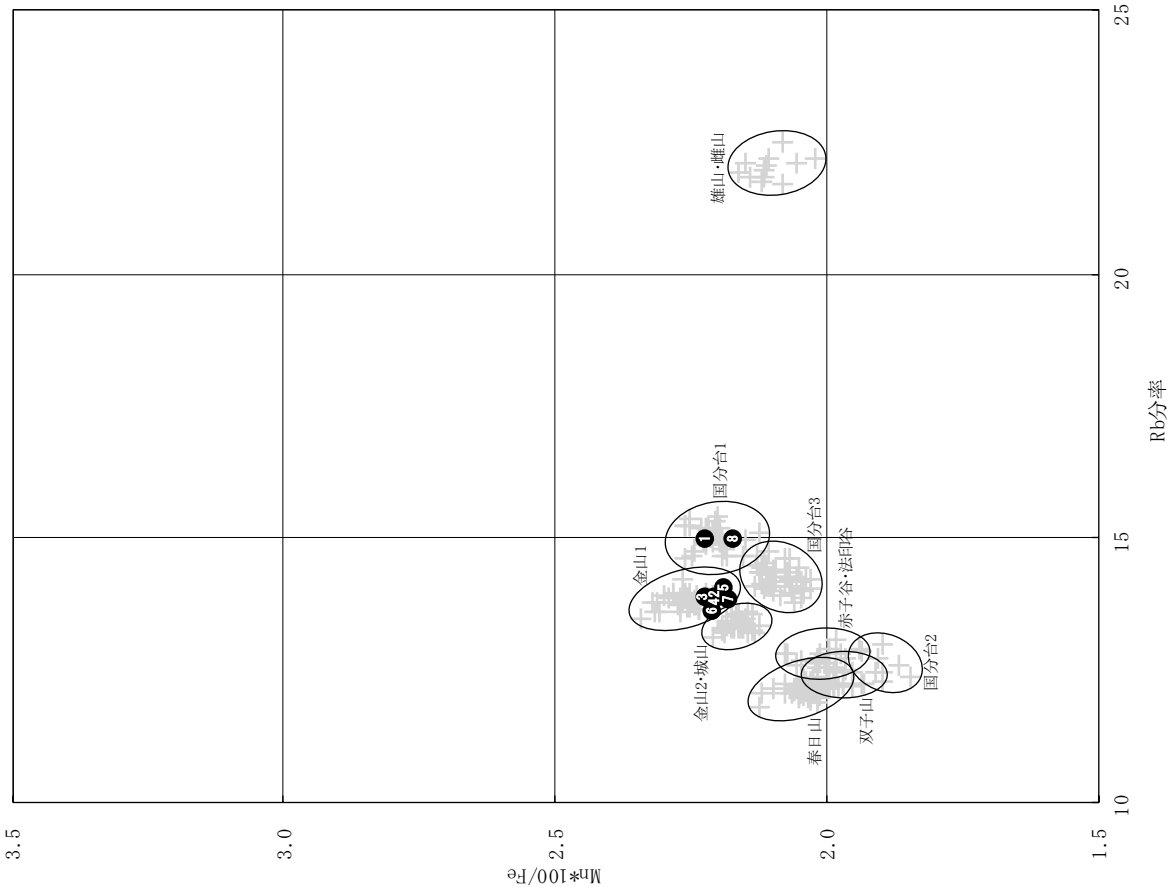
第 10 表　分析値および産地推定結果

4. おわりに

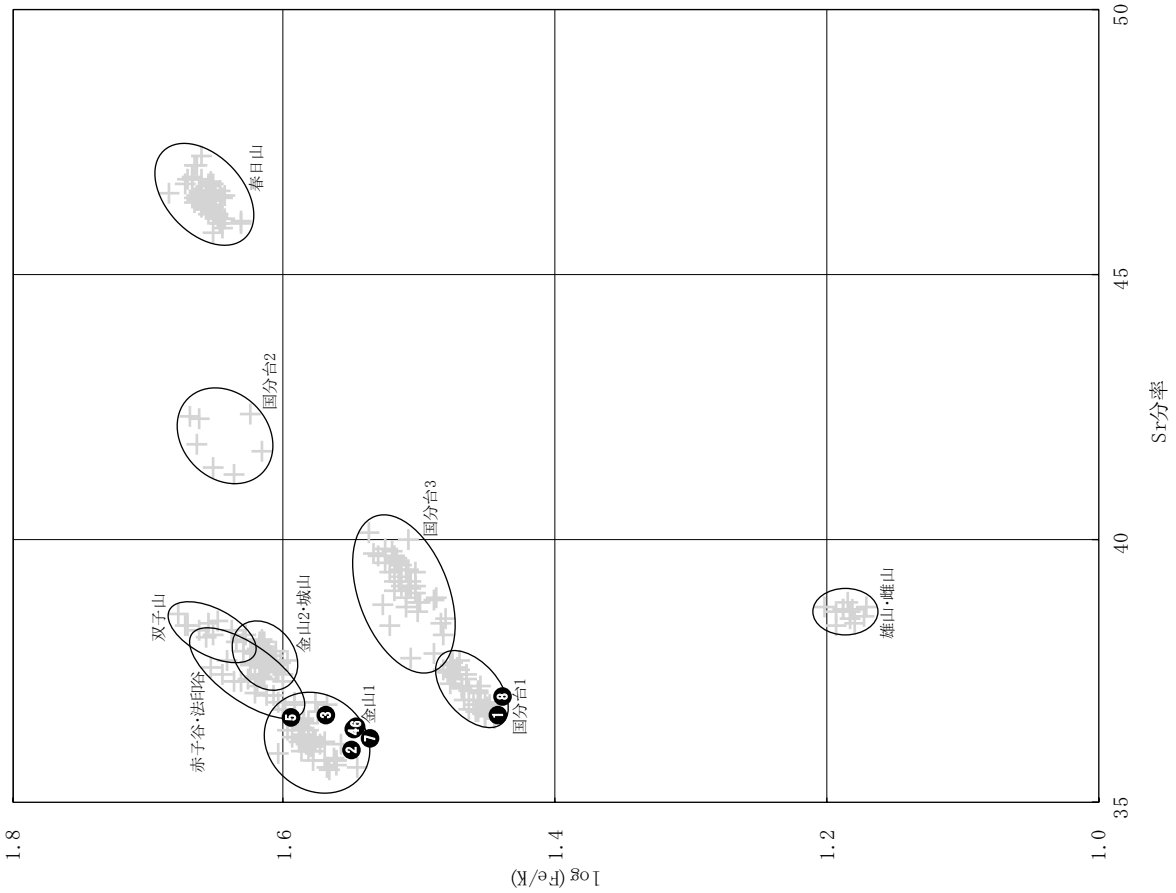
北岸南遺跡より出土した縄文時代のサヌカイト製石器 8 点について、蛍光 X 線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、6 点は金山、2 点は国分台産の可能性が高いと推定された。

引用・参考文献

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」：511-517，かながわ考古学財団.



第54図　サヌカイト産地推定判別図（１）



第55図　サヌカイト産地推定判別図（２）

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷について

本遺跡で確認された遺構・遺物については前章までに詳述した。以下では、遺構の時期的変遷について整理し、まとめとする。

縄文時代

包含層（包含層Ⅳ）より当該期とみられるサヌカイト製石器が少量出土した。遺物の出土量は乏しく、遺跡内に遺構が展開する可能性は低いと考えられる。包含層は、第２・３章で既述したように、扇状地礫層の上面に堆積した細粒堆積物の最上位層に相当し、前章の分析により鬼界アカホヤ火山灰を含有する。土器資料を欠くため詳細な時期は特定できないが、縄文時代中期～後期に位置付けられると考えられ、今後の調査により、周辺で当該期の遺構が確認されることが期待される。

また、前章での産地推定分析により、金山産サヌカイトが多数を占めることが判明した。本地域における縄文時代の石器の原産地を分析した資料は乏しく、今後、原産地の時期的推移や流通のあり方について、実証的な研究が進展するものと考えられる。

弥生時代

第２・３章で既述したように、Ⅱ区からⅠ区西半部にかけて低地帯が南北に走行する。当該期はこの低地帯はほとんど埋没しておらず、起伏に富んだ地形環境を呈していたと考えられる。

SD05 ～ SD08・SD10 は、こうした低地帯の縁辺に配された水路群であり、ほぼ同位置を踏襲して、反復して改修され、比較的長期にわたり維持された可能性が考えられる。その規模や位置、流路方向より、取・排水を平地上の埋没旧河道に設定したものと評価され、その灌漑範囲は比較的小規模なものであったと考えられる。

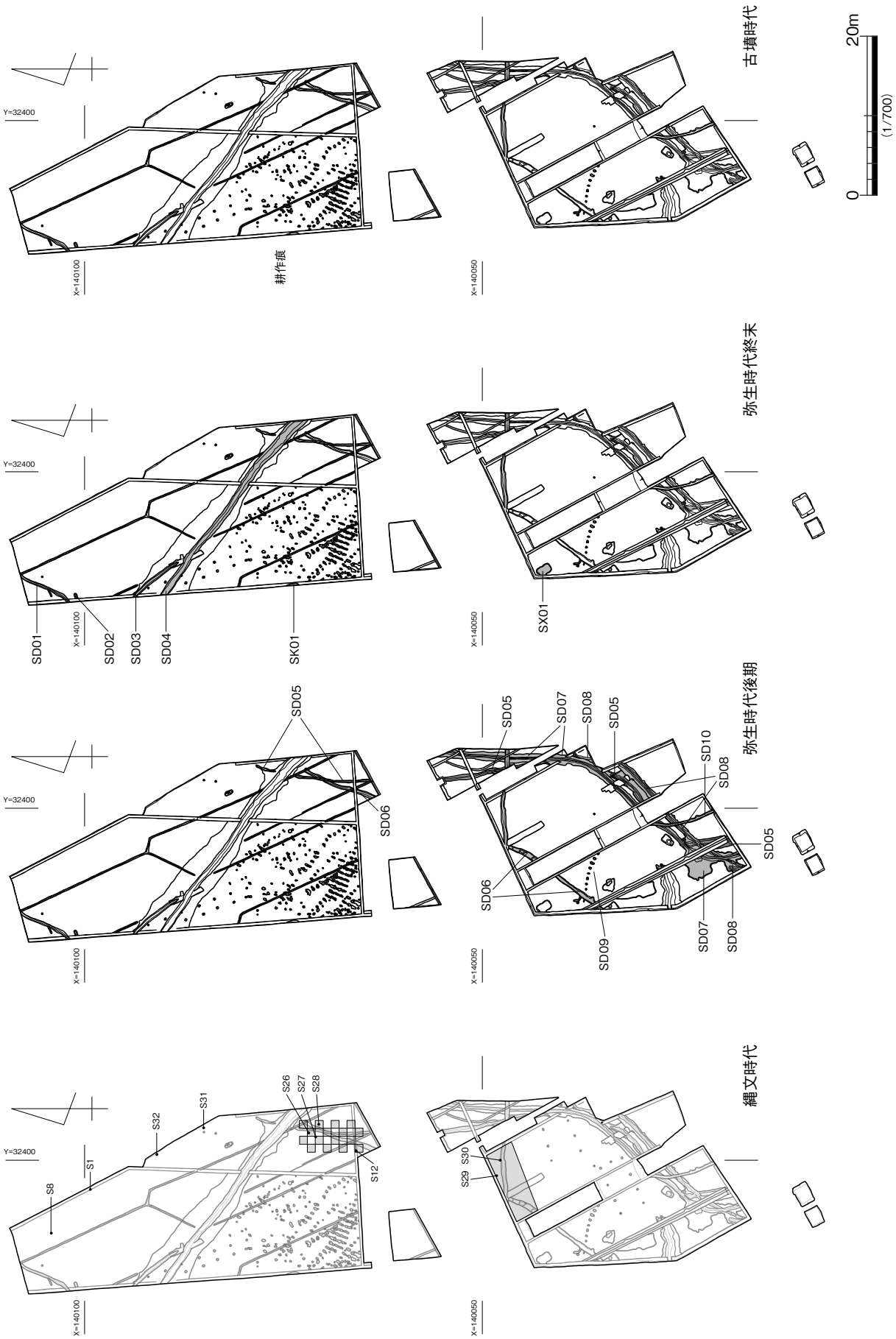
一方、南北水路を廃した後開削された東西溝 SD04 は、基幹となる大型水路であり、複数の微高地を横断して開削されたと考えられる。また、流路方向や規模から、取水源を旧大束川に設定し、前段階と比して灌漑面積が飛躍的に増大した可能性が考えられる。出土遺物より古墳時代前期初頭には水路としての管理が放棄され、前章での放射性炭素年代測定の結果から、同前期から中期にかけて埋没したと考えられる。

なお、当該期の建物遺構は調査区内で確認されておらず、各溝の遺物の出土量からも、調査地は当時の集落域からはやや隔たった位置であったことが想定される。

古墳時代

当該期には、低地帯の埋没が進み、包含層Ⅰが形成されたと考えられる。そして、本層を作土として、鋤溝群がⅠ区南西部を中心に検出された。明確な時期を特定することはできないが、鋤溝の方向が、正方位や条里型地割の方向と合致せず、低地帯の傾斜方向と概ね一致すること、包含層Ⅰ出土遺物の時期より、５世紀末～７世紀後葉の時期が想定される。

前章でのプラント・オパール分析の結果から、水田の可能性は低いことが明らかとなった。類似遺構


縄文時代
弥生時代後期
弥生時代終末
古墳時代
耕作痕
Y=32400
X=140100
X=140050
S8
S1
S32
S31
S26
S27
S28
S12
S29
S30
SD05
SD06
SD07
SD08
SD09
SD10
SD01
SD02
SD03
SD04
SK01
SX01
0
20m
(1/700)

第 56 図　遺構変遷図 1

の調査例や、考古学的な調査成果を踏まえるなら、畑地として利用された可能性が考えられる。栽培種の特定にまでは至らなかったが、当該期の耕地が広く展開していたことが確認された。

古代

上述した包含層Ⅲをベースとして、Ⅱ区北半部で東西溝 SD11 が開削される。その流路方向はほぼ正方位を示す。時期を特定できる遺物の出土に恵まれなかったが、他遺跡での類例の検討から、７世紀末～８世紀初頭の開削の可能性が想定される。

本遺跡より約 1.5km南には、白鳳期に創建された法勲寺が所在し、正方位の伽藍配置の可能性が説かれている。また、近年の調査により岸の上遺跡では、正方位の掘立柱建物が検出されている。SD11 は、法勲寺を南限とし、また拠点として開発された正方位軸の地割の北限を示すものと評価される。

なお、Ⅱ区で検出された SX02 ～ SX06 は、包含層Ⅱに酷似した埋土を有することから、当該時期の埋没の可能性が考えられる。いずれも、平・断面形状は安定した形態を呈さず、自然地形の可能性が考えられる。

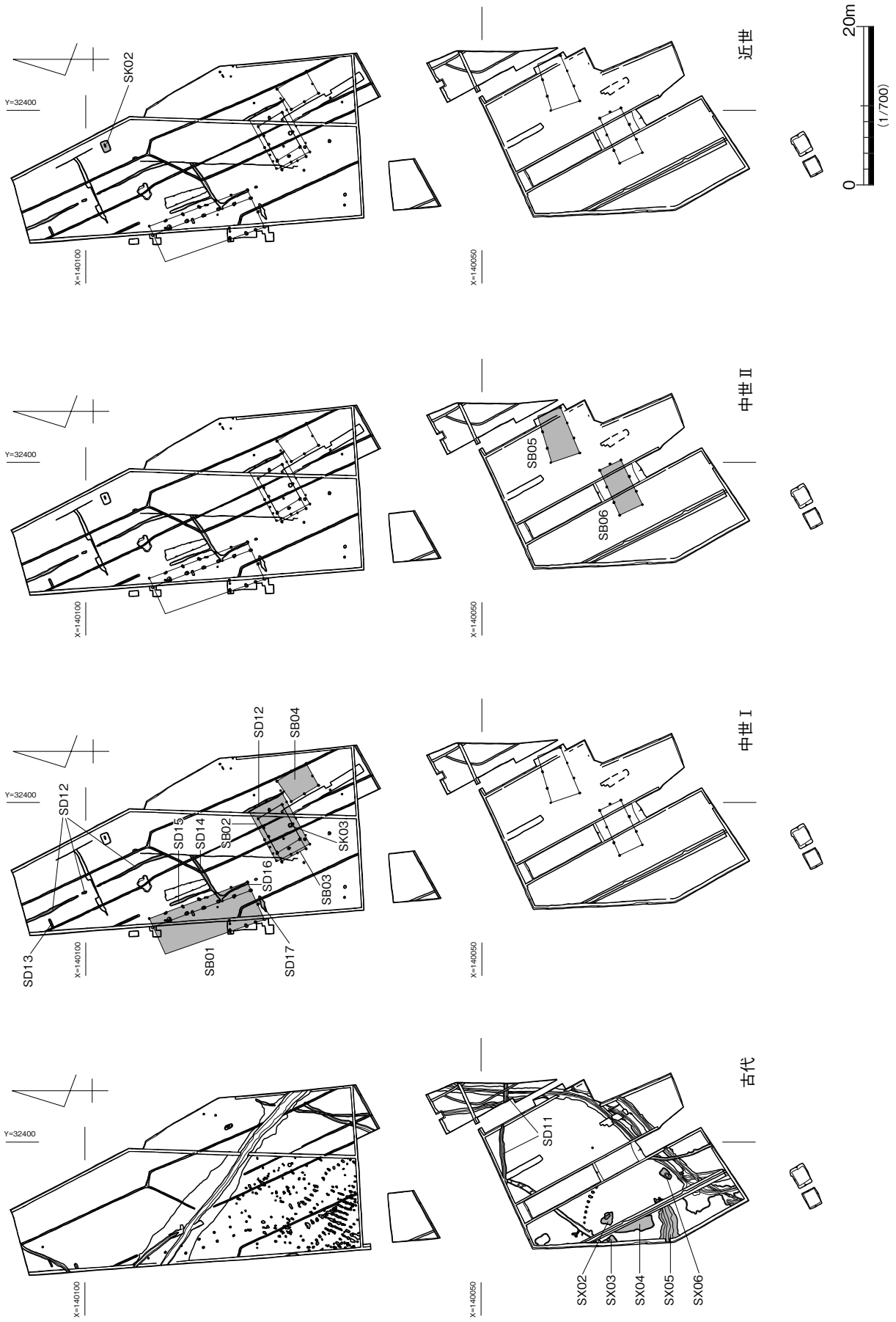
中世

Ⅰ区を中心に、四面庇建物１棟と床面積 53㎡の大型建物１棟以上で構成された屋敷地が成立する。12 世紀前半代を中心とするⅠ区 SB01 ～ SB04 と、12 世紀後半～ 13 世紀前葉を中心とするⅡ区 SB05・SB06 の大きく２時期に分けられる。それぞれの建物は、丸亀平野の条里型地割の方向に概ね合致し、同地割が本地域では遅くとも 12 世紀前半代には施工されていたことを示している。また、明確に屋敷地を区分する施設は認められなかったが、第２図より条里型地割の坪界がⅠ区とⅡ区の間に想定され、それぞれ屋敷地の区画も異なる可能性がある。

大型建物を含むⅠ区建物群は、本地域の開発の拠点となった有力富農層の屋敷地として評価される。また、その経営は比較的短期で廃絶した可能性があり、安定したものではなかった可能性がある。

近世

当該期には、Ⅰ区で土坑が１基（SK02）検出されたのみとなり、調査区周辺は旧耕作土層等からの出土遺物より、水田等の耕地として利用されたと考えられる。


古代
中世Ⅰ
中世Ⅱ
近世
Y=32400
X=140100
X=140050
SK02
SD11
SX02
SX03
SX04
SX05
SX06
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SB01
SB02
SB03
SB04
SK03
SB05
SB06
0
20m
(1/700)

第 57 図　遺構変遷図２

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位		梁間		桁行		床面積	備考
SB01	Ⅰ区	南北棟側柱建物	東列	N 20.491° W	北列	－	東列	6間（13.215 m）	53.005㎡	東面庇
			西列	－	南列	2間（4.011 m）	南列	－		
柱穴番号	平面形	規模（m）	底面標高（m）	残存深（m）	出土遺物					備考
SP49	隅丸方？	0.32 + × 0.39	17.87	0.29	土師質土器小片2					身舎柱穴
SK03	不整方	0.58 × 0.61	17.68	0.47	土師質土器皿片3・碗片2・小片27、黒色土器碗片3、須恵器小片4					身舎柱穴
SP43	隅丸方	0.37 × 0.47	17.70	0.50	土師質土器杯片1・小片24、黒色土器小片2、須恵器小片1					身舎柱穴
SP33	不整方	0.32 × 0.49	17.83	0.38	土師器甕片1、土師質土器碗片2・小片23、黒色土器碗片3					身舎柱穴
SP30	隅丸方	0.33 × 0.41	17.92	0.29	土師質土器皿片2・小片12、黒色土器碗片6、須恵器小片1					身舎柱穴
SP27	不定形	0.29 × 0.42	17.72	0.49	土師質土器杯片2・碗片1・小片9、布目平瓦片1、焼土塊1					身舎柱穴
SP25	長円	0.28 × 0.40	17.62	0.57	土師質土器杯片1・小片6					身舎柱穴・柱材残存
SP26	不整方	0.25 × 0.30	17.89	0.32	土師質土器杯片3					身舎柱穴
SP48	不整方	0.26 + × 0.34	17.72	0.50	土師器甕片1、土師質土器小片11、黒色土器碗片1					身舎柱穴
SP54	不整円	0.35 × 0.39	17.66	0.52	土師質土器杯片1・小片19、黒色土器小片1					身舎柱穴
SP55	隅丸方	0.40 × 0.31	17.68	0.52	土師質土器皿片1・小片12、黒色土器碗片3、須恵器小片1、白磁小片1					身舎柱穴
SP40	略円	0.20 × 0.18	17.74	0.42	土師質土器小片1					
SP37	略円	0.23 × 0.25	17.68	0.48	土師質土器小片2、黒色土器碗片3					
SP34	楕円	0.21 × 0.24	17.71	0.47	土師質土器小片5					
SP32	楕円	0.23 × 0.28	17.85	0.35	土師質土器皿片1・小片6					
SP47	略円	0.26 × 0.24	17.81	0.39	土師質土器皿片2・杯片2・小片5、焼土塊1					
SP28	略円	0.22 × 0.20	17.93	0.27	土師質土器小片1					
SP45	略円	0.20 × 0.20	17.78	0.43	土師質土器小片2、黒色土器碗片1、瓦器碗片2					柱材残存

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位		梁間		桁行		床面積	備考
SB02	Ⅰ区	東西棟側柱建物	北列	N 61.205° E	東列	2間（3.433 m）	北列	2間（4.935 m）	16.926㎡	四面庇
			南列	N 61.384° E	西列	2間（3.433 m）	南列	2間（4.926 m）		
柱穴番号	平面形	規模（m）	底面標高（m）	残存深（m）	出土遺物					備考
SP11	楕円形	0.388 × 0.273	17.87	0.33	土師質土器碗片3・小片2、黒色土器碗片3、須恵器小片1					身舎柱穴
SP09	楕円形	0.307 × 0.35	17.83	0.35	土師質土器小片6					身舎柱穴
SP07	不定形	0.304 × 0.322	17.98	0.16	－					身舎柱穴
SP15	楕円形	0.243 × 0.194	17.94	0.16	土師質土器碗片1・小片1					身舎柱穴
SP82	楕円形	0.25 × 0.23	17.95	0.25	土師質土器小片1					身舎柱穴
SP76	略円形	0.44 × 0.25	18.09	0.20	土師器甕片1、土師質土器皿片2・杯片1・小片5、黒色土器碗片2					身舎柱穴
SP01	楕円形	0.269 × 0.164	18.01	0.12	土師質土器皿1、黒色土器碗小片2、焼土塊1					身舎柱穴
SP13	楕円形	0.273 × 0.245	17.96	0.22	土師質土器小片2、黒色土器小片2					身舎柱穴
SP36	略円形	0.181 × 0.179	18.05	0.18	土師質土器杯片1					
SP23	略円形	0.176 × 0.178	17.97	0.25	土師質土器小片2、黒色土器碗片6					
SP18	略円形	0.218 × 0.209	17.95	0.24	土師質土器小片1					
SP19	略円形	0.211 × 0.20	18.02	0.16	－					
SP06	略円形	0.135 × 0.129	17.89	0.23	－					
SP14	略円形	0.131 × 0.116	17.91	0.23	土師質土器小片2					
SP86	楕円形	0.191 × 0.166	18.14	0.06	－					
SP85	略円形	0.219 × 0.202	18.16	0.03	－					詰石
SP84	楕円形	0.17 × 0.206	18.16	0.03	－					
SP83	略円形	0.17 × 0.175	18.12	0.05	－					
SP16	楕円形	0.246 × 0.186	18.04	0.13	土師質土器小片1					
SP17	楕円形	0.183 × 0.145	18.13	0.08	土師質土器小片1					

第11表　掘立柱建物属性表（1）

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位		梁間		桁行		床面積	備考
SB03	Ⅰ区	東西棟側柱建物	北列	N 61.251° E	東列	2 間（3.524 m）	北列	4 間（6.107 m）	21.609㎡	
			南列	N 61.573° E	西列	2 間（3.484 m）	南列	2 間（6.227 m）		
柱穴番号	平面形	規模（m）	底面標高（m）	残存深（m）	出土遺物					備考
SP01	楕円形	0.269 × 0.164	18.01	0.12	土師質土器皿 1、黒色土器碗小片 2、焼土塊 1					SB02 と共有
SP76	略円形	0.44 × 0.25	18.09	0.20	土師器甕片 1、土師質土器皿片 2・杯片 1・小片 5、黒色土器碗片 2					SB02 と共有
SP82	楕円形	0.25 × 0.23	17.95	0.25	土師質土器小片 1					SB02 と共有
SP15	楕円形	0.243 × 0.194	17.94	0.16	土師質土器碗片 1・小片 1					SB02 と共有
SP07	不定形	0.304 × 0.322	17.98	0.16	−					SB02 と共有
SP04	略円形	0.259 × 0.218	17.95	0.21	土師質土器小片 1					
SP08	略円形	0.182 × 0.171	18.03	0.12	−					
SP35	楕円形	0.306 × 0.231	17.99	0.24	須恵器小片 1					
SP11	楕円形	0.388 × 0.273	17.87	0.33	土師質土器碗片 3・小片 2、黒色土器碗片 3、須恵器小片 1					SB02 と共有
SP13	楕円形	0.273 × 0.245	17.96	0.22	土師質土器小片 2、黒色土器小片 2					SB02 と共有
SP02	略円形	0.221 × 0.190	17.97	0.19	土師質土器小片 3					

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位		梁間		桁行		床面積	備考
SB04	Ⅰ区	南北棟側柱建物	東列	N 31.196° W	北列	1 間（3.138 m）	東列	2 間（4.315 m）	13.071㎡	
			西列	N 30.894° W	西列	2 間（3.156 m）	西列	2 間（3.992 m）		
柱穴番号	平面形	規模（m）	底面標高（m）	残存深（m）	出土遺物					備考
SP75	略円形	0.24 × 0.23	17.97	0.24	土師質土器小片 2、黒色土器小片 1					詰石
SP74	略円形	0.22 × 0.22	17.85	0.35	土師質土器小片 2、黒色土器小片 1					
SP73	略円形	0.26 × 0.23	17.91	0.30	土師質土器碗片 1・小片 7、黒色土器小片 1					
SP80	略円形	0.18 × 0.17	17.77	0.41	土師質土器皿片 2・小片 4					
SP100	楕円形	0.177 × 0.258	17.89	0.31	土師質土器小片 1					詰石
SP99	楕円形	0.241 × 0.221	17.87	0.09	土師質土器小片 2					
SP78	楕円形	0.27 × 0.22	17.80	0.36	土師質土器小片 1、須恵器小片 1					詰石

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位		梁間		桁行		床面積	備考
SB05	Ⅱ区	東西棟側柱建物	北列	N 66.003° W	東列	2 間（2.983 m）	北列	3 間（6.229 m）	19.208㎡	
			南列	N 64.165° W	西列	1 間（3.165 m）	南列	3 間（6.268 m）		
柱穴番号	平面形	規模（m）	底面標高（m）	残存深（m）	出土遺物					備考
SP67	略円	0.22 × 0.22	17.99	0.19	-					
SP68	楕円	0.16 × 0.19	18.05	0.10	-					
SP69	略円	0.20 × 0.21	18.04	0.13	-					
SP106	不整円	0.23 × 0.25	18.14	0.19	-					
SP108	略円	0.22 × 0.22	18.19	0.10	-					
SP94	不整円	0.18 × 0.19	18.14	0.06	-					
SP93	略円	0.24 × 0.24	18.03	0.16	土師質土器杯片 1・小片 2					
SP105	略円	0.20 × 0.19	18.01	0.18	-					
SP66	略円	0.23 × 0.25	17.94	0.22	土師質土器小片 1					

第 12 表　掘立柱建物属性表（2）

建物番号	調査区	建物種類	主軸方位		梁間		桁行		床面積	備考
SB06	Ⅱ区	東西棟側柱建物	北列	N 74.351° E	東列	−	北列	−	24.00㎡	
			南列	N 67.214° E	西列	1間（3.853 m）	南列	3間（6.229 m）		

柱穴番号	平面形	規模（m）	底面標高（m）	残存深（m）	出土遺物	備考
SP104	略円	0.14 × 0.14	18.18	0.03	−	
SP91	楕円	0.17 × 0.21	17.99	0.21	土師質土器小片２、須恵器小片１、瓦器小片１	
SP90	不整円	0.20 × 0.20	17.96	0.25	土師質土器小片１	
SP102	略円	0.17 × 0.17	18.13	0.09	−	
SP103	不整円	0.21 × 0.21	18.22	0.05	−	
SP89	楕円	0.28 × 0.17	18.05	0.18	土師質土器小片３	
SP88	略円	0.21 × 0.22	18.09	0.16	土師質土器皿片２・小片２	

第13表　掘立柱建物属性表（3）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
1			試掘トレンチ		須恵器	杯身	体部：回転ナデ、底部：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N7/ 灰白色	良好	中・少					8.2		1/8	
3		Ⅰ区	包含層Ⅲ		弥生土器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ？マメツ	口縁～頸部：マメツ	7.5YR6/6 橙色	7.5YR8/1 灰白色	良好	中・並			16.6				1/8 未満	
4		Ⅱ区	包含層Ⅲ		弥生土器	壺	底部：マメツ	底部：マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/6 明黄褐色	良好	中・並					5.9		1/8	
5		Ⅰ区	包含層Ⅲ		弥生土器	高坏	脚柱：ミガキ・マメツ、脚裾：マメツ	脚柱：ナデ・シボリ目、脚裾：ナデ？マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙色	5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・少							3/8	
6		Ⅱ区	包含層Ⅲ		弥生土器	高坏	脚部：マメツ	脚部：マメツ	7.5YR6/4 にぶい橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	良好	中・並							破片	裾部小円孔４穿孔
7		Ⅱ区	包含層Ⅲ		弥生土器	台付鉢	体部：ナデ？マメツ、脚台：指オサエ・ナデ	体部：ナデ、脚台：ナデ？マメツ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	良好	中・少					3.8		1/8	
8		Ⅰ区	包含層Ⅲ		土師器	甕	口縁：ヨコナデ	口縁：ヨコハケ・ヨコナデ	5YR5/4 にぶい赤褐色	10YR6/1 褐灰色	良好	粗・多							1/8 未満	
9		Ⅱ区	包含層Ⅲ		須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ、天井：回転ケズリ	口縁～天井：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少							1/8 未満	
10		Ⅰ区	包含層Ⅲ		須恵器	杯	体部：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少					10.8		1/8 未満	
11		Ⅰ区	包含層Ⅲ		土師器	杯	体部：回転ナデ？マメツ、底面：マメツ	体～底部：マメツ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや軟	中・少					7.0		1/8	
12		Ⅰ区	包含層Ⅲ		土師質土器	不明	ナデ	ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	中・少							破片	小円孔穿孔・図左面に被熱痕
23		Ⅰ区	包含層Ⅱ		弥生土器	壺	口縁～頸部：凹線２条？ヨコナデ・マメツ	口縁～頸部：ヨコナデ？マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	中・多			23.0				1/8 未満	
24		Ⅰ区	包含層Ⅱ		弥生土器	壺	口縁：ヨコナデ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ	2.5Y6/3 にぶい黄色	2.5Y7/4 浅黄色	良好	中・多			31.2				1/8	
25		Ⅰ区	包含層Ⅱ		弥生土器	鉢	口縁：ヨコナデ	口縁：ヨコナデ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y5/1 黄灰色	良好	中・多			40.6				1/8 未満	
26		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	甕	口縁：ヨコナデ？マメツ	口縁：ヨコナデ？マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・多							1/8 未満	

第14表　土器観察表（1）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
27		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	甕	口縁：ヨコナデ、頸部：タテハケ	口縁：ヨコハケ後ナデ？	10YR5/2 灰黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	良好	中・並							1/8 未満	
28		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師質土器	皿	底面：回転ヘラ切り・マメツ	底部：回転ナデ・マメツ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	中・少					6.9		1/8	
29		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師質土器	皿	底部：マメツ	底部：マメツ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/3 浅黄色	軟	中・並					8.0		1/8	
30		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	杯	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	2.5Y6/4 にぶい黄色	2.5Y6/4 にぶい黄色	良好	細・少					7.8		1/8	
31		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	高坏	脚部：メントリ	脚部：ヨコナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	良好	細・並							破片	
32		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	甕	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：ヨコナデ・ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐色	10YR4/1 褐灰色	やや軟	中・多							1/8	
33		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	羽釜	口縁：ヨコナデ	口縁：ヨコハケ後ヨコナデ	2.5Y7/3 灰黄色	2.5Y7/3 浅黄色	良好	中・少			29.0				1/8 未満	
34		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	羽釜	口縁～鍔部：ヨコナデ、体部：タテハケ後ナデ？マメツ	口縁～体部：横板ナデ？マメツ	10YR6/2 灰黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	良好	中・少							1/8 未満	
35		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	羽釜	口縁：ヨコナデ	口縁：ヨコハケ・ヨコナデ	2.5Y6/4 にぶい黄色	2.5YR6/6 橙色	良好	中・少							1/8 未満	
36		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	甕	体部：把手貼付後ナデ	体部：指オサエ・ナデ	2.5Y7/3 灰黄色	10YR6/4 にぶい黄橙色	良好	中・少							破片	
37		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	竈	底部：タテハケ	底部：ナデ・マメツ	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	中・並							破片	
38		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	竈	鍔部：ハケ・板ナデ後指オサエ・ナデ	鍔部：ハケ後指オサエ・ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	良好	中・並							破片	
39		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	やや軟	中・少			12.8				1/8 未満	
40		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り？後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	やや軟	細・並			11.7	1.7	8.2		1/8	
41		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	杯蓋	天井部：回転ナデ	天井部：回転ナデ・マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/4 にぶい黄橙色	良好	細・少							破片	
42		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	天井：回転ナデ・ナデ	天井：回転ナデ・ナデ	7.5Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	良好	細・少							破片	
43		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少			15.4				1/8 未満	
44		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯蓋	口縁：回転ナデ、天井：回転ヘラ切り？後ナデ	口縁～天井：回転ナデ	5YR5/1 褐灰色	N6/ 灰色	良好	細・少			14.9				1/8 未満	
45		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	壺蓋	口縁～天井部：回転ナデ	口縁～天井部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	中・少			22.7				1/8 未満	
46		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	細・少			17.1				1/8 未満	
47		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	皿	体部：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少					9.5		1/8	
48		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ、端部に浅い沈線１条	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少							1/8 未満	
49		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少			11.0				1/8	
50		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・並			13.4				1/8 未満	
51		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	7.5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	良好	細・少			12.8				1/8 未満	火襷
52		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	細・少			14.9				1/8 未満	
53		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	良好	細・少					6.8		1/8	火襷

第 15 表　土器観察表（2）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
54		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	底面：回転ヘラ切り後ナデ？マメツ	底部：回転ナデ	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	やや軟	細・並					8.1		1/8	
55		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	碗	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少					7.6		1/8	
56		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身	底面：マメツ	体～底部：マメツ	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	軟	中・少					9.2		1/8	
57		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	底面：回転ヘラ切り後ナデ	底部：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	細・少					10.3		1/8	
58		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	細・少			15.2				1/8 未満	
59		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N6/ 灰色	N7/ 灰白色	良好	細・少			15.6				1/8 未満	
60		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身？	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少			18.7				1/8 未満	
61		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯身	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少					8.6		1/8 未満	内面墨痕の可能性
62		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	底面：回転ヘラ切り後高台貼付後ナデ	底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	中・少					8.2		1/8	
63		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	体部：回転ナデ？マメツ、底面：高台貼付・マメツ	体～底部：回転ナデ・マメツ	7.5Y8/1 灰白色	2.5Y7/3 浅黄色	やや軟	細・少					10.2		1/8 未満	
64		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	底面：回転ヘラ切り後高台貼付後ナデ	底部：回転ナデ後ナデ	N8/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少					9.4		1/8	
65		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	杯	底面：回転ヘラ切り後高台貼付後ナデ	底部：回転ナデ・マメツ	7.5Y8/1 灰白色	N8/ 灰白色	やや軟	細・並					9.6		1/8	
66		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	甕	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	N4/ 灰色	N7/ 灰白色	良好	中・少			22.4				1/8 未満	
67		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	鉢	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少			19.9				1/8 未満	
68		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	壺	体部：回転ケズリ後ナデ、底面：回転ケズリ？後高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N8/ 灰白色	良好	細・少					9.2		3/8	
69		Ⅰ区	包含層Ⅱ		須恵器	壺？	底部：回転ケズリ後ナデ？　底面：マメツ	底部：マメツ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	やや軟	中・少					11.0		1/8	
70		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少			8.3				2/8	
71		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師質土器	碗？	底面：マメツ	底部：マメツ	7.5YR5/6 明褐色	5YR5/8 明赤褐	やや軟	細・少					6.4		2/8	
72		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	碗	体部：回転ナデ？マメツ、底面：マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y7/3 浅黄色	7.5YR7/6 橙色	良好	細・少					8.0		1/8	
73		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	碗	底部：高台貼付・マメツ	底部：マメツ	5YR6/4 にぶい橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	やや軟	細・少					7.8		1/8 未満	
74		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師質土器	碗	マメツ	体～底部：板ナデ？マメツ	10YR7/6 明黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	良好	細・並					7.1		2/8	
75		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師質土器	杯	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	10YR5/8 黄褐色	10YR5/8 黄褐色	良好	中・少					7.4		1/8	
76		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	杯	底面：回転ヘラ切り後ナデ	底部：回転ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少					6.4		8/8	
77		Ⅰ区	包含層Ⅱ		土師器	飯蛸壺	体部：指オサエ・ナデ	体部：指オサエ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・並							破片	
81		Ⅱ区	包含層Ⅰ		須恵器	皿	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少					9.4		1/8	火襷
82		Ⅱ区	包含層Ⅰ		須恵器	杯	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	細・少					8.1		1/8	火襷
83		Ⅱ区	包含層Ⅰ		須恵器	杯	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少					8.1		1/8	

第16表　土器観察表（3）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
84		Ⅱ区	包含層Ⅰ		土師器	皿	口縁～体部：回転ナデ？マメツ、底部：ケズリ？	口縁～底部：マメツ	5YR6/6 橙色	5YR6/6 橙色	やや軟	細・並			11.2				1/8	
85		Ⅱ区	包含層Ⅰ		土師質土器	碗	口縁～体部：マメツ	口縁～体部：マメツ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少			14.8				1/8 未満	
86		Ⅱ区	包含層Ⅰ		土師器	碗	体部：回転ナデ？マメツ、底面：回転ヘラ切り後ナデ？	体～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少					6.4		1/8	
87		Ⅱ区	包含層Ⅰ		土師質土器	碗	底面：回転ヘラ切り後ナデ	底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・多					6.8		8/8	
88		Ⅱ区	包含層Ⅰ		須恵器	高坏	杯～脚部：回転ナデ	杯部:回転ナデ、脚部:ナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	良好	細・少							破片	
89		Ⅱ区	包含層Ⅰ		土師器	羽釜	頸～鍔部：ヨコナデ	頸部：ヨコナデ	2.5Y6/2 灰黄色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・並							破片	
90		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	杯	体部：マメツ、底面：高台貼付後ナデ	体～底部：回転ナデ・マメツ	5YR5/6 明赤褐色	5YR6/4 にぶい橙色	良好	細・少					7.2		1/8	
91		Ⅱ区	旧耕土層		須恵器	杯	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り？後ナデ	体～底部：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	やや軟	細・少					6.9		1/8	
92		Ⅱ区	旧耕土層		須恵器	杯	底面：回転ヘラ切り？後高台貼付・ナデ	底部：回転ナデ	7.5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	やや軟	細・少					9.6		1/8	
93		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	碗	体部：回転ナデ・マメツ、底面：ナデ？マメツ	体～底部：回転ナデ？マメツ	10YR7/3 にぶい黄橙色	5YR6/3 にぶい橙色	良好	細・少					6.6		1/8	
94		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	碗	体部：マメツ、底面：回転ヘラ切り？マメツ	体～底部：回転ナデ？マメツ	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	良好	細・少					7.9		1/8	
95		Ⅰ区	床土層		須恵器	杯蓋	天井：回転ヘラ切り後ナデ	天井：回転ナデ後ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	良好	細・少							破片	
96		Ⅱ区	旧耕土層		須恵器	蓋	口縁:回転ナデ、天井:回転ケズリ？後ナデ	口縁～天井：回転ナデ	N8/ 灰白色	N8/ 灰白色	良好	細・少			15.8				1/8 未満	
97	22	Ⅱ区	旧耕土層		緑釉陶器	碗	底面：蛇の目高台・高台内施釉・マメツ	底部：マメツ	7.5Y7/2 灰白色（胎）	2.5GY7/1 明オリーブ灰色（釉）	やや軟	細・少					6.2		7/8	東海産
98		Ⅱ区	旧耕土層		黒色土器	碗	底部:高台貼付後ナデ・マメツ	底部：ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5Y3/1 オリーブ黒色	良好	中・少					6.8		1/8	
99		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	杯	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄色	10YR7/3 にぶい黄橙色	良好	細・少					7.9		1/8	
100		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	杯	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ？	体～底部：回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	5YR5/4 にぶい赤褐色	良好	細・少					7.4		1/8	
101		Ⅱ区	旧耕土層		土師質土器	杯	体部:回転ナデ、底面:回転ヘラ切り後ナデ	体～底部：回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	細・少					9.2		1/8	
102		Ⅱ区	旧耕土層		土師質土器	杯	口縁～体部:回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	5Y8/1 灰白色	5Y8/1 灰白色	良好	細・並			12.5	3.5	7.0		2/8	
103		Ⅰ区	床土層		土師質土器	鉢	口縁：回転ナデ・マメツ	口縁：回転ナデ・マメツ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR8/3 浅黄橙色	やや軟	細・並			22.0				1/8 未満	
104		Ⅰ区	床土層		白磁	碗	口縁：施釉	口縁：施釉	7.5Y8/1 灰白色（胎）	7.5Y7/2 灰白色（釉）	良好				18.4				1/8 未満	
105		Ⅰ区	床土層		白磁	碗	底部～高台：ケズリ後一部施釉	底部：施釉	N8/ 灰白色（胎）	2.5GY7/1 明オリーブ灰色（釉）	良好						6.2		1/8	中国製
106		Ⅱ区	床土層		白磁	壺	体部：施釉	体部：施釉	N8/ 灰白色（胎）	2.5GY7/1 明オリーブ灰色	良好								破片	中国製

第 17 表　土器観察表（4）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
107		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	羽釜	口縁：ヨコナデ、鍔部：ヨコナデ	口縁：板ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	中・並			19.4				1/8 未満	
108		Ⅱ区	旧耕土層		土師器	羽釜	口縁：ヨコナデ、鍔部：ヨコナデ	口縁：ヨコナデ？マメツ	10YR7/6 明黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	良好	中・多			20.2				1/8 未満	
109		Ⅰ区	床土層		土師質土器	足釜	口縁～鍔部：ヨコナデ、体部：指オサエ・ナデ後タテハケ・ヨコナデ	口縁～体部：ヨコハケ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色	良好	中・並			27.2				1/8 未満	
110		Ⅰ区	撹乱		土師質土器	摺鉢	体部：ハケ後指オサエ・ナデ、底面：マメツ	体部：ナデ？後擂目 9 条／単位	7.5YR8/3 浅黄橙色	10YR8/2 灰白色	良好	中・少					17.0		1/8 未満	
111		Ⅰ区	床土層		染付磁器	皿	体～高台：施釉、高台端～内：ケズリ・露胎	底部：施釉	N8/ 灰白色	5B4/1 暗青灰色（呉須）	良好						4.4		4/8	肥前系
112		Ⅰ区	床土層		土師器	飯蛸壺	体部：指オサエ・ナデ	体部：指オサエ・ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	5YR6/6 橙色	良好	中・並							破片	
120		Ⅰ区	SD04	上層	弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ・凹線２条？マメツ	口縁：マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	軟	中・少			13.8				1/8 未満	
121		Ⅰ区	SD04	下層	弥生土器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ	口縁～頸部：ヨコナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	良好	細・並							1/8 未満	
122		Ⅰ区	SD04	上層	弥生土器	高坏	口縁：ヨコナデ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ	10YR6/3 にぶい黄橙色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・小	細・並	細・少					1/8 未満	香東川下流域産
123		Ⅰ区	SD04		弥生土器	鉢	口縁：ハケ後ヨコナデ、体～底部：タタキ後ハケ	口縁：ハケ後ヨコナデ、体～底部：ハケ	10YR6/1 褐灰色	10YR6/1 褐灰色	良好	中・並			25.2				1/8	
126		Ⅱ区	SD05	下層	弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ、体部：タテハケ	口縁：ヨコナデ、体部：ナデ・ケズリ	2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y7/1 灰白色	良好	中・多			13.4				1/8 未満	
127		Ⅱ区	SD05	下層	弥生土器	甕	体～底部：マメツ	体～底部：指オサエ・マメツ	10YR6/2 灰黄褐色	7.5YR6/4 にぶい橙色	良好	中・並					6.4		2/8	
130		Ⅱ区	SD07	上層	弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ？マメツ、体部：タテハケ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ、体部：指オサエ・ナデ・マメツ	10YR6/4 にぶい黄橙色	10YR6/3 にぶい黄橙色	やや軟	中・多			21.3				1/8 未満	
131		Ⅱ区	SD07	上層	弥生土器	甕	口縁～頸部：ヨコナデ、体部：タテハケ	口縁～頸部：ヨコナデ・マメツ、体部：指オサエ・ナデ	2.5Y6/2 灰黄色	10YR5/2 灰黄褐色	良好	中・多			19.6				3/8	
132		Ⅱ区	SD07		弥生土器	甕	体部：マメツ、底面：マメツ	体～底部：指オサエ・ナデ	7.5YR6/6 橙色	N3/ 暗灰色	良好	中・並					5.1		1/8	
136		Ⅱ区	SD08	上層	弥生土器	甕	口縁：ヨコナデ・マメツ、体部：タタキ・マメツ	口縁：ヨコナデ・マメツ、体部：板ナデ？マメツ	7.5YR5/6 明褐色	10YR6/4 にぶい黄橙色	良好	中・並			14.3				1/8	
139		Ⅰ区	耕作痕		弥生土器	壺	体～底部：マメツ	体～底部：マメツ	2.5Y6/4 にぶい黄色	10YR6/6 明黄褐色	良好	粗・多					6.8		1/8	
141		Ⅰ区	ＳＢ０１（SP30）		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ？	口縁：回転ナデ？	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・多			8.5				1/8	
142		Ⅰ区	ＳＢ０１（SP47）		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・多			9.6				2/8	
143		Ⅰ区	ＳＢ０１（SP47）		土師質土器	皿	底面：回転ヘラ切り？後ナデ	底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	5Y8/1 灰白色	良好	細・多					5.9		1/8	
144	22	Ⅰ区	ＳＢ０１（SP32）		土師質土器	皿	口縁部：回転ナデ・マメツ、底面：回転ヘラ切り・マメツ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	良好	細・多			8.3	1.3	5.8		2/8	口縁部歪みやや顕著
145		Ⅰ区	ＳＢ０１（SP109）		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ？	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	良好	細・並			9.0	1.1	9.2		1/8	

第 18 表　土器観察表（5）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
146	22	Ⅰ区	SB01（SP30）		土師質土器	皿	口縁部：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後板状圧痕	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	細・並			8.7	1.55	5.5		8/8	
147		Ⅰ区	SB01（SP27）	柱痕	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ	口縁～体部：回転ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐色	7.5YR5/2 灰褐色	良好	細・並			13.4				1/8 未満	
148		Ⅰ区	SB01（SP27）	柱痕	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り？	口縁～底部：回転ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	2.5Y7/1 灰白色	良好	細・並			14.1				1/8 未満	
149		Ⅰ区	SB01（SP25）	21 層	土師質土器	杯	体部：回転ナデ？マメツ、底部：マメツ	体～底部：回転ナデ？マメツ	10YR7/1 灰白色	10YR8/1 灰白色	やや軟	中・少					7.0		1/8	
150	22	Ⅰ区	SB01（SP47）		土師質土器	杯	底面：回転ヘラ切り後ナデ	底部：回転ナデ後ナデ	2.5Y8/1 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	細・多					7.6		2/8	
151		Ⅰ区	SB01（SP30）		黒色土器	碗	口縁：回転ナデ後ミガキ	口縁：回転ナデ後ミガキ	2.5Y8/2 灰白	N2/ 黒	良好	細・少			14.0				1/8	
152		Ⅰ区	SB01（SP54）	4 層	土師質土器	杯	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	良好	細・並			15.8				1/8 未満	
153		Ⅰ区	SB01（SP109）		土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ？マメツ	口縁～体部：マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	やや軟	細・多			15.4				1/8 未満	
154		Ⅰ区	SB01（SP109）		黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：ミガキ	10YR8/2 灰白色	10YR7/1 灰白色	良好	細・並					4.9		1/8	
155		Ⅰ区	SB01（SP109）		土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ・マメツ	口縁～体部：板ナデ？マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	良好	中・少			14.9				1/8 未満	
156		Ⅰ区	SB01（SP33）	18 層	土師質土器	碗	高台：ナデ	底部：板ナデ？	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少					6.6		1/8	
157		Ⅰ区	SB01（SP27）	柱痕	土師質土器	碗	底部：回転ヘラ切り？後高台貼付後ナデ	底部：板ナデ？後平行ミガキ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・少					6.0		2/8	
158		Ⅰ区	SB01（SP45）		瓦器	碗	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ	口縁～体部：回転ナデ後ミガキ	N5/ 灰色	N5/ 灰色	良好	細・少							1/8 未満	和泉型
159		Ⅰ区	SB01（SP48）		土師器	甕	口縁：板ナデ・ナデ	口縁：板ナデ・ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR5/2 灰黄褐色	良好	中・多							1/8 未満	
161		Ⅰ区	SB01（SP33）		土師器	甕	口縁～体部：指オサエ・ナデ	口縁：ヨコハケ後ナデ、体部：横板ナデ	5YR3/2 暗赤褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	中・並							1/8	外面煤付着
163		Ⅰ区	SB02（SP76）		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・多			8.3	1.5	4.6		1/8	
164		Ⅰ区	SB02（SP01）		土師質土器	皿	口縁～体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後板状圧痕？	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	良好	細・並			8.9	1.6	6.4		2/8	
165		Ⅰ区	SB02（SP36）		土師質土器	皿	口縁；回転ナデ・マメツ	口縁：回転ナデ・マメツ	5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/4 にぶい橙色	やや軟	細・少			10.3				1/8 未満	
166		Ⅰ区	SB02（SP76）		土師質土器	皿	底面：回転ヘラ切り後ナデ	底部：回転ナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	良好	細・多					5.8		2/8	
167		Ⅰ区	SB02（SP11）		黒色土器	碗	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ？	N5/ 灰色	N5/ 灰色	良好	細・少			14.6				1/8 未満	
168		Ⅰ区	SB02（SP11）	6 層	土師質土器	碗	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ？	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	やや軟	細・少			15.1				1/8 未満	
169		Ⅰ区	SB02（SP01）	柱痕	黒色土器	碗	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ後板ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR3/1 黒褐色	良好	細・少			14.8				1/8	
170		Ⅰ区	SB02（SP23）		黒色土器	碗	口縁：回転ナデ？	口縁：回転ナデ後板ナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y4/1 黄灰色	良好	細・少			14.6				1/8 未満	
171	22	Ⅰ区	SB02（SP11）		土師質土器	碗	口縁～体部：回転ナデ後一部ミガキ、底部：高台貼付後ナデ	口縁～底部：板ナデ後平行？ミガキ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少			14.5	5.55	5.9		3/8	

第 19 表　土器観察表（6）

遺物番号	図版	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		焼成	胎土			計測値（cm）				残存率	備考
							外面	内面	外面	内面		石英・長石	角閃石	雲母	口径	器高	底径	その他		
172		Ⅰ区	ＳＢ０２（SP23）		黒色土器	碗	口縁：回転ナデ、体部：回転ナデ・指オサエ後ミガキ	口縁～体部：回転ナデ後板ナデ後平行ミガキ	2.5Y8/1 灰白色	10YR2/1 黒色	良好	細・少			14.6				2/8	
173		Ⅰ区	ＳＢ０２（SP23）		黒色土器	碗	底部：回転ナデ？後高台貼付後ナデ	底部：板ナデ？後平行ミガキ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y2/1 黒色	良好	細・少					5.1		1/8	
174		Ⅰ区	ＳＢ０２（SP76）		土師器	甕	口縁：ヨコナデ	口縁：ヨコハケ後ヨコナデ・ナデ	10YR5/2 灰黄褐色	10YR3/1 黒褐色	良好	中・並							1/8 未満	
175		Ⅱ区	ＳＢ０５（SP93）	柱痕	土師質土器	杯	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	口縁～体部：回転ナデ・マメツ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	やや軟	細・並			12.8				1/8 未満	
176	22	Ⅱ区	ＳＢ０６（SP88）		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/1 灰白色	10YR8/1 灰白色	やや軟	細・少			8.3	1.2	5.4		4/8	
177		Ⅱ区	ＳＢ０６（SP91）		瓦器	碗	口縁：回転ナデ後ミガキ	口縁：回転ナデ後ミガキ	N4/ 灰色	N4/ 灰色	良好	細・少							1/8 未満	和泉型
178		Ⅰ区	SP52		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ？	口縁～底部：回転ナデ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	良好	細・少			8.2	1.6	5.8		2/8	
179	22	Ⅰ区	SP31		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ・マメツ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	良好	細・多			8.3	1.3	5.5		3/8	
180		Ⅰ区	SP31		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・多			9.7	1.3	6.8		1/8	
181		Ⅰ区	SP56	上層	黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：ミガキ・マメツ	2.5Y8/2 灰白色	5Y3/1 オリーブ黒	良好	細・少					6.6		1/8	
182		Ⅰ区	SP70		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ、底面：回転ヘラ切り後ナデ	口縁～底部：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・並			8.6		6.2		1/8	
183		Ⅰ区	SD12		土師質土器	皿	底面：回転ヘラ切り後ナデ	底部：マメツ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	やや軟	細・少					6.1		1/8	
184		Ⅰ区	SD12		黒色土器	碗	底部：高台貼付後ナデ	底部：マメツ	10YR8/2 灰白色	N5/ 灰色	良好	中・少					6.4		1/8	
185		Ⅰ区	SD14		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	5YR7/3 にぶい橙	5YR6/2 灰褐色	良好	細・少			8.8	1.4	5.6		1/8	
186		Ⅰ区	SD14		土師質土器	皿	口縁：回転ナデ	口縁：回転ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	良好	細・多			9.6				1/8	
187		Ⅰ区	SD16		土師器	甕	口縁部：ヨコナデ	口縁部：ヨコハケ後一部ヨコナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR7/4 にぶい黄橙色	良好	中・多							1/8 未満	
188		Ⅰ区	SK02		土師質土器	杯	体部：回転ナデ、底部：回転ヘラ切り後ナデ？	体～底部：回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	10YR8/2 灰白色	良好	中・少					6.6		1/8	

第 20 表　土器観察表（7）

報文番号	図版	調査区	遺構名	層位	器種	色調		焼成	胎土			計測値（cm・g）				調整		残存率	備考
						凸面	凹面		石英・長石	角閃石	雲母	現存長	現存幅	厚さ	その他	凸面	凹面		
160	22	Ⅰ区	SB02（SP27）		平瓦	10YR5/1 褐灰色	5PB5/1 青灰色	良好	中・少			4.2	6.3	2.5		板ナデ？	布目	破片	

第 21 表　平瓦観察表

報文番号	図版	調査区	遺構名	層位	器種	計測値（cm・g）				材質	残存	備考
						現存長	最大幅	最大厚	重量			
2	23		試掘トレンチ		石鏃	2.2	1.5	0.2	0.57	サヌカイト	完存	
13	23	Ⅰ区	包含層Ⅲ		石鏃	1.8	1.15	0.25	0.41	サヌカイト	一部折損	
14	23	Ⅱ区	包含層Ⅲ		石鏃	1.6	1.0	0.25	0.51	サヌカイト	下半折損	
15	23	Ⅱ区	包含層Ⅲ		石鏃	1.6	1.2	0.3	0.34	サヌカイト	一部折損	
16	23	Ⅱ区	包含層Ⅲ		石鏃	1.85	1.45	0.4	0.62	サヌカイト	ほぼ完存	
17	23	Ⅰ区	包含層Ⅲ		石鏃	2.4	1.4	0.4	0.98	サヌカイト	一部折損	
18	23	Ⅰ区	包含層Ⅲ		石鏃	2.2	1.8	0.3	0.74	サヌカイト	一部折損	
19	23	Ⅰ区	包含層Ⅲ		石鏃	2.9	1.5	0.3	0.82	サヌカイト	一部折損	
20	23	Ⅰ区	包含層Ⅲ		石匙	4.5	2.7	0.65	6.68	サヌカイト	一部折損	未成品
21	23	Ⅱ区	包含層Ⅲ		石庖丁	3.9	3.8	0.9	14.07	サヌカイト	半折	
22		Ⅰ区	包含層Ⅲ		楔形石器	6.5	4.6	1.9	58.77	サヌカイト		
78	23	Ⅰ区	包含層Ⅱ		石鏃	1.7	1.2	0.3	0.52	サヌカイト	完存	
79	23	Ⅰ区	包含層Ⅱ		石鏃	2.4	1.6	0.5	1.12	サヌカイト	完存	
80	23	Ⅰ区	包含層Ⅱ		剥片	1.2	2.0	0.6	1.48	メノウ		火打石か
113	23	Ⅰ区	床土層		石鏃	3.5	1.4	0.5	1.90	サヌカイト	一部折損	
114		Ⅰ区	床土層		不明	2.6	2.45	0.6	3.68	サヌカイト	完存	
115		Ⅰ区	床土層		砕片	5.4	2.9	1.55	22.50	サヌカイト		打斧転用
116		Ⅰ区	床土層		火打石	5.8	5.0	2.2	93.72	サヌカイト	完存	
117	23	Ⅰ区	石器ブロック		石鏃	2.1	1.5	0.25	0.56	サヌカイト	完存	
118	23	Ⅰ区	石器ブロック		石鏃	2.6	2.0	0.4	1.03	サヌカイト	完存	
119	23	Ⅱ区	石器ブロック		スクレイパー	5.4	5.2	0.6	17.87	サヌカイト	一部折損	
124	23	Ⅰ区	SD04	上層	石鏃	3.3	1.4	0.4	1.81	サヌカイト	完存	
125	23	Ⅰ区	SD04	上層	石鏃	2.2	1.8	0.35	0.97	サヌカイト	一部折損	
128	23	Ⅱ区	SD05	上層	石鏃	2.15	1.3	0.4	0.82	サヌカイト	完存	
129	23	Ⅱ区	SD05	下層	石鏃	2.4	1.2	0.3	0.79	サヌカイト	一部折損	
133	23	Ⅱ区	SD07	上層	石鏃	1.6	1.65	0.3	0.79	サヌカイト	上半折損	
134	23	Ⅱ区	SD07	上層	石鏃	2.0	1.5	0.35	0.48	サヌカイト	ほぼ完存	
135	23	Ⅱ区	SD07		石鏃	2.2	1.15	0.35	0.86	サヌカイト	一部折損	
137	23	Ⅱ区	SD08	上層	石鏃	2.6	1.9	0.3	1.12	サヌカイト	完存	
138	23	Ⅱ区	SD08	下層	石鏃	3.1	1.7	0.35	1.84	サヌカイト	一部折損	
140	23	Ⅱ区	SX03		石鏃	1.4	1.1	0.2	0.32	サヌカイト	完存	
162	23	Ⅰ区	SB01（SP33）	18 層	石鏃	2.0	1.7	0.3	0.61	サヌカイト	完存	

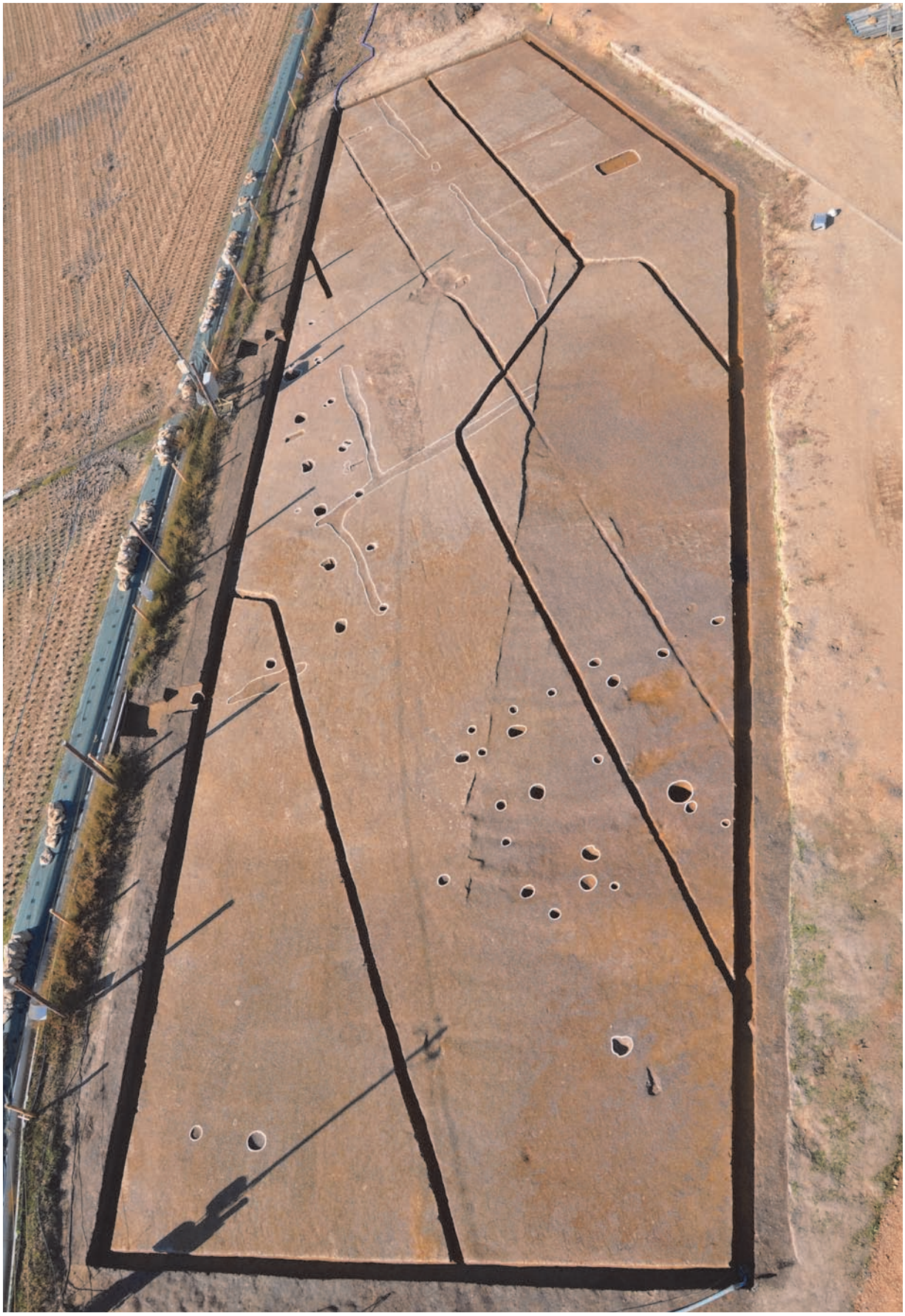
第 22 表　石器観察表

写 真 図 版

Ⅰ区　SB01 ～ 03 全景（南より）

Ⅰ区　岸の上遺跡方向遠望（北より）

Ⅰ区　西半１面全景（北より）



Ⅰ区　全景（南より）

Ⅰ区　第２面全景（北より）

Ⅰ区　第２面全景（南より）

Ⅱ区　第２面全景（北より）

Ⅱ区　第２面全景（北より）

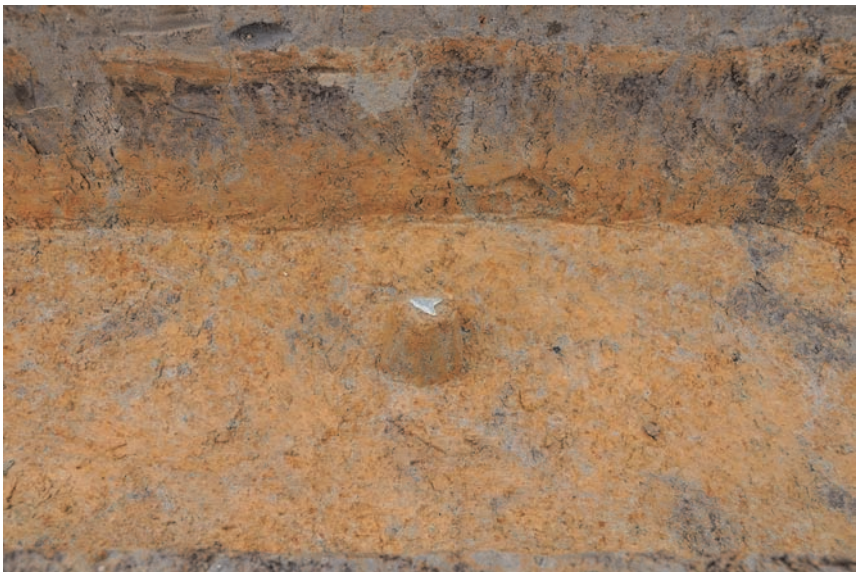
飯野山より遺跡遠遠望（北より）

Ⅱ区　中央南北土層断面（北西より）

Ⅰ区　調査区西壁（SP48）土層断面（東より）

Ⅰ区　調査区南壁土層断面（北東より）

Ⅰ区　第３面全景（西より）



Ⅰ区　石器ブロック遺物
（117）出土状況（北より）

Ⅱ区　石器ブロック遺物
（119）出土状況（南より）

図版 14　遺構写真

Ⅰ区　SD03・04 全景（東より）

Ⅰ区　SD04（調査区西壁）土層断面（東より）

Ⅰ区　SD04- D断面（西より）

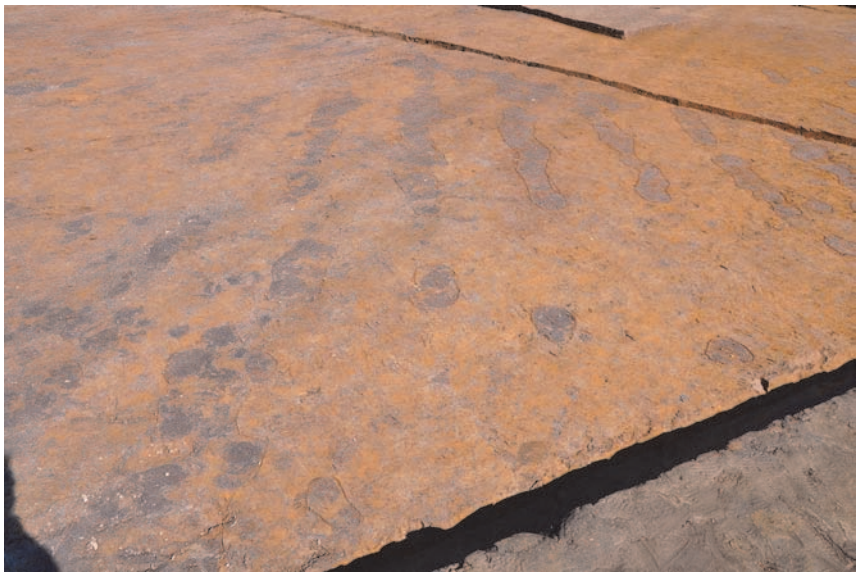
Ⅰ区　SD03（調査区西壁）
土層断面（東より）

Ⅰ区　SD03- A土層断面（東より）

Ⅱ区　SD07 遺物（130）出土状況（北より）

Ⅱ区　SD05 下層遺物（129）
出土状況（東より）

Ⅱ区　SD08 遺物（136）出
土状況（北より）



Ⅰ区　耕作痕検出状況（南
西より）

Ⅰ区　SB02・03 全景（北より）

Ⅰ区　SB01 全景（東より）

Ⅰ区　SB01 ～ 03 全景（南より）

図版 18　遺構写真

Ⅰ区　SB02 ～ 04 全景（南より）

Ⅱ区　SB06 全景（北より）

Ⅱ区　SB05 全景（北より）

Ⅰ区　SP31・SP52 遺物出土状況（北より）

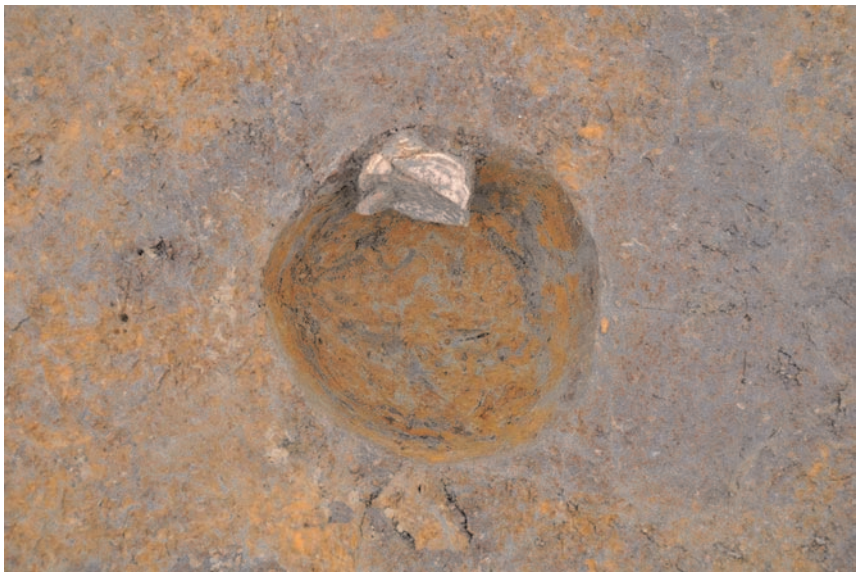
Ⅰ区　SB02（SP11）遺物出土状況（南より）

Ⅰ区　SB02（SP23）遺物出土状況（南より）

図版 20　遺構写真

Ⅰ区　SB01（SP34）柱材出土状況（南より）

Ⅰ区　SP25 柱材出土状況（東より）



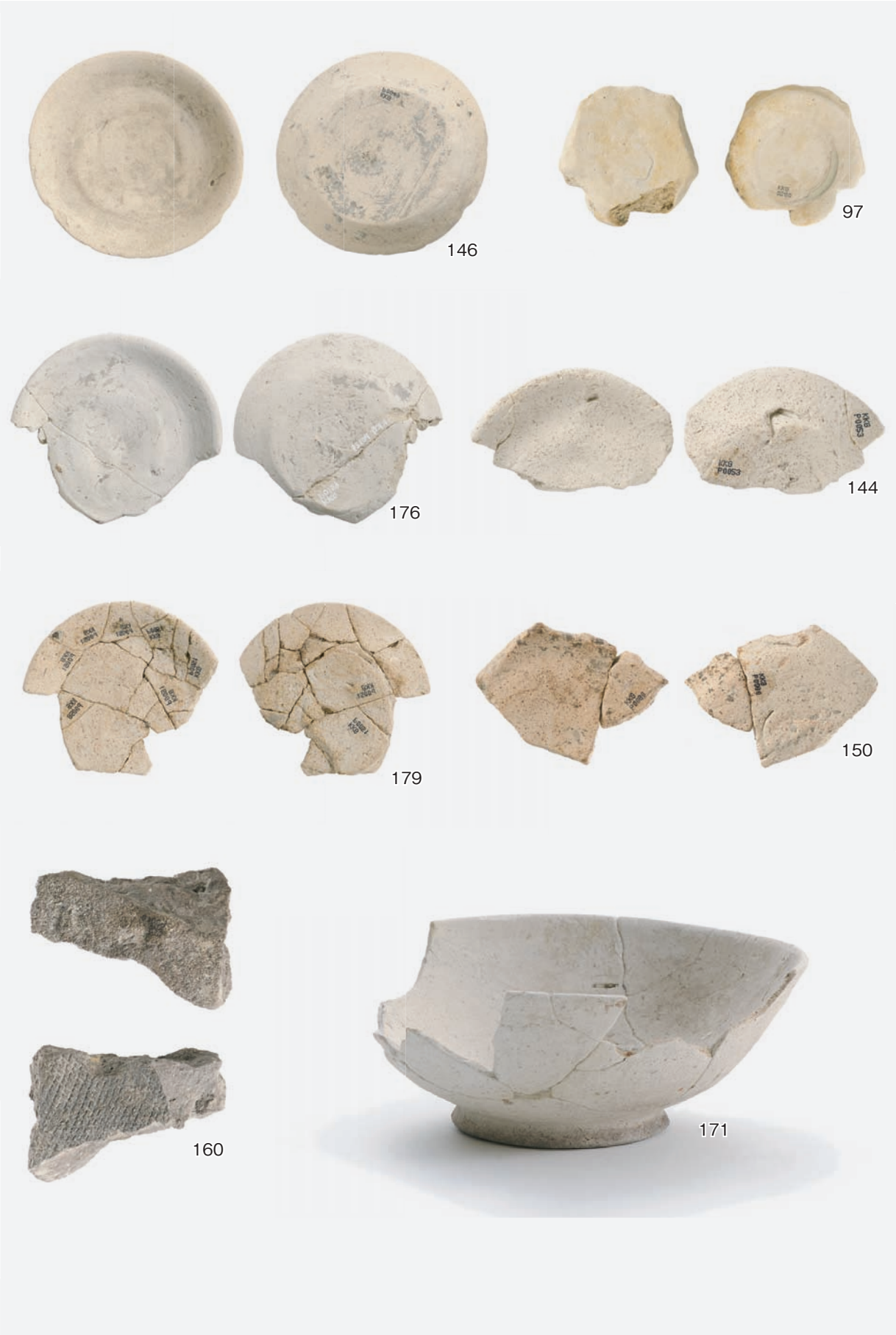
Ⅱ区　SP88 遺物（176）出土状況（北より）

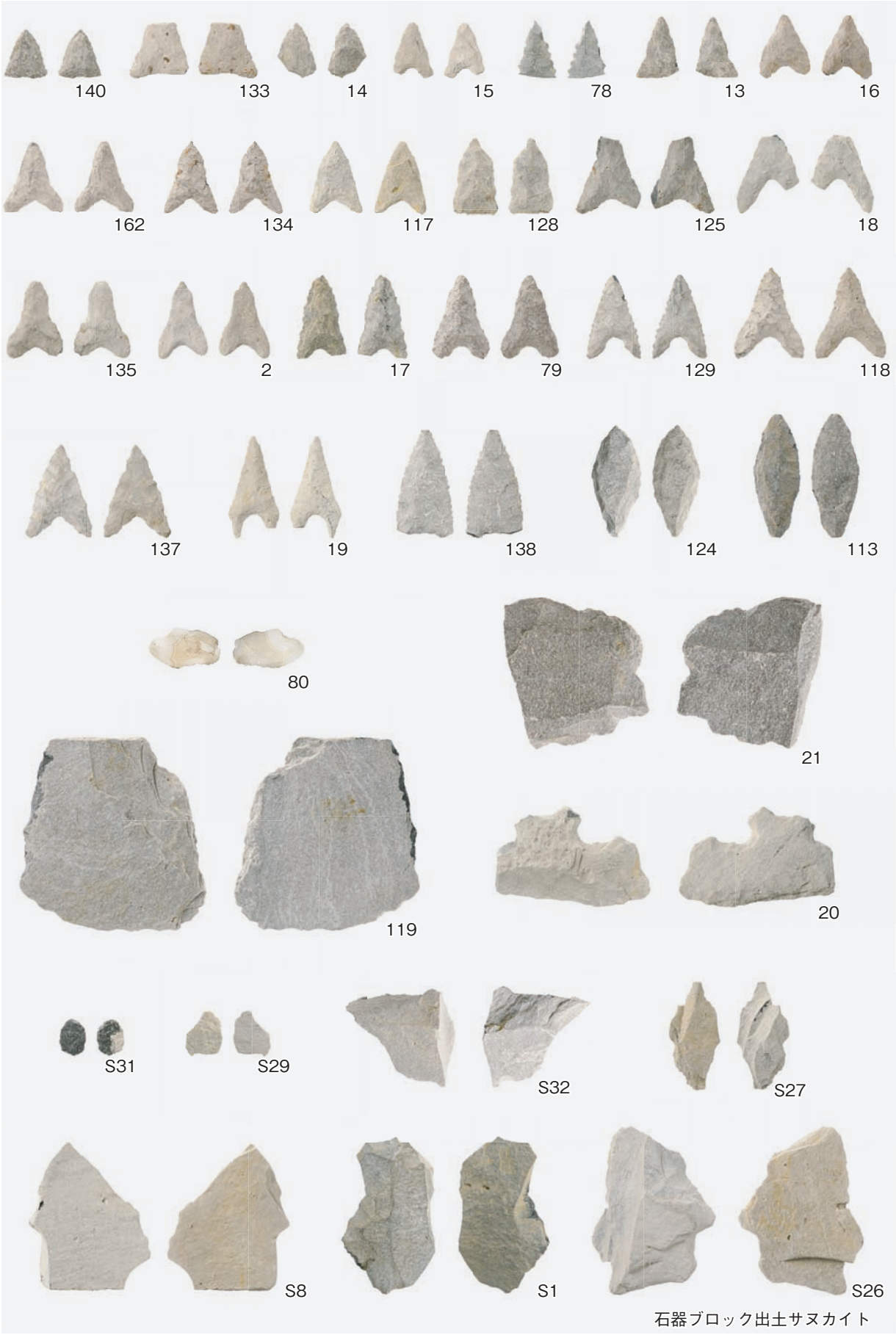
Ⅰ区　SP77 詰石出土状況
（南より）

Ⅰ区　SP75 詰石出土状況
（北より）

遺跡遠景（南より）

図版 22　遺物写真





石器ブロック出土サヌカイト

報告書抄録

ふりがな	きたぎしみなみいせき
書名	北岸南遺跡
副書名	国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	第５冊
編著者名	蔵本晋司（編）、株式会社古環境研究所、株式会社加速器分析研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社、竹原弘展（パレオ・ラボ）
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒 762-0024　香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 TEL.　0877-48-2191　Mail.　maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行機関名	香川県教育委員会
発行年月日	2017 年３月 15 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
北岸南遺跡（きたぎしみなみいせき）	香川県丸亀市（かがわけんまるがめし） 飯山町東坂元（はんざんちょうひがしさかもと）	37202		34° 26′ 26″	133° 85′ 17″	2011 年９月１日～ 2012 年１月 31 日	2,100㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北岸南遺跡	集落	縄文時代／弥生時代後期～終末期／古墳時代／中世／近世	掘立柱建物／土坑／溝／地鎮遺構	弥生土器／石器／須恵器／土師器／黒色土器／土師質土器／緑釉陶器	12 世紀の大型掘立柱建物と四面庇建物を検出

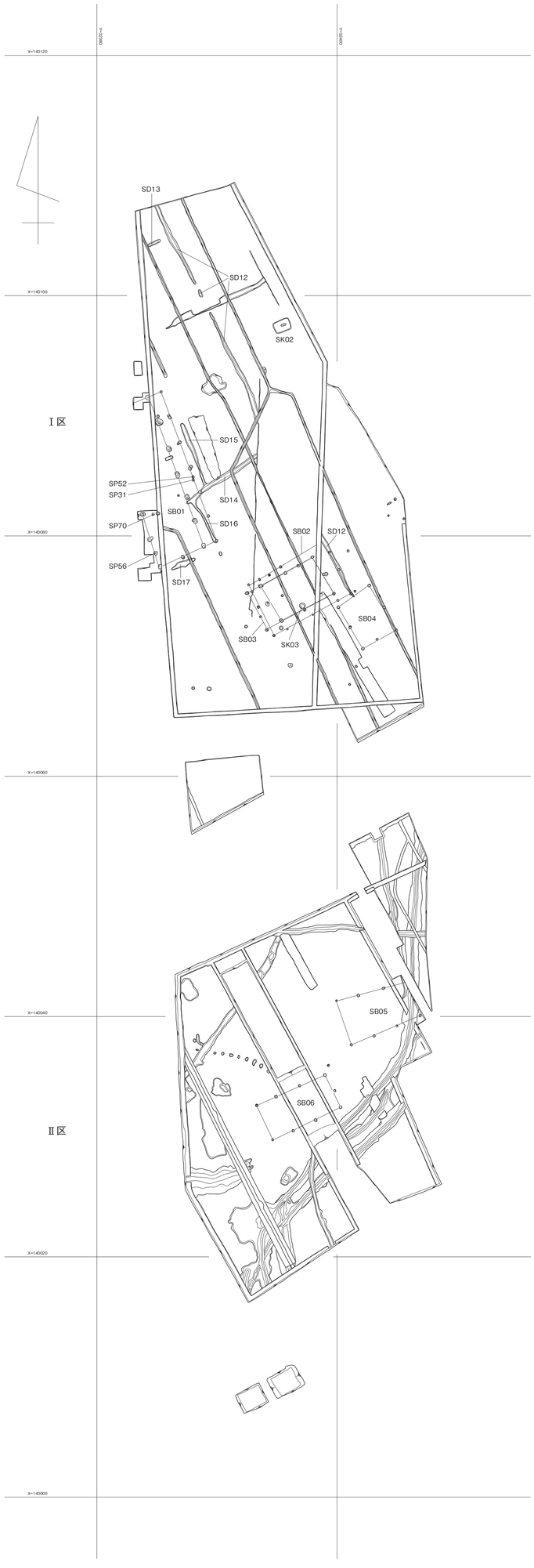
要約	遺跡は、大束川右岸の河岸段丘上に立地する。弥生時代後期～終末期の遺構面を形成するベース層より、縄文時代に遡ると考えられる石器が出土した。また、弥生時代後期～終末期には、大型灌漑水路を含む複数の水路群を検出し、遺跡周辺が水田等の耕作地として開発されていたことが判明した。そのほか、12 世紀代の大型掘立柱建物と四面庇付建物が検出され、有力者の屋敷地として利用されていたことも判明した。

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第５冊

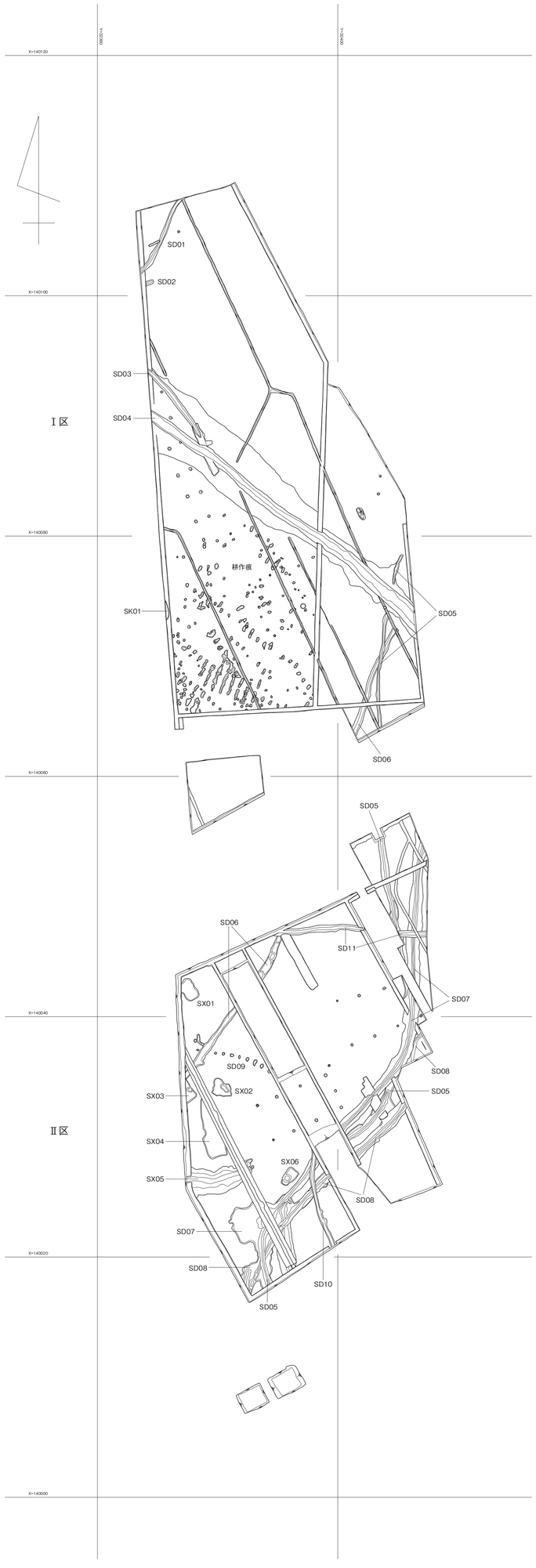
北岸南遺跡

2017 年３月 15 日
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4
Tel 0877-48-2191
E-Mail　maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行　香川県教育委員会
印刷　（株）美巧社

1面



2面



0 10m
(1/200)

付図　北岸南遺跡平面図